

---

# IS カオスに原作ブレイク

零崎哀識

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS カオスに原作ブレイク

### 【NZコード】

N0464T

### 【作者名】

零崎哀識

### 【あらすじ】

原作知識を持つた転生者の零は一夏に巻き込まれてIS学園に入学した。

## 入学初日午前中（前書き）

『バカとカオスと原作ブレイク』がスランプです。  
そもそも勢いで書いていたのでなると思つていましがなりました。  
今回も暴走で書いています。

## 入学初日午前中

いきなりだが、俺には原作知識がある。

いわゆる転成者だ。

そのことに気付いたのは幼なじみの一夏と一緒にエウを触つて起動させた時だ。

ファースト幼なじみの称号は俺にあるぜ！

紹介での現実逃避はやめよつ。

はつきり言おう。物凄く家に帰りたい。

ホームシックってわけじゃない。

視線が俺と一夏に集中してつからだよ！

俺と一夏以外女。

羨ましいと言つた奴は前に出やがれ！

ストレスで死ねるぞ！

千冬「織斑！早く自己紹介をしろ！」

一夏の奴、千冬さんを怒らせちゃ駄目だろ。

出席簿アタックが来るぞ。

スパーーン！

ほら来た。

つて俺の頭が痛いのは何故？

千冬「織斑零！自己紹介をしきりに言つてるだろー。そんなことも曰  
来んのか貴様はー！」

零「すみません」

そういうや俺も織斑でした。

少し話そつ。俺は千冬さんと東さんに拾われた。

篠ノ之だつた頃もある。

育てて収穫とか言つていたが一人は野菜でも作つてるのだろうか？

クラスメートにも自己紹介しないとな。

零「織斑零です。よろしく頼む。名字が千冬さんと一緒にだが  
血は繋がっていない。義理の弟という訳だ」

『普通の姉弟つていいけど義理つてのも良いわね』

『私の義理の弟になつて欲しいー』

何故に騒ぐ？

零「モツトーは女尊男卑クソ食らえで、最後に一夏が危険な田に合  
わないよつに俺が守ります」

『一夏×零』

『一夏くんのヘタレ受け』

千冬「少し黙れ貴様ら！ それと織斑は言動に気をつけろ！」

零「あの事件で何も出来なかつた自分が嫌なんですよ。あと織斑女  
史。二人織斑がいるので紛らわしいです」

千冬「しあうがない。二人は名前で呼ぶか」

『ズルーリ！』

『私達も名前で呼んでください』

『私も名前で呼ぼ』

また、千冬さんの雷落ちるだ。

スパーーン！

おかしい。音は一つなののみんな頭押さえてるよ。

ショートホームルーム終了

一時間目

一 夏「全部分かりません」

山田「全部ですか」

さすがに全部は酷いだろー山田女史が困ってるだろー。

千冬「入学前に読むよつこ言つた参考書はどうした?」

一 夏「捨てました」

スパーーン!

一 夏、お前が悪い。

一 夏「いや、だつて零の奴も捨ててたし」

千冬「それは本当か零?」

俺に振るのー? ?

零「内容全部理解してますから」

『 『 『えつーへ』 』 』

千冬「なら説明してみる」

零「分かりました。まずHUTとは~~~

## キーイングーンカーンーーン

零「～～～という訳です。時間なので終わりにします」

パチパチパチパチ

クラスから拍手が起る。

山田「すじこですね。私なんてその半分しか理解していないのに」

それは教師としてどうだ?

一夏「勉強教えてくれ」

零「別に構わんが」

『私達もお願ひします!』

山田「先生も」

果てしなく疲れる事にならうだ。

セシ「ちよつとよりしくて?」

零「よろしくないから帰れ」

セシ「まあなんですのー!そのお返事!わたくしに声をかけられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度を示すのではなくて?」

零「わーいーやつたー!」

セシ「わたしをあなたへつて出す」

零「YES OF COURSE-(ベシ-ソンナコトナマエ)」

一夏「本音と建前が逆だぞ。しかも、本音が英語で建前が片言つて立ち悪いな」

零「しようがないだろ。俺のモッターは女尊男卑クソ食らえ。その塊のようなこいつもクソ食らえ」

一 夏「ははは。悪いな。えーと名前なんていつの？」

セシ「わたくしを知らない！？このセシリ亞・オルコットを？イギリス代表候補生で入学主席のわたくしを？」

一夏「零、代表候補生つて？」

零「EISのオリンピック選手みたいなもんだ」

# 一夏「ヘースゴいんだな」

セシ「そうですね！ヒートなんですね」

零「一夏。おだてるなウザいから」

一夏「悪い」

セシ「本来ならわたくしのような選ばれた人間と同じクラスになるだけでも奇跡…幸運なことなんですよ。その現実を理解してらっしゃる」

やる?」

零・一夏「「ひつわーー.」」

## ダブル棒読み

セシ「そつちの殿方もバカにしてひつしゃこますよな

零「幸運って言ひけど、千冬さんの弟と義理の弟にそれ言つても幸運でもなんでもないんだよ」

一夏「千冬ねえは天然チートだからじょうがないだろ」

セシ「くつ。まあいいですわ。わたくしは優しいのであなた達のような人間に優しく接してあげますわ」

零「優しぃって言葉を辞書で調べてこい」

セシ「泣いて頼めばエスについて優しく教えてさしあげますわ。なんたつて唯一教官を倒したエリートですから」<sup>9</sup>

零・一夏「「それなら俺も倒したぞ」」

セシ「なんですかー?」

一夏「避けたら勝手に自爆した」

零「運が良かつたな一夏。その人めつちや強かつたと思つかう

セシ「わたくしだけと聞きましたが。まあ自爆なら」

一夏「女子の中つてオチだる」

零「ちなみに俺が倒すのにかかった時間27秒。その対戦相手の教官は泣いていた」

セシ「どうせあなたも運が良かつたのでしょ」

零「俺の場合は刀を投げつけ壁に張りつけマシンガンを0距離で乱射して勝った」

一夏「えげつないな」

零「その教官がこいつと同じ女尊男卑の人間だつたからな。第一専用機持ちが倒せなかつたら笑い者だろ」

一夏「確かに国の代表が他国の教官に負けるわけにいかないな」

セシ「こんな屈辱始めてですわ！」

一夏「少し落ち着けつて」

セシ「これが落ち着いていられますか！」

キーンコーンカーンコーン

セシ「つーまた後で来ますわー！逃げないとねー良くなつてー？」

零「良くなー」

一 時間四

一 夏に勉強を教えながら授業中

『愛しの束さんから電話だよー。零くんのお嫁さんとの束さんから電話だよー。』

空気が死んだ

ハツハツハツハツ！

誰だよ。授業中はマナーモードにしておいたよー。俺はやんとしてるから俺じやないだ。

『愛しの束さんから電話だよー。零くんのお嫁さんとの束さんから電話だよー。』  
うん。やつぱり俺のポケットから聞こえる。

零「織斑女史。俺はどうすればいいんですか？」

千冬「相手が相手だ。電話に出ることを許可する

零「あらがとうございます」

零「はー」

束『電話に出るの遅いよー！放置プレイかと思ひ思ひたじやん！』

零「間違い電話か」

とつあえず電話をさる

『愛しの束さんから電話だよー。零ちゃんのお嫁さんたちの束さんから電話だよー。』

零「はー」

束『勝手に切っちゃうなんて酷いよー。』

零「はあー。いつおは授業中です。やじまとじいを束さんは理解してますか?』

束『理解してるに決まつてのじやんー。』

零「なおり質が悪いわー！」

千冬「零。代われ」

零「了解しました」

束さんに絶賛雷落とし中

零「一夏。次の休み時間に席に座かけとけよ」

一夏「零は？」

零「だから鈍感って言われるんだぞ」一夏「??？」

千冬「はあ。零代われ」

零「はー」

束『零くん。零くんといつくんのことは私が作ったのをあげるから  
!』

零「それは嬉しいです」

束『良かつた!零くんが喜んでくれて!』

零「あとあれもお願ひします」

束『別にいいけど何に使うの?』

零「一夏を鍛える為に」

束『いつくんの為か。相変わらず過保護だねーー。』

零「そんなわけではないです」

束『またまたー。じゃーね!』

零「今度は授業中は止めてくださいって切れてるし」

『束つてもしかして篠ノ内束!?』

『どういつ関係なんだろう?』

『さつき嫁とか言ってたし夫婦!?』

千冬さんの出席簿アタック

お疲れ様です千冬さん。

休み時間

一夏は簫を連れて屋上に行つた。

俺は質問攻め。

一夏がいない一人だから話しやすいから来たみたいだ。

『零くん趣味は?』

セシ「あなたは逃げなかつたみたいですね」

零「えーっと趣味は読書だ」

セシ「聞いてらっしゃるの?」

『そつなんだ。面白い本があつたら教えてね』

セシ「わたくしが話してゐるのに無視しないでください!」

零「基本的に小説しか読まないし、恋愛物は読まないがいいのか?」

セシ「…………」

『全然いいよ』

セシ「もう一人のかれは逃げたみたいですね。臆病者みたいですわね」

零「なんだ」「ハーハー」セシ「やつと返事しましたわね」

零「ちつ、何か用ですか？代表さん？」

セシ「あなたの義理の兄弟は逃げたみたいですね」

零「あいにくてめえみたいな小物と会うより重要なことがあるからな」

セシ「こ、小物！」

零「わめくな。噛ませ犬キャラがスゲー立ってるよ。噛ませ犬代表」

セシ「噛ませ犬ですって！」

キーンゴーンカーンゴーン

零「帰れ」

セシ「まだ話は終わってないですわよー！」

スパーク

千冬「席に着け」

セシ「は、はい」

三時間目

千冬「授業の前にクラス代表を決める。クラス代表には対抗戦に出る他に様々な仕事をこなしてもらつ。まあクラス長だな。自他推薦は問わない。誰かいるか?」

『はい!一夏くんを推薦します!』

『私は零くんを推薦します!』

予想してはいたが。

一夏・零「遠慮したいんだが」「

千冬「自他推薦と言つただろ。他にいなーならこの2人の中から選ぶ

零「悪いが少し話を聞いてくれ

全員が俺に耳を向ける。

零「俺はやりたいことがあるんだ」

千冬「やりたいこと?」

零「生徒会長に喧嘩売る」

『『『生徒会長に喧嘩売る!?』』』

一夏「暴力はいけないぞ」

第「零が言つてることはそういう話ではない

山田「E.S学園の生徒会長になる為の条件といつのは現生徒会長を倒すこと。つまり学園最強といつことです。零くんは生徒会長になりたいんですか？」

零「生徒会長の席は興味ありません。最強の称号と生徒会長の席の代わりにいくつか権限が欲しいだけですよ」

一夏「また、なんでそんなことを？」

零「お前を守る為」

『『『キヤー—————』』』

スパン

千冬「零。言動に気をつけないと言つただろ」

『生徒会長の相手するつていうならクラス長やつてる暇ないわね

』じやあ、一夏くんで決定つていいとド』

零「一夏ガンバ」

一夏「こいつ時に俺を守れ」

零「試練でことじで」

セシ「待ってくださいー!納得行きませんわー!」

零「立候補かー。今『じゅうじ』ことは推薦してもいいんとでも思つたのかね」

セシ「つーそういう訳ではありませんわ！」

零「じゃあどういう訳」「聖

セシ「クラス代表が極東の猿でしかも男？珍しい」という理由で選んでもらつては困ります！」

零「自意識過剰な噛ませ犬様がふさわしいですかね？」

セシ「大体、文化としても後進的な国で暮らすこと自体、わたくしには苦痛で」

力チン！ プチッ！

一夏「イギリスだつて大した自慢無いだろ。世界一不味い料理何年チャンプだよ」

零「古いだけが取り柄の国がわめくな。黙つてそのまま化石にでもなりやがれ。自慢が増えるぞ」

セシ「わたくしの祖国をバカにしますのー？」

零「先にバカにしたのはそっちだる。それともそんなことさえ分からぬくらい脳ミソが化石化してるのでー？」

セシ「くつー決闘ですわー！」

零「一夏の練習相手に丁度いいな

セシ「わたくしが練習相手！？」

零「俺がやつたらただの虐めだ」

セシ「IISを一回動かしただけの猿が

零「5642194回でブルーティアーズは『打鉄』」

セシ「なんですかそれ？」

零「擬似IIS起動プログラム。つまり、機体や操縦士のデータを使い頭の中でIISを動かしたり対戦を行ったりするプログラムだ。それを使った回数とその中でブルーティアーズに対して使った機体だ」

クラスが騒めぐ。

セシ「なんでそんな物が

零「俺は篠ノ之性だった頃に篠ノ之束の助手をしていた」

クラスが騒ぐ。

零「はつきり言って相手にならない。一夏に勝つたら相手してやる。クラス代表を決めるのに丁度いいしな

セシ「分かりました。まず、そっちの猿から相手にしましょう

零「一夏行けるな？」

一 夏 「お前が勝てるって言つたり勝てるんだろ?」

零 「俺が勝たせてやる」

一 夏 「頼むぞ」

零 「任せろ」

## 入学初日午後

### 昼休み

さつきの時間、俺達の専用機が届くと教えられたな。つーか、千冬さんめっちゃ面白いって顔してたな。

零「昼飯行くぞ一夏」

『織斑兄弟食堂行くんだ。私達も行つていい?』

織斑兄弟とまとめられてしまった。

一夏「あつ、ちょっと待つてくれ」

一夏は簫の席に行く。

口論の後、簫を引っ張つて連れてくる。

原作通り、モブキャラ退散。

俺、書き方酷いな。

さて、俺邪魔だな。

簫「一夏。本当に来週の試合大丈夫なのか?」

一夏「零がいるし、大丈夫だろ」

零「勝てるよ！」叫びしゃるが勝つかどうかはお前次第だ」

一夏「わかったの自信はどうしたんだよ？」

零「油断しそうだもん。お前」

一夏「それはないだろー。籌も頼くなー。」

零「後、お前は剣道部に入つておけ」

筹「なつーー？」

一夏「HSの勉強に専念したいんだけど」

零「HSの実施訓練だと思え。剣を握るのは重要だ。多分、一年じや剣で相手になるのは俺が筹しかいないし」

一夏「筹はやっぱ剣道部か」

筹「まあな

筹「任せとけ」

零「ヤシコアとの試合の前にHSに回すから頼むぞ」

原作通り束さんのことだから『白』が届くのはギリギリだからな。

零「あと筹。一夏には剣道だけじゃなく剣術もたたき込んである。本気でやらないとケガするぞ」

筹「分かつた」

零「食事が終わつたから席を外す」  
一夏「相変わらず食べるの早いな」

零（時間作つてやつてんだからなんとかしちゃよ）

第<sup>うつ</sup>

アイコンタクト

束さんに電話

零「束さん」

束『零くんからかけてくるなんて珍しいね』

零「頼みたい」とがあつます

束『いつくんの為でしょ?』

零「えううう。あれ、つまり擬似工<sup>じ</sup>起動プログラムを送つてください。どうせ一夏の『由式』はギリギリに届くようになりますつもりでしょ?』

束『送る機体ど<sup>う</sup>ひか私の考え方まで読むなんて天才だね!』

零「あなたほどでは」

束『それほどもあるかな?いいよ。今日中に届くよ!』

零「ありがとうございます」

束『おれこの姉ちゃんって呼んでー。』

零「わざわざ」

束『送りなこよ』

零「束お姉ちゃん」

束『零くんは素直だね！過保護なんだかい。一夏くんに嫉妬しちゃうよ』

零「それじゃ」

束『また仕事手伝つてね』

これで準備は完了だな。

キーンゴーンカーンゴーン

放課後

山田「あ、零くん達まだ教室に居たんですねー良かったー！」

零「山田女史。どうしたんですか？」

山田「あ、はい。のですね。零くん達の寮の部屋を伝えに来まし  
た」

一夏「あの先生?俺達って1週間は自宅からの通学じゃ」

山田「そのう。実は政府の方から通達が来ちゃって」

保護つてことか。

自宅に来たマスコミや研究者を追い返すのも面倒だしな。

一夏「まあ大体の事情は理解しました。分かりました」

一夏も分かったみたいだな。

山田「そうですか。良かった」

零「荷物はどうなるんですか?」

千冬「お前達の部屋に送つておいた。着替えとケータイの充電器があれば平氣だる」

一夏「俺のマンガは?」

千冬「そんな物必要ないだろ」

零「俺のパソコン」

千冬「データは持つてきた。パソコンは寮のを使え」

零「ギリギリセーフ」

寮内

原作では零とチャンバラするところだが、俺と同じ部屋だから起きてない。

零「一夏。お前には近接オンリーで戦つてもいい」

映像を使った作戦会議中

一夏「大丈夫なのか?」

零「逆に聞くが銃を使った経験は?」

一夏「ない」

零「といつ訳だ。その分お前の剣は剣道の試合じゃ使えないがISなら生きる」

一夏「なるほど」

零「それにセシリアは近接系の武器はあまり使わない」

一夏「使わない?」

零「間合いを詰められても使わないことが多い。いまどくねと使えないと言った方がいいかもしれないな」

原作でもわざわざだったし。

零「ブルーティアーズの一一番の武器は6つのペリト。4つは見えるが自分の近くに2つ置いてある

一 夏「6つもあるのか」

零「だから避けろ」とを重點的に覚えてもらひ

一 夏「攻撃と防御は?」

零「防御は攻撃に当たらなければ必要ない。攻撃は剣の扱いで分か  
るはずだ」

一 夏「分かった」

零「多分だがお前の武器は千冬さんと同じだ」

一 夏「千冬ねえと…?」

零「ゲームに例えるとHPを消費して強い攻撃を下げる刀と思えば  
いい」

一 夏「燃費が悪いな」

零「今から擬似LS起動プログラムで徹底的に練習してもうつから  
な。いいな」

一 夏「承知の上だ」

零「今日中に動かし方を覚えろ」

一 夏「了解」



## 2回目（前書き）

抜けた場所があるので一日消しました。  
すいません。

朝食

一 夏「キツい」

零「いつもお前が言つてただる。朝食は沢山取ると」

一 夏「昨日、あんなにやつたのになんでそんなに元気なんだよ?」

零「束さん相手に慣れてるからな」

一 夏「相変わらずチート臭いな」

零「天然チートの実の弟のセリフじゃないだろ」

スパン

零「関羽」

ズドーン

零「それ、もう出席簿で出せる音じやないだろ?.....」

バタツ

ブラックアウトしました。

3時間目

千冬「やつと気がついたか

零「やつた本人がそれを言いますか？」

千冬「私はからかわれるのが嫌いだ」

零「授業はいいのですか？」

千冬「山田くんに任せである」

零「それはそれで大丈夫か？」

千冬「教師をバカにするな」

零「別にバカにはしてませんよ」

千冬「一つだけ質問に答えり

零「嫌です」

千冬「命令だ」

零「ズルいですね」

千冬「なんで避けないんだ？」

零「避けてよかつたんですか？」

千冬「なら氣絶してる時間が長いのはなんでだ？前のお前なら一時間で目覚めたはずだ」

零「質問は一つのはずです」

千冬「一夏の為だな?」

零「黙秘権を」

千冬「存在しない」

零「酷いです」

千冬「何故そこまでする?」

零「家族の為に努力するのは当たり前でしょ」

千冬「一夏は強いぞ」

零「確かに一夏は強いです。けど力が無いですよ」

千冬「力が無い?」

零「あいつはね、全てを守りたとしてるんですよ。下手したら敵までも守りたとしてる。だったら俺があいつを守るしかないじゃないですか」

千冬「そんなこと続けたら、お前が潰れるぞ」

零「別にいいですよ。それまでに一夏に力を与えます。そしたら一夏に守つてもらいますから」

千冬さんが抱きしてきた。

零「教師と生徒がマズいですよ」

千冬「姉弟としてだ」

零「千冬さん」

千冬「姉さんと呼べ」

零「多分だが、抱き締めた辺りから扉の前に一組生徒がいる」

千冬一「？」

一夏「逃げろ！」

山田：お、織斑くん。待ってください！」

ダダダダダダダダダダ！！

千冬一貴様ら全員校庭100周だ！」

零「お疲れ様です。姉さん」

千冬「さりき家族だから当たり前と言つたな?」

零「まあ

千冬「なら姉の私からだ。自分を大切にしろ。一夏とお前を守るのを手助けする」

零「カツ」**コ**「い」ですね

千冬「お前らの姉だぞ」

零「でも、男よりカツ」**コ**「い」から婚期遅れますよ

千冬「もう少し寝てる」

ズドーン！

零「だからその音はおかしいだろ」

バタツ

ブランクアウト

千冬「それにお前がいるからな」

6時間目

結局、目が覚めたのは昼休み終了時。

昼飯食えなかつた。

他の奴よりマシか。

昼休みに休憩が入ったみたいだけど現在進行形で走ってるし。

食つたら逆に吐くな。

俺は1人になってしまったのだが、やることはある。

『白式』より先に俺の専用機がついた。

束さん。それをやるなら一夏の送れ。

しかし、来ちゃった物はしょうがない。

最適化を行つている。

こいつの名前は『灰被り（シンテレラ）』

最適化完了

『灰被り』が俺の専用機になる。

機体の色のベースはグレー。

ヘッドパーツは目を隠す形になつていてと翼の羽が一枚一枚ひし形で別れてるのが特長。

武器は腰のガンブレード一つ。

この機体、『白式』と『紅椿』と同じ第四世代だ。

この機体ってあいつか！？

能力高いが一般人じゃ扱うの無理つて言われたじやじゃ馬か！？

そのせいで灰ビームが埃被つてた。

零「誰か相手してくれる人居ないかな？」

千冬「私が相手してやるわ」

零「お断りします」

千冬「安心しin。使うのは『打鉄』だ」

零「はつきり言つて」この扱いつてクソゲー並みき難しいんですねー。」

千冬「問答無用！」

キーン」「ーンカーン」「ーン

千冬「これで終了か

零「一応、引き分けですね」

千冬「今度やる時は専用機を使わせてもらひw

零「勘弁です」

千冬「貴様のことだ。そんなこと言つて互角の勝負をするだらうが。私は強い奴と戦うのが好きなんだ」

零「この戦闘狂<sup>バトルマニア</sup>が。それならナメック星にでも行つてください」

千冬「球を7つ全部集めて、ギャルのパンティーを貰つてきた」

零「まさかの返し…？」

千冬「他の者も走り終えただろう」

とこつ訳でグランド

死体の山が出来てるよ。

俺はじつちかといふと血の海派なんだが。

零「おーい！一夏？」

返事が無いただの屍のようだ。

攻撃

魔法

道具

逃げる

零「ザラキー！」

全員『何故そこで全体即死魔法！？』

零「ほら生き返った

一夏「まあいいか」

いいんだ。

一夏「今まで何してたんだ?」

零「千冬さんと運動」

千冬「零の奴もなかなかやるが」

一夏「なつ」

零「俺は断ったんだけどさ」

千冬「何を言つてこい。途中から楽しんでいたじゃないか。あんなに激しくしおつて」

零「誰のせいで激しくなったと思つたんですか。こいつの体力が持ちませんよ」

千冬「それは最後までやつきた者が言つたつではないだれ」

山田「織斑先生と零くんがあんなことやこんなこと……」

一夏「俺には同じ年の兄が出来るのか……」

竇「私も一夏と……」

なんか周りがトロッパしてゐる。

泣いてる奴や鼻血出してる奴、気絶してる奴もいるし。

そんなにキツかつたのかグラント100周？

零「それにしても俺の専用機はキツいわ

全員『はつ』

千冬「久々に大会の気分を味わえたぞ」

篝「あのーちょっとといいでですか？」

千冬「なんだ？」

篝「なんの話してんですか？」

千冬「『はつ』はHS学園だぞ。HSについてに決まってるだろ」

セシ「オ、オホホホホ。わたくしはHSのことだとはじめから分か  
つていましたわ」

一夏「良かった。零はまだ双子で親友だ」

山田「そうですかー私はてつきつ、むぐつー？」

クラスメートに口を抑えられ拘束。

うん。やっぱカオスに限るね！

一夏「零。お前の専用機が来たなら俺のも」

零「なー」

一夏「なんでー?」

零「相手があの東さんだから面白いところの理由で、ギリギリに送り込んでくる」

一夏「否[既]だきなー」

零「今日のメニューは道場でやるからな。一回クールダウンして」

一夏「今日はへりこむー」

零「勝ちたくないの?」

一夏「分かったよ」

零「夜までは延ばさないから心[安]心[ゆ]く」

一夏「良かつたー」

零「お前には防具無しで戦つてもいいからな」

一夏「はー?」

零「剣で受けのむも無し」

一夏「マジかー?」

零「マジ」

一夏「はーー対戦相手は?」

零「今日は籌だけでいいや」

一夏「今日はつてことは次回はお前が参加するのかー…？」

零「参加してほしいのか？」

一夏「一対一でいい勝負なのに籌と一緒に死ぬ」

零「冗談だ」

一夏「良かった」

零「剣道部からあと9人借りて10対1でやってもらひ

一夏「良くなー！」

遅  
い

『白式』がまだ届かない。

「しようがない。届くまでマーティングするぞ」

一夏「ああ」

零「この分だと試合中に最適化することになるとと思つ。その間は攻撃に当たらなければいい。それだけ考えろ」

一夏「分かつた」

零「最適化が完了したら、避けながら武器を使うタイミングを感じろ。そうじゃないとエネルギー切れという間抜けな負けかたをするからな」「

一夏「分かつてる」

山田一夏くん一夏くん一夏くん一夏くん一夏くん！」

零「慌てないでください。山田女史」

山田「届きました！一夏くんの専用機『白式』が！」

一夏「これが俺の専用機」

零「どうだ？」

一夏「すいぐ馴染む。こつがなんの為にあるのか分かる」

千冬「気分はどうだ？」

一夏「大丈夫だ千冬ねえ。それじゃ行つてくる」

零「行つてこい」

篠「勝つてこい」

そして一夏は飛んだ。

一夏サイド

セシ「あら。逃げずに来たみたいですね」

一夏「零のプログラムのおかげで調子がいい」

セシ「最後のチャンスをあげます」

一夏「もし、一週間前から変わつてないなら勝負しない方がいいぞ」

セシ「どうこうですの？」

一夏「俺の師は凄すぎるみたいだ」

セシ「あなたこそ泣いて謝れば許してあげますよ」

一夏「それがチャンスか？それはチャンスとは言わないし、チャンスだとしてもそれをするメリットが無い」

セシ「なら、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

一夏（見える）

ブルーティアーズの攻撃を紙一重でかわす。

セシ「ギリギリ避けましたわね」

一夏「武器を出すか」

『近接ブレード』

一夏（やつぱ近接オンリーか）

セシ「中距離射撃型の私に近接格闘装備で挑もうなんて笑止ですわ」

零サイド

零「一夏、勝ったな」

山田「そうですか？私はオルコットさんの方が優勢に見えますけど。ほひ、また当たりそう」

零「だったら賭けをしましょう。負けた方は次の休日にフルコース

を着るのめんどりですか?」

山田「良こそですか?」

千冬「教師の前で賭け事か?」

零「やひせー夏が千冬ねえと呼んだ時に起じらなかつたから今はプライベートだしょ。千冬さん」

千冬「くつ確かにねづか」

零「賭けはもう成立しました」

千冬「はあー、山田くん。ここでの勝つてこむフルコースは給料の半分はかかるわ」

山田「えつーー?でも、勝てば?」

零「やひせはギリギリ避けてるのではなく、ギリギリで避けているからでした」山田「違ひのですか?」

山田「運がいいから?」

零「答えはギリギリ避けてるのではなく、ギリギリで避けているか

千冬「全然違ひ。一夏は攻撃を全部見切つている。零、お前何をした?」

零「防具無し10対1で剣道」

山田「ー!?」

千冬「お前が過保護なのかスバルタか分からなくなる」

零「10本の剣に比べたら6つのピットなんて紙飛行機同然。後はプログラムでブルーティアーズはどんな物か体験させてやればいい」

山田「私のお給料が」

千冬「お前が教師をやつた方がいいんじゃないのか?」

一夏サイド

セシ「なんで当たりませんの!?」

一夏「零が言つてた通り、お前には足りない物が多くあるー。」

前日

零「戦いに重要なのは勝てる要素を揃えることだ」

一夏「普通のことじゃないか?」

零「なら、俺が居なかつた場合にお前はセシリ亞にどうやって挑むつもりだった?」

一夏「篱辺りにEISの動かし方を教えてもらつて」

零「それは自分の力を上げるだけだろ。自己の力も勝てる要素の一つだが、それだけじゃ足りない。少なくともセシリ亞の方がEISの

実力と経験は上だ

一夏「確かに」

零「そこで俺がお前に揃えたのはブルーティアーズの情報、そこから考えた戦い方と作戦、それを行う為の力」

一夏「1週間で揃うのか普通？」

零「普通は無理だ。だが、俺が束さんの所から帰ってきてからお前に剣を握らせてただろ。それがあつたから可能なんだよ」

一夏「なんか零がセシリアに勝つみたいだな」

零「違うよ。勝つのはお前だ。俺は手伝うだけだ。だから拗ねるな慢心するな。冷静になれ」

一夏「拗ねてねーよ

回想終了

一夏（あいつには情報、作戦が無い。しかも、慢心していた。だが、そんなことで慢心はしない。冷静に戦う）

その時、《白式》が光る。

最適化完了

一 夏「来た！」

セシ「ま、まさか…………」ファーストシフト一時移行！？あ、あなたまさか今まで初期設定であそこまで戦っていたの！？」

一 夏「そつだよ。これでやつと俺専用になつたみたいだな」

『近接ブレード 雪丘一型』

一 夏（これが千冬ねえの武器）

一 夏「まったく俺は最高の家族を持つたよ」

ピットの一矢をたたつ切る。

一 夏「待たせたな。これからが本番だ」

零サイド

第「行ける行けるぞ！一夏！」

一 夏が2機目を落とした。

千冬「あの馬鹿者」

零「あれだけ言つたのに」

山田「2人共どつしたんですか？」

千冬「良かつたな山田くん。勝機が見えたぞ」

零「浮かれてやがる」

山田「どうこいつですか?」

千冬「わざわざから左手を開いたり閉じたりしてるだら?」

零「あれはあいつのクセで簡単なミスをするんですよ」

山田「へえーー。ですが御姉兄弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

千冬「ま、まあなんだ。あれでも私の弟だからな」

山田「照れてるんですかー?」

千冬のヘッドロック

山田「イダダダダダダーーー!」

千冬「私はからかわれるのが嫌いだ」

山田「は、はい!分かりましたから放し————あううううつ!」

零「負けたら賭けのフルコースの料金払つてもりつかりな。一夏」

一夏サイド

一夏「四機目ー!」

一夏（残りはセシリアの横の一機。なう、セシリアを直接とる。）

一夏「いつけ――――――！」

セシリアの攻撃はレーザー。一夏の《雪片一型》は切ることが出来るので切りながら進む。

零サイド

零「あ、分かつた」

千冬「何がだ？」

零「一夏がどんなミスをしたか」

第「分かつたのか―？」

零「ああ。あの馬鹿はせっかく回避の訓練してやったのに《雪片一型》になつてから攻撃を全て切つてる。しかも結構エネルギー使って」

山田「ところでとは」

一夏サイド

画面が赤くなつた。

一夏（しまつた！エネルギーが…）

ヤシロアの田の前に立る。

一夏「あと少しもぢやがれ————！」

《試合終了 勝者 織斑一夏》

## 生徒会長×Sオーラキャラ（チート？）

はあー。ちゃんと原作が壊れたか。

それでは、俺も学園最強になりますか。

生徒会室

零「失礼します。生徒会長さんぶつ倒しに来ました」

楯無「織斑くんだけ？」

零「覚えていただき光榮です？生徒会長さん」

楯無「珍しい男子生徒だからね」

零「そりゃそうか」

本音「ゼロッちだー！」

零「ゼロじやなくれいだ。本音」

本音「ゼロッちだー！」

零「傑作だぜ。それより相手してもらえます？」

楯無「良いわ。かかるて来なさい」

零「I'I'dやるんですか？」

楯無「ええ。仕事があるし」

零「別にいいですけど」

スパン！

楯無の後ろのカーテンが切れる。

楯無「躊躇なく首を狙つたわね」

零「相手は学園最強様ですから」

楯無「今、何やったの？」

零「分からぬで避けたんですか？」

楯無「殺氣を感じたから」

零「凄いですね。でも教えません

本音「今、ゼロつちはねー。届けこのよつよつひで斬激を飛ばした  
んだよ」

のほほんさんつてそんなキャラだったの！？

楯無「そう。ありがとう本音」

零「本音が見破ってるのに学園最強が見破らないでどうするんです  
か？」

楯無「無茶言わないでよ。本音の見切りに勝てる奴なんていないんだから」

一種の天才か。

楯無「やつぱり場所を移しましょう。第五アリーナなら今空いてるみたいだし」

零「嫌です。」レで殺します

楯無「実力を見誤ったのは謝るから。私と君、どちらも本気を出したら被害が洒落にならないからね」

そつ<sup>ソツ</sup>言つて楯無は扇子を振る。

楯無「この糸でトドメをさす作戦は使えなくなつたから

扇子を振つた時に仕掛けていた糸を切つていた。

この糸に飛び込んでいたら体はバラバラになつていた。

零「分かりました。決着はISにしてあげます」

楯無「ありがとうね」

ISスースを着用してから集まることになった。

第五アリーナ

楯無「君のヒツの翼綺麗だね」

ヒツの色を少し修正します。

翼とガンブレードのブレードの刃の部分の色はシャボン玉のようなクリアです。

零「ヒツとヒツ始めましょう

楯無「つれないわね。本音」

本音「れでいー」「ーー！」

開始と共に俺はガンブレードの《謝肉祭》マシニータで散弾を連射する。

楯無は弾の雨を流れるようにかわしていく。

レベル的に予想通りだがな。

楯無「行くわみー」

楯無は《ラステイ・ネイル》、零は《マンイーター》で接近戦を開始した。

零「その武器はこんな近距離で使う物じゃないですよ。やりついでしちゃう?」

楯無「ちょっと接近戦をしたくなつただけよ

零「お得意のナノマシンですか?」

楯無「！？」

零「調べさせてもらいました」

楯無「零くんって私のストーカーだったの？驚いたやつだ！」

零「口・口・ス！」

楯無「わやーっ！怖ーい」

楯無は瞬間に距離をとる。

楯無「クリア・パッショーン！」

零の周りの温度が上昇する。

だが、

楯無「シールドエネルギーが減つてない！？」

零「調べて対策しない馬鹿はいないでしょ！」

零の周囲には《シンペテレラ》の羽が何枚かついている。

零「学園最強と戦うんですよ。37枚も防御にまわさせてもらいましたよ」

楯無「その翼の羽はまさか全てビットー？」

零「正確です。左右共に50枚ずつ計100枚全てがビット《前夜祭》です」

「そんなの使い切れるなんてチートね」

零「努力の賜物ですよ」

零は『マンイーター』で追撃をする。

楯無は水のナノマシンで防御する。

「ばれてるんだから惜しみなく使わせてもらひわ

零「こつちも《カリーバル》を乱用させてもらいますよ」

零「気付きましたか」

楯無「そつちのガンブレードは実弾だけじゃなくて衝撃波も出せる  
なんてね」

零「《マンイーター》の弾の種類は20を越える」

『マンイーター』から散弾、衝撃波、レーザー、ミサイル等を乱射

ある。

楯無「くつー」

ナノマシンで防御する。

零「まだまだ行きます」

零がさつきと同じ攻撃をしようとした瞬間に楯無は《蒼流旋》に武器を替え、イグニッシュョンブーストで一気に間合いで詰める。

楯無「なら接近戦に変えるわー！」

零「イグニッシュョンブースト使えたんですね。ですが《マンイーター》に苦手な間合いは無い！」

《マンイーター》で楯無の《蒼流旋》を流す。

それが合図に攻防が始まる。

お互いのシールドエネルギーは減っていく、

楯無が一旦距離を置き、零がそれを詰めよつとしだが、

零「動かねえ」

楯無はナノマシンを零に吹き続けていて、それを蒸発させずに、固定させたのだった。

楯無「それじゃ決着ね。羽がほとんど無くなつた《シンテレラ》は

可哀想だし

楯無はトドメをさす為に《蒼流旋》を構え飛んでくる。

零「やつと氣を抜いてくれたよ」

楯無を赤い衝撃と透明な羽が巻き込む。

零「《赤き制裁》」

《赤き制裁》オーバーキルレッジはほとんどのビットを攻撃に回して使う大技。正面からか罵の如くにしか発動出来ず、防御が疎かになり過ぎる。ビットが出すエネルギーとビット自体が攻撃する形になっている。

本音「勝者ゼロッち」

零「あつ、やばつ」

楯無のシールドエネルギーが切れたと同時に赤い衝撃が消える。

IISが解け、楯無が落ちてくる。

零はそれを受け止める。

零「大丈夫ですか？」

楯無「全然ダメだから看病お願ひね」

零「虚せんに任せますから」

楯無「勝手に部屋に行っちゃうから」

零「一夏もいるんですけどから」

楯無「居ない時に行くなら良いでしょ?新生徒会長さん?」

零「要りませんよ。生徒会長の席なんて」

楯無「だつたらなんで挑んだの!?」

零「お願いを聞いて欲しいからですかね」

## クラス代表

『クラス代表就任おめでとう。』

山田「一年一組クラス代表織斑一夏。一つながらで良いですね」

『せっかく男子がいるんだから持ち上げないとね！』

一夏「はあー。そういうやこれ賭けて戦つてたんだったな」

零「俺はフルコースを賭けてたぞ」

一夏「俺もそっちの方が良かつた」

山田「私の給料が……」

薰子「新聞部の薰子です！話題の新入生の織斑一夏くんに取材にきました！」

零「一夏ガンバ」

一夏「他人事だと思つて」

零「余裕で勝てるようにしてやつたのにヒヤヒヤさせやがつて」

一夏「うう」

薰子「ではズバリ一夏くん。クラス代表になつた感想は？」

一 夏「えーっと頑張ります？」

薰子「もーインパクト薄いなー。俺が勝つたらお前もハーレムだ!  
くらい言つてくれればいいのこ」

一 夏「誰が言つたそんなんことー。」

薰子「まあいいわ。セリフはこっちで勝手に捏造するから」

一 夏「聞いてはいけないセリフが聞こえたんですけどー。」

薰子「もう一人の男子の織斑零くんはどこかな?」

嫌な予感しかしない。

逃げるか。

山田「こいつに零くんがいますよーー。」

零「なつー。」

薰子「今、行きまーすー。」

逃亡失敗

アイコンタクト

零（山田女史ー・わざとでしょー。）

山田（なんのことですかー？）

零（とほけなこでくださこー）

山田（私のお給料でいじけてる感じなことですよー）

零（まだ引きずつてんのかー）

山田  
ふん

零「はあー」

薰子「それでは零くんにインタビューーー。」

零「捏造するなら必要無いんだじゃないですか？」

薰子「インターネットしたって事実が欲しいんだよね」

零「じゃあインターネットを拒否します」

薰子「捏造しないからお願ひーー。」

零「嘘ついたらフルコースですよ」

薰子「分かった分かった。それじゃ質問です。生徒会長を倒そうとしてると聞いたんですが、本当ですか？」

零「本当です。つーかもう倒したし」

全員『えええ-----』

『てことは学園最強がウチのクラスに居るってこと?』

『大会とか総なめじやん』

一夏「さすがだな零は」

篠「一夏も腕を上げていたが、零はどんなレベルまで上がってるんだ」

セシリ亞「本当に凄かつたんですね。そんな方に喧嘩を売つてたなんて」

薰子「じゃあ、新生徒会長さん?」

零「いや、みんなには言つたが生徒会長の席には興味無い。学園最強の座と生徒会長に頼みたいことがあつたからそれを聞いてもらひう為だな」

薰子「で、その頼み」ととは?」

零「それは秘密」

櫛無「私と付き合つことだよー」

『えええ――――――――――――――――?』

さつきより驚きが大きいし、てか

零「なに出任せ言つてんですかー櫛無さん!」

薰子「名前でよんでもーーー？」

零「樋無さんがあつたよ」

樋無「またまた照れちやつて———」

千冬「うるさいので来てみたら面白こと」が聞こえたんだが山田くん、これは私の幻聴か？」

山田「いえ、現実です」

千冬「そつかそつか。てっきり私の耳がおかしくなったのかと思つたよ」

山田「私をデート（賭けのフルコース）に誘つておきながら」

2人の目に光が無い！？

零「落ち着いてください。これは樋無さんの冗談ですから。それに一夏の為のパーティーですから問題を起しちゃダメですよ」

樋無「ごめんね！みんなの前じゃ恥ずかしいか。ダーリンー！」

零「あんた少し黙つてろー！」

薰子「零くんの記事は最初から捏造する必要無いじゃない

千冬「安心しろ零」

山田「やつでやぶるべく

零「良かった。誤解が解けて」

千冬・山田「「」の就任パーティーの間は手を出せないから（田）ませんから）」「

零「死刑宣告じやねーか！」

薰子「写真を撮りますよーー。」

楯無「私は零くんとシーショットで」

零「あんたらホントマイペースだなー。」

薰子「じゃあ最初は一夏くんとセシリアさんで、互いに健闘して感じで握手して」

セシ「その写真は貰えますのよね？」

薰子「もちろんー。」

セシ「一夏ちゃんとシーショット」

薰子「一田間を分に直したり。」

一夏「へつ？」

セシ「2828」

なるほど。二八二八（一）ヤ（一）ヤ（一）か。

クラス写真になつてゐるのは知らないが。

薰子「零くんもね」

零「面倒なんで全員で撮りませんか？」

薰子「確かにまた皆入っちゃうからね。じゃあ集まつて」

俺の周りは千々せさんと三田女史と樋無せさん。

逃がさない為だらうか？

零も一夏と同じ朴念人。

薰子「じゅあ行くよー！ほこマーチガリンー！」

語呂悪一

薰子「あらがとねー！新聞楽しみにしててねー！」

零「俺は樋無せさんと付き合つてなこですからねー！」

薰子「楽しみにしててねー！」

零「あんた聞く耳ねーだろー！」

千冬「それでは零」

山田「一通り終わりましたし」

楯無「お話ししようつか?」

力ナカナカナカナカナ!

まだひぐらしが鳴くには早いよー。

零「《シンデレラ》!」

逃げます!

山田「待ちなれー!」

楯無「先生と『テートウヒジツコウ』とー。」

千冬「EVAの使用はアリーナ以外禁止だ!」

山田と楯無もEVAを展開し、追いかけてくる。

千冬さんはなんで普通に走つてそんなに早いんだよー??

零「死んでたまるかー!」

ガシツ!

あつ、死んだな。

千冬「私が特別に稽古してやる!」

山田「先生と個人授業ですよ」

楯無「先輩が手取り足取り教えてあげる」

零「皆さん。人間には言語という物がありましてね。だから話し合いで解決の方向は」

千冬・山田・楯無「」「無い（ありません）ー」「」

零「ですよねー」

俺オワタ

## サーード幼なじみ

昨日の夜は死ぬかと思った。

いや、数回死にかけたし。

一夏「大丈夫か？」

零「今なら疲労で死ねる自信がある」

一夏「つまりダメってことか」

零「なんでお前の就任パーティーで俺が死にかけてんだ？」

一夏「それはお前が鈍感だからだ」

零「鈍感なのはお前だろ」

篇・セシ（（やひもだりつ（ですの）））

一夏「そつこや転校生が一組に来るんだってな」

零「昨日、リアル鬼！」としてる時にそれっぽいの見かけたぞ

篇「中国の代表候補生らしいぞ」

セシ「わたくしの存在を危ぶんでの転入でしょうね」

零「なわけねーだろ。代表候補生は他の学年にもいるんだから。そ

れに時期が遅いしな

一 夏「別にウチのクラスに来る訳じゃないんだからどうでもいいだ  
ろ」

零「それよりもお前はクラスマッチについて考えておけ」

一 夏「分かってる

セシ「でも一組と四組にしか専用機持ちはいませんからもう今まで心  
配しなくても」

? ? ? 「その情報古いよ

零「そりやつて油断するから負けるんだよ

一 夏「俺は油断はしないよ

? ? ? 「あのー

零「ミスはするがな

一 夏「それを言なよ

? ? ? 「私、泣いていいかな?」

セシ「すじこスルースキルですの

第「2人とも相手してやれ」

一 夏「はーー」

零「それでは」

一 夏「お前鈴か！？」

零「鈴？…つか。お前が一夏のサード幼なじみの」

鈴「！」の二人絶対に打ち合わせしてたでしょ！」

一 夏「本当に懐かしいな」

零「それより氣になつた」とあるんだが

一 夏「確かにちゅうと氣になる」とある

鈴「クラス代表のこと？…あれば変わつてもらつた」

一 夏・零「…なんでお前格好つけてんだ？」

鈴「馬鹿にするのもいい加減にしろ！」

バシン！

千冬「SHRの時間だ。自分のクラスに帰れ」

鈴「ううー。分かりました。逃げるんじゃないわよー一夏ー。」

鈴帰還！

篠・セシ「一夏さん、後で話を聞かせてもいいからな（もうここまでしか  
らね）！」

バシン！

千冬「早く席に着け」

-----

昼休み

篠・セシ「一夏のせいだ（ですわ）」

一夏「んな、理不尽な！？」

確かに理不尽だ。授業中に千冬さんに叩かれた数が2桁行ったのは  
自業自得だ。

零「学食に行かないか？混むぞ」

一夏「そうだな。早く行こ」

ダッシュでGO！

篠「待て一夏！」

セシ「そうですね！」

篠とセシリ亞もダッシュでGO！

零「あれ、置いてきぼり?」

とぼとぼ一人で向かいいます。

楯無「零くーん!」

声の方向から飛び蹴り!

必殺イナバウアー!

回避完了

零「危ないでしょー! 権無さん!」

楯無「あんな避け方する人が言つセリフじゃないでしょー!」

零「それよりなんか用ですか?」

楯無「実はね。頼みごとがあるんだよね。やつてくれる?」

零「内密にりますよ」

楯無「妹の専用機を作るの手伝ってくれない?」

零「分かりました」

楯無「やつぱダメかー。でも、…………って、いいのー?」

零「楯無さんの妹の簪さんでしたつけ? 彼女の専用機は一夏の白式のせいで作成が遅れてるんでしょ?」

櫛無「なんでや」「ひまで」

零「櫛無さんのことを調べた時に一緒に調べましたから」「ひまで」

櫛無「やつぱりストーカー」

零「死にたいみたいですね?」

櫛無「ウソウソウソ! それでね、この事なんだけど『櫛無』には

零「櫛無さんからだつて言わないでほしいんですけど」「...」

櫛無「うん」

零「それくらいのことは飲みますよ。ただし一夏は巻き込まないで  
くださいね」

櫛無「過保護だね」

零「うるさい。つーか、もう学食行つてる時間ねーよ」「み

櫛無「いめんねーそんな零くんにはこれをあげましょー」

櫛無は包みを出す。

櫛無「手作り弁当だよー。」

零「櫛無さんの分は?」

楯無「私の分はあるから貰ひちゃつてください...」

零「ありがたくいただきますね」

楯無「素直だねー」

零「礼は普通に言いますよ」

楯無「それじゃーね」

零「それではいただきますか」

凄いな。重箱かよ。

中身はどうなつてんのかな?

なかなか面白い形だな。

『桃』の形なんて。

味は桃の味なんて全然しないけど美味しいな。

朴念人全開中

千冬「お前は何を食つている?」

山田「誰が作つたんでしょうね?」

零「普通に楯無さんから貰つた弁当を食べてるんですけど」

千冬「なんでそんな物食べてるんだー！」

山田「零くんはお弁当なんか食べちゃダメですー！」

零「んな、理不尽なー！？」

朴念人全開中

山田「じゃあ、私が今度お弁当を作つてきます」

零「いいんですか？」

千冬「なら、私も弁当を作つた」

零「一重にお断りします」

千冬「何故だ！」

零「マンガみたいに砂糖と塩を間違える人は練習してからにしてくださいー！」

山田「ああ。よく間違えちゃこま出すよな

零「アンタもか！？」

一夏「これは一体どうした状況だ？」

零「俺が教えてほしーよ」

## 休日(リースト?) (前書き)

写真を撮る時の掛け声の計算を//入つてました。  
すいませんでした。

## 休日(トート?)

一 夏サイド

千冬「あんなにくつつきおつて…………」

一 夏「千冬ねえ、いい加減止めよ!」

千冬「うるせー。フルコースを食べさせてやる!」

一 夏「よし。続けよ!」

千冬「分かればいい」

楯無サイド

楯無「昨日、簪のことをお願いしたのに……」

虚「今日は学校が休みだからじょうがないんじやないですか?」

楯無「あつー動いた」

虚「聞いてないし」

楯無「早く行くわよ」

虚「私、何してるんだろ?」

今田の朝

零サイド

零「今夜、フルコースの予約しておきましたか?」

山田「分かりました。それまで遊びに行きませんか?」

零「ここですよ。それくらいお付き合っておませよ」

山田「お、お付合いは

零「え? どうしました?」

山田「な、なんでもありますせん...」

零「そうですか。じゃあ、行きますか?」

一夏「行つて、さじて」

零「ああ

一夏サイド

零達は楽しんでこれるかな?

それじゃあ、俺は零に言われた鈴との戦いに備えて訓練に行くか。

『』のアーチーナが空こてるか聞かないとな。

千冬ねえだ。ちゅうじいこ。  
。せこひ

一夏「織斑先生」

千冬「一夏か。零が一緒にやないのは珍しいな」

一夏「零なら山田先生と」

千冬「一夏、出かけるぞ」

一夏「へつ？」

楯無サイド

仕事が最近多いわね。

まあ、今日やつちやえば終わる量だしね。

楯無「本音。手が止まつてゐるわよ」

本音「やつこえば、まくらとヨパーと遊びに行つたよー」

楯無「本音。虚。行くわよー。」

本音「はーーー。」

楯無「更識家当主として命令よ  
虚「仕事がたまつてゐるんだからダメです」

楯無「更識家当主として命令よ  
虚「仕事がたまつてゐるんだからダメです」

虚「権力乱用しないでくださいよ」

橋無「じゃあ、お願ひー。」

虚「はー。終わったらちゃんと仕事ですよ」

橋無「はーい。」

零サイド

零「じゃあ、どう行きます?」

山田「ちゅうじ映画館に行きましょう」

零「じやあ映画館に行きましょう」

山田「あ、あの」

零「なんですか?」

山田「手つなごめいですか?」

零「ああ。はぐれるとマズいからですね。いいですよ」

山田「は、はー。はぐれるとけませんから」

一夏サイド

千尋「手をつなぐだとー?」

一 夏「それくらいいいだろ」

千冬「私だって最近は全然してないの」

一 夏「ダメだ」

楯無サイド

楯無「手をつなぐですってー?」

虚「あれ? 誰かが同じ運命を辿ってる気がする」

楯無「私だけじゃ手に負えないわ。本音はどうか行っちゃったし」

零サイド

零「そろそろ始まるみたいですね」

山田「はー。『着信無』ってどんな映画なんでしょう? 楽しみです

す

零「たしか、S級ホラー映画だそうですよ」

山田「えつ? 今なんて言いました?」

零「S級ホラー映画」

山田「ホラー映画?」

零「はい。あまりに怖すぎて中学生以下は入れないそつで」

山田「…………〔冗談ですか?」

零「リアルです」

山田（人気だからってこれ選んだのに、ホラー映画だなんて。ここ  
で怖がっちゃ大人としての威厳が）

零「もしかして怖いんですか?」

山田「ななな何を言つちゃってるんですか! そそそそんな事ないで  
すよ!」

「」の人に威厳なんてあるのだろうか?

一夏サイド

千冬「映画か。一夏、同じやつを見るぞ」

-----

一夏「座つたはいいけど。なあ千冬ねえ」

千冬「なんだ」

一夏「千冬ねえってホラー映画苦手じゃなかつたか?」

千冬「ふん。何を言つてゐんだ

一夏「ならいいけどこれ結構レベル高いホラー映画だぜ」

千冬「なつー?」

一夏「そろそろ始まるみたいだ

楯無サイド

楯無「いい席取れて良かつたわね

虛「この状況のどじが良かつたのでしょうか?」

楯無「この映画は結構話題になつてゐるらしいわよ

虛「会話をひやんとしてください!」

楯無「うるさいわね。文句あるの?」

虛「龜甲縛りされて文句言わない人がいるんですか!」

楯無「だつて逃げよつとするんだもん」

虛「私がお化けとか苦手なの知つてゐるでしょー!」

楯無「知らなかつたー(棒読み)」

虛「今すぐ解放してください!」

「映画が始まるんだから静かにしないとダメだよ。常識がないなー」

虚「お嬢様に常識つんねん言われると思いませんでしたよー。」

この後、映画館から3つの悲鳴が聞こえてきたのは言つまでもない。

— — — — —

零サイド

山田一まさか上映時間が4時間もあるなんて」

零一遅いんですけど軽く昼飯をとりましちゃう

三田・廿二と腰かねに廿二で立て拂せん

零  
・ そんには懐かしくたんですか! :

田縣の事と

零・しょ二かなしですね」

一夏サトト

千冬一 お姫様だ」「」だと

一夏 大声出したらばれるつて

千冬「歩けないなら背負えればいいだろー。」

一夏「いや、背負つたらあわれが当たる」

千冬「へつ。私だってこひましきの」

一夏「はあー」

楯無サイド

楯無「お姫様だつ」ですつて――――――――・

虚「あれば恥ずかしいな」

楯無「私もやつてほしーいー！」

虚「私も亀甲縛りのまま引きあがれんへりこなら、お姫様だつしてほしいでーす！」

楯無「行くわみー！」

虚「誰か助けてくださいーこー！」

零サイド

山田「やーー、お皿も食べ終わりましたし、これからどうしましま  
う」

零「ひとつと行く場所があるんですか?」

山田「はい。いいですよ」

零「それでは」

山田「ドレスショップですか?」

零「あのー店員さん。彼女にあつドレスをお願いします」

山田「えつーちよつと」

店員「はーい!」

零「1時間くらいしたら戻つてくれるんで彼女をお願いしますね」

店員「分かりました」

山田「だ、代金は」

零「俺が持ちますから、レジでカード使えますよ?」

店員「レジ利用できますよ」

山田「ちよつと」

店員「お客様はいらっしゃりになります」

山田女史は行つたな。

さてと、

零「いい加減出てきたらどうですか？」

4人「「「ギクッ！」」「」

零「ばれないと思ったんですか？一人は気配消さなすぎ。三人は気配を消しすぎ。尾行の時は気配を周りに混ぜるべきですよ」

一夏「そなのかーつて千冬ねえがいない！？」

零「片方のグループは一夏と千冬さんか。まったく家族だからって心配し過ぎだろ」

一夏「零、そこまで気付かないと千冬ねえが可哀想だぞ」

零「一夏。今日やるはずだったメーラーはどいつしたのかな？」

一夏「えつ（ダラダラ）」

零「これは明日は倍のレベルでやらないといけないみたいだな」

一夏「ハツハツハーツンダナコリヤ」

零「さて、もう片方のグループも逃げたみたいだけど、誰だつたんだ？」

櫛無サイド

楯無「まさかばれてたなんて」

虚「止まって止まって止まって——」

楯無「今日はこい」でおしまいね」

虚「」の速さで引きずり纏め続けたら死んじゃ」。」

1  
時間後

零サイド

零「山田女史。それじゃあフルコースを奢つてもらいますか」

山田「それはいいんですけど」

零「予約してた者ですが」

ボーグ「はい。織斑様」こちらです

ボーイに案内された席につく。

零「二郎の料理は絶品なんですよ」

山田「あのー」のアドレス

零「すゞく似合つてますよ」

山田「えつ。やうですかー零くんのタキシードもか」へ似合ひでじ  
やなくして、このドレッス高かつたですよ」

零「しようがなこじやなこですか。この店まじめにこの格好じやなき  
や入れないんですか?」

山田「でも」

零「じゃあ口止め料どこへいってど」

山田「口止め料ですか?」

零「飲酒するんで」

山田「ダメですよー第一出でんへれないでしょ

零「山田女史をここに連れてくるのが田代だったからここんだすよ

山田「でも、口止め料だとしてもこの料金より高いですよ」

零「山田女史をここに連れてくるのが田代だったからここんだすよ

山田「それって」

零「ここに結構レア物のボトルがあるんですけど、金を出しても開  
けてくれないんですね。シェフに頼みこんだら俺が女を連れてき  
た時に開けてくれるって血ちりですよ。なぜか千冬さんを連れてき  
た時は家族はダメって言つし、なんじょうかね?」

山田「零くさん。そのシヒツが言つてる女ってどうこいつ意味か分かっ

ですか？」

零「馬鹿にしないでくださいよ。女は女性って意味でしょ」

山田（やつぱり分かつてない）

シェフ「零！本当に前が女を連れてきたってのか！？」

そのシェフが席にやつてくれる。

零一はい、山田真耶さんです」

ショフ、真耶さんか！」れから零をよろしく頼む！」

「はい、おまかせください。」

零一ショフ、あれを開けてくださいね」

ショボー任せろ！今日は俺の署りだ！」

零 - 本當ですか！」

シヨー！ 今日はじめてたしからな！」

零一ありがとうございます

「いやあ俺が全力で腕を振つてくる」

シェフは厨房に戻つていつた。

山田「私奢らなくていいんですか？」

零「シェフがああ言つてたからいいんじゃないですか？」

山田「そうですか」

山田（勘違にしてるみたいだけど黙つてよ）

あのボトル飲んだら山田女史潰れちやつて寝ちゃつたよ。

また、運んでくか。

零「シーフ。今日はありがとうございました」

シーフ「気にするな。お前が女を連れてくるとは思つてなかつたからな」

零「俺だつてそれくらいできますよ」

シーフ「悪い悪い」

零「それじゃ」

2人の女の意味が違います。

千冬&山田サード

山田「頭が割れる——」

千冬「昨日の分を終わらせるぞ」

山田「なんで織斑先生はいなかつたんですか?」

千冬「よ、余計なことを考える暇があつたら手を動かせ」

山田「はーー」

楯無サイド

楯無「終わらないよー」

本音「遊びたーい!」

虚「文句を言わない!」

楯無「でも、この縛り方で椅子にぐぐりつたのは」

虚「私は昨日その格好で引きずり回されたんですよ」

楯無「ごめんなさい」

本音「なんで私までー」

虚「言い出しつづがビリ行つてたんですか?」

本音「うつ」

虚「終わるまで」のままです」

楯無・本音「「そんなー」」

一夏サイド

一夏「こんなのは無理だろー！」

零「うるさい。やれ」

一夏「見えない攻撃を避けるなんて」

零「空気の流れで起動を予測しろ」

一夏「普通はそんな」と出来ねえよー！」

零「俺も千冬さんも楯無さんも出来る」

一夏「全然普通じゃないだろー！」

零「知らん。やれ」

一夏「もしかして怒ってる？」

零「そんなこと無いぞ。久しぶりに羽を伸ばそうとしたのに追跡者がいたせいで神経なんて全然使ってないからな」

「めでたしめでたし」夏

## 簪

零サイド

わて、簪の手伝いをしますか。

1—4

零「失礼する」

『零くんだー』

『なんでだらりへ..』』

チーに勢いで集まつてきた。

零「更識簪つているか?」

『えつ更識わんつて』

『お姉さんのおかげで専用機を』

零「悪いがその更識簪に用があるんで」

簪の席につく。簪は読書していた。

零「更識簪なんだな?」

簪はいつも田を向けるがすぐに読書に戻る。

零「せめて会話しきり」

簪「……勝手にお幸せになつてください」

零「まさかの返しー?」

簪「……お姉ちゃんの恋人になつたから妹の私の所に来たんでしょ?  
?」

零「そして、まさかの追撃ー?」

簪「……だから勝手にお幸せになつてください」

零「俺は樋無さんと付き合つてないー!」

樋無「……嘘。……だつて学校新聞に載つてたし本人が言つてた」

零「誤解だ! 学校新聞はガセで樋無さんはからかう為に言つただけ  
だ」

簪「……そう」

簪(お姉ちゃんは多分本気だと思つたけど)

簪「……だつたら何?」

零「お前の専用機の作成を手伝おうと思つて」

簪「……お姉ちゃんに頼まれたんでしょう?」

零「俺は櫛無さんに頼まれても動かないよ」「

簪「……お姉ちゃんは生徒会長だよ」

零「俺はあの人を倒したぞ」

簪「……嘘。お姉ちゃんが負けるわけない」

零「新聞に載つてなかつたのか?」

簪「……お姉ちゃんに恋人ができたつてことで手一杯だった」

零「分かつてくれた?」

簪「……分かつた。……でも『打鉄式』は一人で作るからいい」

零「俺の家族のせいで遅れたんだ。だから俺には義務がある」

簪「……それは本人が来るべき」

零「あいつがいても邪魔になる」

簪「……あなたが居ても邪魔」

零「100種を超えるHISのデータ。一度に使えるパソコンの量は30台。一から専用機と量産機の設計をしたこともある。なにかご不満でも?」

簪「……うつ。……分かつた。……放課後に整備課に来て」

零「じゃあ放課後にな」

簪「……うん」

簪サイド

やつと行つてくれた。

でも放課後一緒にいることになつちやつた。

自分勝手ですごく迷惑な人だつた。

お姉ちゃんより強くて、お姉ちゃんが好きな人。

放課後

零サイド

零「完成目標はクラスマッチとして」

簪「……そんなの無理」

零「無理じゃない。俺を手足として使えば一日で完成出来る」

簪「……第一、私はクラス代表じゃない」

零「専用機持ちなのにか?」

簪「……まだ《打鉄式式》がないから、作るので忙しい」

零「て」とは完成すればクラスマッチに出てもいいってことだな？」

簪「……やういづわけじや」

零「よし。『氣合』を入れてくれか」

簪「……聞いてない」

零「《打鉄》と全然フォルムが違うみたいだな」

簪「……機動力を重視した」

零「なう、この辺りのデータが使えるな」

簪「……本當だ」

零「後、俺は《山嵐》をメインでやらせてくれ。今の数の倍は増やさる」

簪「……そんなこと出来るのー？」

零「全部全く同じ物にして機体に数を勘違いたせて増やせる」

簪「……そんなこと誰も考えないよ」

零「これは俺だけがやる裏技。東さんは要領自体を増やすからな」

簪「…………じやあ任せる」

零「任せ」

簪「…………今日はありがと」

零「礼はいいよ。俺が好きでやつただけだ」

簪「…………じゃあ、私が好きで言つただけ」

零「そう来たか」

簪「…………今日だけで3分の1も終わるなんて」

零「お前が今までやつてきた分が良かったからな」

簪「…………あなたのおかげ」

零「田舎に田舎を持てよ」

簪「…………私なんて」

零「またやうやつだ。まいいや。また明日な」

簪「…………うそ」

簪サイド

「いやで進むと思わなかつた。

あのデータのおかげで全体像が掴めだし、彼の処理能力が高かつたおかげだな。

彼のアイデアは使える物が多くて、設計の段階とは違う物になるかもしれないけど『打鉄式式』はもつと素晴らしい物になる。

終わつたらお礼しなきや。

零サイド

零「ただいま」

一夏「おかえり。てか何やつてたんだ?」

零「クラスマッチのお楽しみ。それより今日のメニューはこなしたのか?」

一夏「田隠しして剣道つて、最近お前のメニューが鬼畜になつてるぞー!」

零「短期間で強くなるにはこれ位のレベルが一度いいんだよ」

一夏「せめてメニューの意味を教えてくれ」

零「それくらいは自分で考えろ」

一夏「考えたけど」

零「はあー。今日は視覚以外の五感の力を上げだ

一 夏「どうしてんだ？」

零「五感の内、視覚が80%を占めている。その視覚を封じる」と  
によつて触覚と聴覚を使えるようにするんだよ」

一 夏「視覚だけじゃ駄目なのか？」

零「鈴のように見えない武器を使う粗手や暗闇の中でもどう戦う？」

一 夏「気合」

零「馬鹿」

俺がいなかつたら本当にやつそつだな。

零「お前は直感に頼り過ぎだ」

逆に直感はここつの長所でもあるんだがな。

零「あと《白糸》を今度チューイングしてやるから」

一 夏「色々とサンキューな

零「気にするな」

零「今田は試運転するだ？」

簪「…………うん」

そつぱりと簪は《打鉄式式》を展開させて飛び上がる。

原作では故障するのだが、故障するパーシは俺が整備したから問題無いだろ？

と思ったのだが、違うパーシが故障してるのは何故？

俺は《シンデレラ》を開いて飛び上がる。

簪は《打鉄式式》が解除され、落りてくれる。

楯無さんと同じ状況かよ。

零は楯無さんの時と同じように受け止める。

零「大丈夫か？」

簪「…………ありがとう」

零「どういたしまして」

簪「…………加速装置が故障しちゃった」

零「しょうがない。作り直すか？」

簪「……無理。……もつこれを作るのに時間も材料も無い」

零「クラスマッチなら諦めても」

簪「……ダメ。……あなたがクラスの皆に頼んでくれたから、……  
私がクラスマッチに出るチャンスを得たんだから」

零「知つてたのか」

簪「……だから諦める訳にはいかない」

零「はあー。この手は使いたくなかったんだが、あの人に頼むか」

簪「……あの人？」

3日後

---

今日、クラスマッチに出るのが簪がクラス代表か決まる。

零「頑張れよ」

簪「……クラスマッチに出てみせる」

零「勝つたら昼飯を奢つてやる」

簪「……じゃあ、ためき蕪麦」

零「了解した」

簪はアリーナに出て行つた。

簪は専用機持ちとして武器は一種類のみとハンデをつけている。

相手の機体は『打鉄』。アレンジが負けたら笑い者だぜ。

そんな心配は無いがな。

始まつたな。

簪サイド

相手は普通に刀を出した。

なら、私はこの装備で戦う。

簪「……千刀 剣」

空中に無数の刀が現れる。

代表「何この数！？」

零くんの作った装備は数に重点を置いてる。

代表「武器は一種類だけでしょ！？」

簪「……これで一つの武器」

代表「卑去な」

そつ言いながら向かってく。

簪「……『打鉄式』 자체は速さに特化している

代表の後ろに回り込む。

簪「秘技一文字切り！」

たたつ切る。

簪「秘技十文字切り！」

そのまま浮いてる刀を取り十字に切り、ぶつ飛ばす。

簪「……終わりです」

ぶつ飛んだ先に刀が向いていて刺さり、シールドエネルギーが切れ  
る。

『…………すごい』

『専用機が理由にならないほど圧倒的』

『これなら零くんが言つてたようにクラスマッチ優勝するんじゃな  
い』

『フリー・パスは私達の物』

代表「約束通り、更識さんがクラスマッチに出なさい」

簪「……えつとありがとうござります」

代表「クラスメートなんだから敬語は使わなくていいわよ。後、私の代わりに出るんだから勝ちなさいよ」

簪「分かった！」

零サイド

簪は櫛無さんに劣るからと黙って凡人つて訳じやない。

天才を追いかけて努力してきた人間が弱いはずがないからな。

さて、一夏と簪どちらが強くなるかな？

簪「……ただいま」

零「おめでとう。まあ、勝つって分かつてたけどな」

簪「……ありがとう。信じてくれて」

零「じゃあ、飯に行くぞ」

簪「うん！」

零「ほら、たぬき蕎麦だ」

簪「……ありがと。」

零「どういたしまして。それじゃ、いただきます。」

簪「……いただきます。……あの加速装置をくれたあの人って束博士?」

零「ああ。E.S学園の学園祭は一人だけ招待出来るだろ。その招待券は束さんに渡すつて約束で」

簪「……そんなので?」

零「束さんにとつて、世界は俺、一夏、簪、千冬さんで出来てんだよ。この4人がいる学園の学園祭なんて最高のイベントだからな」

簪「……篠ノ之さんは誘わないの?」

零「あの2人は上手くいってないんだよ」

簪「……上手くいってない」

零「簪も束さんのことが好きなはずなのにな」

簪（私とお姉ちゃんと同じ）

零「俺は昔のように仲良くしてほしいんだが。てか、束さんの相手を一人分するのはキツー」

簪「……その2人は素直になれば上手くいくの?」

零「イレギュラーがあるから分からぬ」

簪「……イレギュラー？」

零「あつ、忘れてくれ。この話はこれで終わりだ。そろそろ戻らぬいとな。さつきの時間は無理言つてそつちのクラスに行かせてもらつたからな」

簪「……『打鉄式』が完成したからもう来ないの？」

零「友人には会いに来るんじゃないか？」

クラス対抗戦（前書き）

駄文だ。

## クラス対抗戦

クラス対抗戦当日

零「一夏。訓練の成果はどうだ？」

一夏「田嶋じでの剣道は効いたな。相手の攻撃くらいこなれば見えないで分かる」

零「お前は相変わらず飲み込みが早いな。間に合ひとは思わなかつた」

一夏「出来ると思つてなかつたのかよ！」

零「だつてあの訓練は段階を踏んでから行つ訓練だぜ」

一夏「そんなのやうせむなよ！」

零「だから残り2日はその訓練止めただろうが」

一夏「そこに入ってきたのが千冬ねえとの剣道だらうが！」

零「千冬さんの攻撃と衝撃胞どうちの方が恐い？」

一夏「千冬ねえ」

零「即答かよ。まあ、やうこつ」とだ。負けたら千冬さんと一ヶ月間剣道してもらひからな

一夏「死ぬは！」

零「大丈夫。その言葉を吐いて死んだ奴を見たことないからな」

一夏「根拠になつてねえよ！」

零「俺はそろそろ行くぞ。勝つてこいよ」

一夏「またどつか行くのか？」

零「友人を応援しに」

一夏「最近そいつばつかだな」

零「なんだ。妬いてんのか？」

一夏「そ、そんなわけないだろ」

零「俺ばかりお前と話してたら他の奴らに悪いしな」

一夏「ん？」

零「分からぬならいい」

一夏サイド

初戦の相手が鈴か。

あいつの機体は「しつりゅう」と呼ばれた。あの一つしか願いを叶えてくれないくせして、最後の方ではその願いは出来ねえとか言つ龍と同じ名前だからな。

鈴が怒つてるのは俺のせいだし、謝つておくか。

一夏「なあ、り

鈴「一夏。死なない程度にぶつ飛ばしてあげるわ」

ビツヤーハ葉は通じなこようだ。

『それでは始めてください』

俺の《雪片式型》と鈴の《双天牙月》が交差する。

鈴「私の攻撃をたまくなんてやるじゃないなー」

一夏「師がいいんでね

鈴「やう。なら、これならビツヤー

何か来るー。

ヒヨッ！

俺は見えない攻撃が来る前に飛翔した。

俺が元いた場所を衝撃が通過する。

鈴「避けられた！？」

一夏「確かにその攻撃は見えないが、肌や耳でどんな物なのか分か  
る」

鈴「私が居ない間にあんた一体どれだけ成長したのよ」

一夏「お前に勝てるくらいかな」

鈴「言つてくれるじゃない」

一夏「事実だからな」

鈴「それじゃあ」

一夏「ああ」

一夏・鈴「行くぞ（わよ）ー。」

鈴は衝撃胞を放つ。

俺はそれを避けながら間合いを詰めていく。

俺の攻撃が届く瞬間、《双天牙月》でそれを受ける。

一夏「ちつ

鈴は距離をとつて、衝撃胞をまた撃つ。

一夏「それは効かねえよ！」

鈴「そうみたいね」

その瞬間、衝撃波と違う物が飛んでくる。

あれは《双天牙円》！？

《双天牙円》はブームランのように戻つてくる。

このままじゃ当たっちゃうか。

なら、これで決める！

鈴「イグニッショナーブースト！？」

一夏「俺の勝ちだ！」

俺は《雪片式型》で鈴をぶつた切る。

『勝者一年一組織村一夏』

一夏「うっし」

鈴「負けちゃったか

一夏「それじゃ、お前の作った酢豚食わせよう

鈴「その約束」

一夏「ひさしご出しだせ！」

鈴「遅いわよ。バカ一夏」

### 決勝戦

一夏「まさかここまで勝つなんてな」

鈴「私に勝つたんだから当たり前よ」

『フリー・パスまであと一勝』

『相手も専用機持ちの4組の更識簪さんだつてよ』

『お姉さんのおかげでの専用機でしょひへ..』

『いや、それが本当に強いらしいよ』

セシ「相手は強いみたいですが、頑張ってくださいね。一夏さん」

第「一夏、油断するなよ」

一夏「おひ。任せや」

鈴「そういえばあんたの兄弟の零だつけてさつきから見えないみたいだけだ」

第「一回戦が始まる前に見たつきりだな」

一夏「友人に会いに行くんだよ」

セシ「そういえば零さんは最近四組に出入りしていると聞きました」

鈴「もしかして四組の更識簪のことを応援しに行つたんじゃないの？」

一夏「何！？」

俺じゃなくて他の奴の応援？

一夏「よし。殺ろ！」

セシ「篠ノ之さん。一夏さんともしかして」

竇「そうだ。零が過保護なら、一夏はベッタリだ」

鈴「私達の一番の敵つて零なんじや」

3人が何か言つてるが知るか。

簪を倒して零を殺ろ！。

『両者前に出てくだれ』

-----

簪「……あなたが織村一夏」

一夏「勝たせてもらひつい

簪「……私にはあなたをはたく権利がある。でも、それは試合でする」

『決勝戦始め』

一夏は《雪片式型》、簪は《千刀剣》を出す。

2人は攻撃がぶつかる。

一夏（数が多くなる）

簪「……数だけだと思つてゐるでしょ？」

簪はそつと俺の後ろに回り込む。

簪「……《打鉄式》は速さもある」

一夏はそれを避ける。

一夏「悪いな。見切りと避けることは徹底的に零にたたき込まれたからな」

簪「くつ。……なんであなたばかり。……ISOも彼だつて

一夏「彼？」

簪「零くんはあなたの応援に行つたんだしょ」

一夏「どうしてんだ？」

千冬『試合中止だー早く戻れ!』

その瞬間、4つの影が空から降りてくる。

その中の一つは、

一夏・簪「「零<sup>くろ</sup>ー」」

零「悪いな。すぐに片付けるから、決勝戦続けてくれ

-----

零サイド

一夏と別れた後

簪「……零くん

零「今日は頑張れよ」

簪「……つと

零「お前と一夏はどうちが強いんだろうな

簪「……私と零くんが作った《打鉄式》があれば負けない

零「えらい強気だな。なら、優勝したらまたたぬき蕪麦を奢つてやるよ」

簪「……じゃあ、約束」

簪は小指を出す。

零「ああ。約束だ」

簪「指切りげんまん嘘ついたら《千刀剣》飲一ます。指切った

零「そんなことしたら死ぬは!？」

簪「……だから破らないでね」

零「分かったよ。俺はちよっとやるいこくな。結果楽しみにしてるが」

零は出ていく。

簪（織村一夏の応援に行つたんだうつな）

アリーナ上空

零サイド

さて、《ゴーレム》を倒して一夏と簪の応援しますか。

来た来た。

降ってきた《ゴーレム》は張つてあつた《カーニバル》に引っ掛け

る。

零「おい。ちよつと遊んだけよ」

『ゴーレム』はひらひらに体を向ける。

零「まあ、速攻でスクラップだけどな」

『マンイーター』を『カーニバル』が補助する。

零「『一喰い（イーティングワン）』ー」

『ゴーレム』の右半身が消し飛ぶ。

零「さて、応援しに行きますか」

次の瞬間、また『カーニバル』に何か引っ掛けかる。

零「おいおい。マジかよ」

引っ掛けっていたのは、

零「いつも時は多くても3体くらいだ。普通

『ゴーレム』6体。

零「応援は無理そつだな」



現在

零サイド

零「悪いな。すぐに片付けるから、決勝戦続けてくれ」

一夏「何言つてんだ！ボロボロじやねーか！」

零「さすがにアリーナに行かせないよつにしながら6体相手はきつかつたわ」

簪「なんでそんな無茶を」

零「だつてお前らクラス対抗戦を目標に頑張つてたじやねーか」

一夏「そんな」との為に

零「そういう訳で試合を続けてくれ」

一夏・簪「バカ！」

零「え？」

一夏「決勝戦なんて知るか！俺はお前と一緒に戦う」

簪「私はあなたに助けられた。だから今度は私の番」

零「……俺もバカだが、お前らも充分バカだ」

一夏・簪「ああ（うん）」

零「じゃあ、一人一体だ。無人機だ。手加減の必要はない」

簪「無人機？ そんなの絶対にありえない」

零「絶対なんてことは絶対にない。俺と一夏も絶対にありえない存在だぜ」

一夏「確かに」

第『3人共！』れぐらーの敵を倒せないでビリするー。』

零「だつてよ」

一夏「じゃあ行きますか」

簪「無茶はしないで」

簪サイド

簪「……あなたが私の相手」

『ゴーレム』 一体と向き合ひ。

簪「……すぐに終わらせる」

簪の前に盾の形をした発射口が現れる。

その数、

簪「零くんが『山嵐』を元に作った『断片集』<sup>フラグメント</sup>は一つから9発。発射口が12機。計108発。あなたはこれに耐えられる?」

追尾ミサイルが発射される。

その状況はシユーティングゲームの無理ゲー状態。

『ゴーレム』はそのミサイルの雨に飲み込まれる。

全てを撃ちおわった後に残つたのは鉄屑だった。

簪「火力が強すぎですね」

一夏サイド

一夏「3年前と同じように俺は守られた。俺はいつも守られてばかり」

一夏も『ゴーレム』と向き合つ。

一夏「俺が編み出したみんなを守る為の新技を効いてけよ」

『零落白夜』を発動する。

一夏「日の光と化し、静かに翔る」

『白式』がイグニッショノブーストを使い分身して同時に『ゴーレム』を攻撃する。

一夏「『光化<sup>テーマソング</sup>静翔』アコースティックバージョン」

『ゴーレム』がバラバラになる。

一夏「レクイエムになつちまつたな」

零サイド

零「はあー。原作を壊し過ぎたせいでこんな事になつちまつたよ」

『ゴーレム』は大剣を出し、向かってくる。

零「だから、尻拭いは自分でやろりと思つたんだけど」

直線上にいくつか円型に設置した『カーニバル』が向かってきた『ゴーレム』に押されるように一緒にくる。

零「まあでも」

『カーニバル』の円は数を増すことに小さくなつていぐ。

零「俺的必殺」

零は小さくなつた円を殴る。

零「體答無用拳」

『パーレム』は上である。

零「あこひに盼けてもいつのま悪くなにな」

# I巻Hペローグ（前書き）

今日は短めかな？

## 一巻Hペローグ

零サイド

やつと取り調べ終わったよ。

誤魔化すのスッゲー面倒くさかった。

今回は戦利品があるから大目に見るけど

千冬「零」

零「千冬さんでしたか。ビックリしましたよ」

千冬「いくつか聞きたいことがある」

零「またですか。取り調べで疲れてるんですから短めにしてくださいよ」

千冬「すぐに終わる。お前はエスの乱入があることを知っていたな？」

零「ええ。一体だけだと思つてましたがね」

千冬「犯人も知つてるな？」

零「登録されてないコアの時点であの人でしょう」

千冬「まあ、そうだな。そのコアは本当に全て破壊したんだな？」

零「破壊しないと面倒なことになりますからね」

千冬「最後だ。一夏と更識簪のレベルがはね上がりこる。お前は何をした?」

零「別に。一夏には稽古、簪にはヒヒを『えただけですよ』

千冬「お前の息がかかった者は力を手に入れるところとか?」

零「それは買い被りですよ。セイまで詮づないうち地下で行つてゐる千冬さん専用機の作成を手伝いましょうか。ヒヒ世界王者さん?」

千冬「何故お前がそれを知つている?」

零「やあ、やつきの質問で最後だつたから答へる気はありません」

千冬「答える。命令だ」

零「拒否しまや」

千冬「本氣のよつだな」

零「家族のことをちやんと喋るなり考へてもいいですよ」

千冬「なら、いー」

零「それじゃあ、これで」

千冬「待て。これだけは答える。お前は何がしたいんだ?」

零「俺はね、千冬さんより束さんに近いんですよ。束さんが俺達4人なら、俺は気に入つた人間。それだけあればいい」

千冬「気に入つた人間」

零「俺にとつて気に入つた人間以外はモブキャラです。しかし、気に入れば敵だろうと構わない。それが俺です」

千冬「分かつた。もう行け」

零「本当に分かつたんですかね？」

零は帰つていく。

千冬サイド

零の奴は何を考えてるんだ？

束と同じいや、それ以上に分からない。

山田「織村先生。やはりあのコアは登録されてない物でした」

千冬「そうか。ありがとう山田くん」

山田「いえいえ。そのコアですが3つとも修復不可能です。零くん凄いですね。コアだけを器用に破壊するなんて」

千冬「確かに凄いな。やろづと思えばE.Sに関係なく人体を壊せるんだから」

山田「織村先生それって」

千冬「気にしなくていい。アイツはそんな手段は選ばないだろ？  
うからな」

山田「そ、そうですね」

そんな手段をとる状況なんて私が作らせない。

零サイド

あんな伏線つぽいこと言わない方が良かつたかな？

千冬さんに嫌われたかな？

はあー。ちょっと調子乗り過ぎた。

やつちやつた物はしうがない。

今現在を楽しむとしよう。

零「おーい。待たせたな。一夏に簪」

一夏「お前が一番取り調べ長かつたな」

簪「倒した数が多かつたからしうがないよ」

零「それじゃ飯に行きまいか。箸ひこやんが」

一夏「よしー今日は豪勢に行こう」

簪「私はたぬき薺麦で」

零「了解した」

こんな日々に満足してゐしな。

**転校生（前書き）**

織斑の斑を間違えました。

すいません！

今回はアンケートします。

零のヒロインにシャルカラウラを加えます。

どちらか選んでください。

## 転校生

零サイド

クラス対抗戦前と千冬さんの態度は変わらなかつた。

ぶつちやけ千冬さんに嘘をついたのだが、ばれてはいないよつだ。

実はコアを2つほど回収してある。

片方はバラして構造を調べますか。

千冬「全員席に着け」

千冬さん登場。

千冬「今日は2人転校生を紹介する」

2人入つてくる。

千冬「自己紹介しろ」

ラウラ「分かりました。教官」

千冬「織村先生と呼べ」

ラウラ「はいー。」

返事はいいみたいだな。

「ラウラ」「ラウラ・ボーデヴィッシュだ

山田「…………それだけですか？」

「ラウラ」「以上だ」

千冬「はあ、もういい。ボーデヴィッシュ席に着け

そう告げるトライフルは一夏の前に来て、

手を振りかざした。

ガシッ！

零「お前弱いな

「ラウラ」「なつー。」

俺はラウラの手を掴む。

零「俺がいる限りは一夏に手を出さねなことよ」

ラウラは手を振りほどくとポケットからナイフを出して俺に向ける  
が、

零「良いナイフだが、量産された物には興味無い。オーダーメイド  
を使え」

零は一瞬でナイフを取り上げる。

「ワウラ「くつ。私はそいつが教官の弟と認めない！」

「ワウラはそのまま自分の席に行ってしまった。

一夏「サンキューな

零「氣にあらな

山田「わ、氣を取り直してデュアノくん自己紹介をお願いします」

シャル「はい。シャルル・デュアノです。Jの学園に僕と同じ境遇の人かいと聞いてやつてきました」

『 もや—————つ！』

『 3人目の男子よー守つてあげたくなる方の一..』

『 お父さんお母さん。産んでくれてありがとう』

クラスの死んでいた空気が復活する。

上条さん。俺にはあんたみたいに俺の右手には幻想をぶち殺す力なんて宿つてない。

だがな、俺の運命はこの右手で切り開く！

行つけ—————！

まずはその原作をぶち殺す！

パリーン！

ジヤなぐマーティー

シャルヘン?

零 - 男の格好してゐけれど、やはり女じやん

シヤ川 - 卍ヤ -

上九

零一ケノシ！」

ホガノガホガノガ！

零一ノト吹き切る待て

ノノノノノノノノノノ

文集書籍 分類で見ると思ひの語題に記す

零がシャルの胸を揉む

シャルに殴られる

千冬さんと山田女史が殴る蹴るに参加。

どこからか現れた更識シスター<sup>ズ</sup>がISの武器で攻撃。

つて死ぬ！？

さすがにHSの攻撃は危ないので《シンテレラ》を展開する。

零「HSを人に向けちゃダメだろ！死ぬは！」

千冬「そんなことより『デュアノ、わしきのは本当か？』

零「俺の生死がそんなことで片付けられた！？」

シャル「うつ」

千冬「本当なんだな。零、なんで分かった？」

零「はあー。筋肉のつき方見たら男か女か分かるでしょう」

全員（普通は分かんないから）

千冬「どうしてこんな事をした？」

シャル「え、えつと」

零「多分、家のことが関係してんじゃねーの。確か『デュアノ社の社長には子供がいなかつたはずだから、シャルルは養子か隠し子だろ』

シャル「君、一体何者？」

零「紛い物かな？」

千冬「こここの事は気にするな。理不尽が服を着て歩いてるような物だからな」

零「その表記は酷くないですか？天然チートさん」

シャル「君の言つ通り僕は隠し子だよ」

零「話を聞くのは千冬さんだけでいいだろ。聞かれたくない話だらうし」

千冬「そうだな。一時間田は一組、四組と合同でアリーナでIISの訓練だデュアノ以外は移動しろ」

零「デュアノ、IIS学園は他国から干渉を受けない。家との関係を考えるのに3年ある。それにお前が望むなら出来るだけ力になるぞ」

シャル「うん」

アリーナ

鈴とセシリアが前に出るよつに言われた。

セシ「鈴さんが相手ですか？」

鈴「別に誰が相手でも構わないけど」

零「多分違うな」

一 夏「じゅあ、誰だ？」

零「もう少しあてば分かる」

お前の上に落ちてくるからな。

山田「えー、こいへだれーーー。」

ほり来た。

一 夏「零、危ないぞーーー。」

零「くつ?」

次の瞬間山田女史の下敷きになる。

原作と違うだとーーー?.

れつかわ女だとバラしたのはやつ過ぎたかー

つーか、鳴が出来ない。

山田「零くん。鳴を叫んだいだれーーー。」

やの山へつをびかしてくわー

零「んーーーーーー。」

酸素をくれーーー

簪「何をしてるかな？」

簪は《打鉄式式》と《千刀剣》を展開し、数本を投げた。

山田「零くん危ない！」

山田女史は横になつた状態でライフルを出し、全てを打ち落とす。

簪「えつーーー？」

零「やつと空気が吸える！」

死ぬかと思ったー。

バシン！

千冬「貴様は何をしてる？？」

零「不幸だ」

鈴「どちらが先に山田先生と戦うんですか？」

千冬「2人同時にだ」

セシ「それはちょっと」

零「やつてこよ。結果が見えてるし、一夏にいい所を見せられるぞ」

セシ「そうですわね！」

鈴「行くわよ！セシリ亞！」

セシリ亞と鈴がヤル気になつて山田女史の前に立つ。

千冬「煽るな。バカ者」

零「いいじゃないですか。教師の力を見せるいい機会だし」

一夏「どうしてだ？」

零「山田女史が勝つって言つてんの」

一夏「一対一だぜ」

零「乗つてる年数はそのまま力だぜ。それに山田女史は日本の元代表候補生だ」

千冬「その通りだ」

零「一夏、試験の時はラッキーだったな

一夏「あの試験官つて山田先生だったんだ」

話し終えた時には決着がついていた。

零「やっぱ、結果は予想通りだな

鈴とセシリ亞は倒れている。

山田「いやー。久しぶりに動かした楽しかったです」

簪「あの、私とも模擬戦をお願いしていただけませんか?」

山田「織斑先生」

千冬「いいんじゃないかな?」

零「俺も見てみたいな」

山田「じゃあ、やつまじょうか」

簪「はい」

簪（零くんにいい所見せなきゃ）

簪と山田女史は空に上がる。

零「最近、簪も積極的になつたな。なんでかな?」

一夏「相変わらず酷いな」

零「へ?」

模擬戦が始まる。

千冬「どひりが勝つと思つ?」

零「この戦いは分かりません。速さと量対経験と正確さ。どひりも甲斐つけがたいですからね」

つーか、山田文史の機体、装備だけでいいからこじくりたい。

今度、提案しよ。

この戦いの結果は山田文史が僅差で勝利した。

「ウラ」「教育。私も模擬戦をしたいです」

千冬「相手は?」

「ウラ」「織斑零でお願いします」

千冬「却下だ」

「ウラ」「何故ですか!?」

千冬「お前じや勝負にならないからな」

「ウラ」「納得できません!」んな平和ボケした国に教育がいる」と  
事態間違つてます!」

零「だからお前は弱いんだよ」

「ウラ」「貴様!」

零「そんなにやつたわや相手してやるよ。今度の大会で相手してや  
れるよ」

「ウラ」「分かった。その首洗つて待つてや!」

「お前じ も傷ついたりされねー」

## H反田禪（前書き）

今回は結構適当です。

アンケートがまだ一票しか来てません！

お願いします！

誰でもいいので感想に入れてください！

昼休み

篇「どうじてこなつた」

一夏「飯はみんなで食つた方が上手いだら」

デンドマイ 篇。

シャル「僕まで参加させてもういい良かつたのかな?」

零「問題無い。それより話せばなつたんだ?」

シャル「まだ考えてる途中だよ。君が言つた通り時間はあるみたい  
だしね」

零「零でいい。お前が望むならデュアノ社を倒産させても構わない」

シャル「そ、そんなことしなくていいからー!」

零「なんだ。つまりん」

シャル「それと、僕もシャルロットでいいよ」

零「了解した」

シャル「そうだ。僕お弁当無いから購買で買つて来なこと」

零「それなら一夏の分をやめ。一夏、お前は篳辺りから分けても  
らえ」

シャル「そんなの悪いよー。」

零「一夏、いいだろ?」（空氣を読め）

一夏「しょうがないな」（久々の零の弁当が）

零「本人もア承してるぞ」（今日は俺が飯を作つてやるか）

シャル「ありがと」

零「というわけで、篳分けてやれ」（「れでいいだろ?」）

篳「ま、まあそういうとならしょうがないな」（悪い。恩にしきる）

全く手のかかる妹を持つたぜ。

セシ「なら、私のサンデウイッシュもどひ」

鈴「酢豚あげるわよ。約束だつたし」

2人は積極的だな。

簪「零くん。デザート作り過ぎちゃつたから食べる?」

零「ん、悪いな」

簪「どういたしまして」

零「おつ 美味いな」

簪「それは良かつた!」 シャル「みんな仲がいいな。僕もこれ食べよ」

パクつ

シャル「な、何これ!?」

零「口に合わなかつたか?」

シャル「ううん。こんな美味しい物食べたことない」

鈴「そんな大袈裟な」

パクつ

鈴「死んでもいいかも」

一夏「零は味にうるさいからな。自分で作る物に一切の妥協をしないからな」

セシ「じゃあ、私も一口」

笄「食べない方がいいぞ。傷つくから」

結果、女子全員傷ついた。

-----

零「てな」ともあった

弾「お前らは相変わらずハーレムしてんな」

零「それは一夏だろ」

一夏「いや、零だろ」

弾「お前らこいつか刺されるべや」

零「返り討ちにするから大丈夫だ」

弾「お前なら本当にやつそうだな」

蘭「おにーーー早くって一夏さんーー？」

一夏「おじやましつるが蘭」

零「一応、俺もいるからな」

蘭「あつすいません。零さん」

蘭（なんで教えてくれないのよー）

弾（い、言つてなかつたか？）

弾が怯えてる。

零「そんじゃ飯食つちまおつか」

弾「そ、 そうだな」

1階で昼飯が来るのを待つていてる。

零「そ、 ういや昨日に篠が喜んでたけどなんかあつたか？」

一夏「今度の大会で優勝したら買い物に付き合つて約束したんだよ」

零「はあー。 報われねえな」

弾「大体は予想がつく」

一夏「？？？」

蘭「お待たせしました！」

一夏「ん？ 着替えたのか蘭？」

蘭「はい」

一夏「どつか出かけるのか？」

蘭「え、 えっと」

一夏「ああ。 デートか

何故そ、 うなる！？」

蘭「はあー」

零「弾」といつてなぜ心か?」

弾「ああ」

ギロー。

ナタヤヒコは殺戮を感づる。

## 鎌＆セシリ亞強化（前書き）

今回も適當です。

アンケートにシャルルとラウラの2人がいい。という物があつたのですが、2人ともがいいと思う人が5人を越えたら2人も加えようかと思います。

もうアンケートに答えてくれた人も2人ともがいいと思う人は感想に入れてください。

## 鈴＆セシリア強化

セシリアサイド

わたくしは今までずっと一番でしたわ。

それはこれからも変わらなことだと思います。

ですが、この学園な来て自分がどれだけ無力なのか分かりましたわ。

だから、

鈴サイド

一夏との戦いの時、一夏に手加減された状態で負けた。

山田先生には代表候補生のセシリアと一緒に戦つて負けた。

その山田先生と簪は接戦だった。

足手まといになるわけにはいかない。

なら、

セシ・鈴「強くなりたいです！」

零「ん、なればいいんじゃねーの」

セシ「えっと、強くなりたいんですけど」

鈴「本領で贏ひしゆのよ」

零「だから、勝手に強くなればここじゃん」

鈴「いは零が強くしてくれるんじゃないの?」

セシ「ハハハ。一瞬やんや髪の時みたいにメロードを決めて」

零「じゃあ、こんな感じあでいい?」

-----

零サイアツ

二日後

零「こやあ、お前じょく俺のメニューをクリアした。これで一夏達にも近づいたわ」

鈴「ヒジがじやーーー」

セシ「二日後になんですけどーーまだ3分も経ってないじゃないですかーー」

零「うーー」

鈴「今、舌打しちたわねーーー」

零「だつて面倒なんだもん」

セシ「ズルいですわよー。一夏さんと簪さんは訓練したのに」

零「一夏は一年前から土台を作つてあつたし、簪の場合はEISをいじくつただけで他に何もしてない。お前らは他国の代表候補生だからEISを勝手にいじくれないだろ」

鈴「うう」

セシ「確かに」

零「文句があるならEISをいじくつてやりから、その許可を国からとつてこい。まあ、次の大会には間に合わないと思つけど」

鈴「それじゃ、意味ないわよ」

セシ「次の大会じゃなきゃ」

零「優勝したら一夏と付き合へるからか」

鈴・セシ「……」

零「図星かよ」

鈴「で、でも、それが無くても強くなりたいのは本当」

セシ「わたくしも強くなりたいですの」

零「はあー、少しくらいは実力を上げるメニューを考えてもいい

セシ「本当ですのー。」

鈴「嘘じゃただじゃおかないわよー。」

零「本当だよ。だが、力と強さは別物だとこいつとを忘れるなよ。」

セシ「はあ。」

鈴「一応、忘れないわ。」

零「それじゃ、セシリア。」

セシ「なんですか？」

零「お前はどうち効きだ？」

セシ「右利きですの。」

零「じゃあ、まず右手で箸を使ってパチンコ玉100個を器からもう一方の器に移せ。それが終わったら左手でも出来るようにしろ。」

セシ「な、なんですかそれー？」

零「お前専用のメニューだよ。文句があるならやらないべてもいいけど」

セシ「分かりました。」

零「鈴はこのゴーグルを大会までつけておけ。」

鈴「ダサッ！」

零「どんなことがあっても外すな」

鈴「分かったわ」

零「それじゃ頑張れよ」

## 大会前（前書き）

アンケート終了です。

結果2人ともになりました。

アンケートに参加してくれた方ありがとうございました。

## 大会前

鈴サイド

これつけて3日になるけど意味あんのかしら？

確かに視界が悪いけどそれだけなのよね。

『ダッシュヤアア――――――――.』

鈴「いきなり何！？」

後ろから襲い掛かってきたクラスメートに蹴りをきます。

『居たわよー』

一組の生徒が大勢で追いかけてくる。

鈴「ビラリ」と叫ぶ。

一夏「鈴！」

走った先に一夏が立っている。

一夏に助けてもらおう。

鈴「一夏、たゞ」

一夏「ゴーグルをよこせー！」

一 夏が飛びかかって来る。

鈴「あんたもか！？」

向きを変えて女子トイレに入る。

一 夏「待て！」

篠「待つのはお前だ一夏」

一 夏「篠さん？」

篠「お前が入るつとしたのは女子トイレだ

一 夏「反省します」

篠「問答無用

ズドン！

一 夏脱落。

篠「さて、鈴。ゴーグルを渡してもうおつか。

零の弁当のために

鈴「はあ？」

第「零の弁当が美味しいと広まってしまったから食べたいという生徒が続出してな。今日中に鈴のゴーグルを持ってきた一年生に作つてやると言つたからな」

フルフル

鈴「はい」

零「頑張つてる?」

鈴「あんたどうこうつもつ!」

零「そろそろ文句言つてる頃かなと思つたからな

鈴「あんたはエスペーか!」

零「とこつわけで訓練ぼくしたわ。じゃ、そういうわけで

鈴「待ちなさいよ!」

ガチャーン!

鈴「切りやがった

第「覚悟!」

鈴「分かつたわー逃げ切つてやれひじやないー。」

セシリアサイド

3日もかかつてたつた7個。

こんなので終わつますの?

わたくしがこんな簡単なことが出来ないなんて。

フルフル

セシ「はーいですの」

零「どれくらい進んだ?」

セシ「も、もう少しで終わりますの」

零「そうか。俺はつきり3日たつたのにまだ一桁しか終わってないのかと愚つたんだが」

セシ「あなたどこで見てるでしょうー。」

零「まさか本物ー一桁?」

セシ「悪いですの?」

零「やめるか?」

セシ「誰がーわたくしに出来ないわけありませんのー?」

零「ならしいが」

セシ「もう一いですの？」

零「ああ」

ガチャン

絶対にやってみせますの！」

ラウラサイド

アイツは何者なんだ？

私が弱いだと？あり得るはずがないだろ。

教官に認められてる人間。

アイツを倒せば教官に認めてもらえる。

早くアイツと戦いたい。

シャルサイド

零は私が女だつてことを見抜いた。

零は僕が今まで迷つていたことに答えてくれた。

僕は父さんと縁をきる。

無一文になるし、専用機も取り上げられてしまつかもしれない。  
でも、零に困つたら頼つていいって言われしね。

## 大会一回戦（前書き）

駄文過ぎる。

更新遅れまくつてるし。

ネタ切れしそう。

## 大会一回戦

零サイド

一夏「零、優勝するぞ」

零「当たり前だ」

つーか、優勝しないとお前に彼女が出来ちまつからな。  
数日前からその噂で持ちきりだしな。

ペアで出るのは原作通り。

専用機持ちの組み合わせは、

俺と一夏の男子ペア

鈴とセシリアの代表候補生ペア

笄と簪の天才の妹ペア

シャルロットとリウラの転校生ペア

はつはつはつはつ！

後ろの2つは予想外過ぎるだろ。

相変わらず原作通りにいかねえな。

竇と簪は知らないうちに仲良くなつてたな。

聞いてみたら姉のことで意氣投合したそつだ。

ラウラはペアになる奴がいなかつたみたいで、それを見てシャルロットがペアになつたみたいだな。

シャルロット優等生過ぎる。

この4ペアが優勝候補。

専用機持ちだから当たり前か。

さて、俺達の一回戦の相手はモブキャラ。

他の3ペアも一回戦はモブキャラらしいな。

速攻で終わらせちゃいましょう。

『始めてください』

一夏「『テーマソング』」

一夏が開始と同時に1人倒す。

モブ「早っ！？」

零「そんじゃ俺も」

モブ「スケ」

ババババババババババ！

零「技使つのもめんぢくさい」

乱射してぶつ倒す。

モブ  
「酷い」

勝者織斑ペア

庄勝！

鈴&セシリアサイド

セシ（ビットの操縦と射撃が同時に出来るなんて）

セシリ亞の弱点だったビットの操縦時動けないといつのは零の訓練で解決。

モブ「なんで後ろにいるのにそんな攻撃が当たるのよー?」

鈴（あのゴーグルを外したら真後ろまで見える）

鈴の訓練は「一グルは視野を広げる」と、おい駆けつとは相手の動きを予想すること。

零（鈴の衝撃胞はノーモーションで射てるからな）

鈴＆セシ「「終わりよ（ですわ）ー。」「

『勝者鳳＆オルコットペア』

箒＆簪サイド

モブ「早く倒して援護してー。」

モブ「同じ量産機なのにこんなに強いのよー。」

箒「確かに私は専用機持ちじゃないし、IS適性もこだ

箒「でも、箒は純粹に剣の腕は私より数段上

箒は簪の『千刀剣』を使って切る。

箒「刀を使えばお前、りんごだけは負けん

『勝者篠之野＆更識ペア』

零サイド

全員一回戦は勝ち上がったみたいだな。

シャルロットとラウラは普通に一対一してチームワークなんて無かつたのは残念だがな。

ラウラ倒したら大会が潰れるし、あそこまで言つてやられるわけいかないよな。

“ひつかな。

てか、一夏がそもそも相手するはずだったのになんで俺が戦うことになつてんだつけ？

はあ、俺つて自分から問題に突つ込んでるみたいだ。

**誘拐（前書き）**

久しぶりに満足出来る物が出来ました。  
良かつたら読んでください。

## 誘拐

零サイド

2回戦田もモブキャラで速攻で終わつたぜ。

おつと、メールが来てるな。

F・ロミシャルロジー

本文 たすてけ

？？？

たすてけ？

ちょっと待て、見たことあるぞ。この文章。

確かあればバカテスの世界の雄一からのメールで、

ああ、助けてつて送りたかったのか。

助けて?なんか嫌な予感がする。

調べますか。

学園の監視力カメラにハッキング!

犯罪とか言つなよ。緊急事態なんだから。

メールが来た時間から予想すると……発見！

スタンガンで氣絶させられてるよ。

誘拐かよ。

俺の仲間に手出しつただで済むと思つてんのかね？

シャルロットサイド

シャル「うつ」

田を覚ますと暗い倉庫の中だった。

確か、怪しい奴らが追つてきたから零くんにメールを送つて、その後に氣絶させられたんだ。

？？？「氣付いたか」

シャル「あつ、あなたは！？」

零サイド

うぜえな。

足止めにHIS持ち出してくるなんて。

しかも、数が多いし。

敵「これだけの人数だ！量産機だが、やれるぞ！ひる三

ドカン！

喋ってる奴をぶつ倒す。

零「活氣づくなよ。めんどくさい。お前らが相手してんのは学園一位の《シンデレラ》だぜ。ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

両腕に《カーニバル》をつけて、《暴飲暴食》を使う。

零「よし決めた！もうこの技しか使わないでやるから三下共、無様に敗者復活戦でもしてみやがれ！」

この時、零を相手にしたことを後悔した。

十数分後

ちつ、量産機に時間かけ過ぎた。

数が50機つてどんだけいんだよ。

つーか、こいつら全部デュノア社製つてビリーフことだよ。

シャルロットサイド

シャル「父さん！？ビーハー！」

父「お前が使えないからに決まってるだろ」

シャル「今度は何をやせる気なんですか？」

父「女だとバレてしまつたならしょうがない。時期が早まつたが、2人の男子のどちらかとくつつけ」

シャル「早まつたって、始めからそのつもりだつたのですか！？」

父「当たり前だろ？が。次は失敗するなよ

ドン！

零「野おおおおお原あああくうううううううううううううん！」

父「何！？」

シャル「零くん！」

父「バカな！エスを持たせた部下がいたはずだぞ！」

零「演出」苦労野原くん。そいつらならスクラップになつてんよ！」

父「どれだけの数を用意したと思つてるんだ！？」

零「本当にどれだけ居たんだ？数が多過ぎて途中から数えんの辞めたし」

父（ふやけ）るなよー！ 100機は用意したんだぞー！

零「シールドエネルギーも3分の1しか残つてねーし」

？？？「良いこと聞いたわ」

父「そ、そうだ。頼むぞ！」

零「てめえは？」

シャル「義母さん」

義母  
一派棒猫の娘が私を義母さんなんて呼ぶんじゃないよ！」

シャル・ジ

零一なんだ玉乃日乃なんだよ。」「れなんて何アリ?」

義母「ちよどいいわ。あんたを連れてつて泥棒猫の娘と結婚させ  
れば、会社の株が上がるわ」

「マジで」がなんて喰う？」「…」

義母「私は他のと違つて専用機よ。いくら学園最強のあんたでもそこまで弱つてたら「バカかこの二下は?」何よ!」

零「確かに俺は戦い過ぎて弱ってるよ。一夏に挑んだら負けちまうくらいにな。だがな、そんだけ俺が弱っていたとしてもお前が強くなつたわけじやねーだろうが!」

義母「ひつ」

零「『暴飲暴食』！ギヤハ！ギヤハギヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

義母「このー」

デュノア義母は抵抗として発泡するが弾は全て作り出した両腕に撞き消されていく。

零「ここから先は一方通行だ！尻尾巻きつらえて元居た場所に帰還しゃがれ！」

義母を壁を破るだけの力でぶつ飛ばす！

ちゃんとロアは回収したぜ！

零「さて、残るのはえだけか

父「く、来るな！それ以上近づいたらこいつを撃つぞ！」

零「自分の娘を人質つて、どんだけ腐つてんだよ」

シャル「僕に構わないで！」

父「うるさいー！」

ゴジン

デュノア父は拳銃のグリップでシャルロットを氣絶させる。

父「IISの展開を解け」

零「分かつたよ」

俺はIISの装甲を解く。

どこからか綺麗な音楽が聞こえてくる。

父「な、なんだこの音楽は?」

零「俺から一曲プレゼントだ」

父「止めろーでないと」

零「でないと、どうするんだ?」

父「ここつをく」

デュノア父の身体がいきなり動かなくなる。

零「作曲 織斑零 作品No.121『砂場』」

この倉庫に入ってきた時から羽の数枚から超音波を送り続けていて、  
装甲を解いた時もいくつか羽見えないように残していた。

その超音波とこの音楽の能力は脳内干渉。

父「身体が動かない！？」

零「お前の身体の支配権は俺に移った。シャルロットは返してもらひ  
うれ」

零はテュノア父から氣絶しているシャルロットを抱き上げる。

零「てめえ、さつき娘のこいつに殺すとか言つたよな

父「そいつは俺の子供だ！しかも、本妻の子供ではないんだ。俺が  
ビリijoとがつせ」

零「つるさー。黙れ。自分の子供に殺すだと？親は子供に生き抜け  
つて言つもんだろ？が！」（Byひりじ）

わしきテュノア義母をぶつ飛ばした方向にぶつ飛ばす。

フルフルフルフル

零「俺だが

?/?/?『はい』。零さん今日はどうなご用件でしょうか？』

零「後片付けを頼む。テュノア夫妻がーーーの地点にいるからモル  
モットにしてくれ」

?/?/?『了解しました』

零「他の奴らは記憶をいじくつたりどうかに放置しておけ

？？？『珍しいですね。あなたがそんな甘い指示するなんて』

零「あまり目立ちたくないからな」

？？？『もう充分目立つてますから』

零「それじゃ」

ガチヤン

シャル「うつ」

零「ん、気付いたか」

シャル「零くん」

零「もう大丈夫だ。くん付けはしなくていい」

シャル「うん。だつたら零も僕のことをシャルって呼んで欲しいな」

零「構わんぞ。シャル、もう家族のことで心配することはない。たく俺と結婚つて冗談だけにしろって感じだよな。シャルは一夏が好きなのに」

ズーン！

シャル「そ、そうだね」

零「どうしたんだシャル？」

シャル「なんでもないよ。…………零のバカ」

零「あれ？俺なんかした？」

一方その頃

一夏「零の奴どこに行つたんだよ！」

ラウラ「1人でもなんとかなるが」

3回戦、一夏とラウラ1人で奮闘。

▽シラウラ（前書き）

前回、一方通行のセリフが所々抜けてた。  
もつと一方通行の発言出したかったのに。

零サイド

一夏「零、どこに行つてたんだ? 一人でめんどくさかつた弋

零「誘拐犯をボコつて売り飛ばしてきた」

一夏「サボつたからって言い訳するなよ」

零「そーですよね。その反応が普通ですよね」

一夏「はあー。まあいや。次の相手はリカラードだぞ」

零「あのチビ黒ウサギは俺が狩るから手を出すなよ」

一夏「分かったよ。俺はシャルロットの相手でもしてくるよ」

零「それじゃあ、行きますか」

アリーナ

リカラード「2回戦に出ていなかつたから逃げたのかと思つた弋

零「逃げる? 何から逃げる? チビ黒ウサギからか?」

リカラード「毎晩しあつて...」

シャル「落ち着いてラウラ。零の挑発に乗っちゃ駄目だよ」

「ラウラ」「くわ」

零「シャルがストッパーになつて良かつたな。チビ黒ウサギ」

一夏「あれ? こつの間にシャルロットのことをシャルって呼ぶようになつたんだ?」

零「誘拐犯から助けた時」

一夏「だから嘘はいって」

零「少しばかじりや」

千冬『いい加減始めんか!』の馬鹿者共!』

一夏「千冬ねえを」

零「怒らせてしまつたので」

零・一夏「勝たせてもらいましょうか!」

試合前に言つたよつに一夏はシャルの相手をしてくる。

零「お望み通り一対一だ」

「ラウラ」「お前を倒して教官に認めてもらひー。」

零「少しあごい顔するよつになつたみたいだが、それは無理だな。

俺の名前は織斑零！俺の前では悪魔だろうと指定席！正々堂々不意をつってご覧に入れましょーうー。」「

『カーニバル』が集まりISの形を作っていく。そして、緑の色になる。

それを置いて零は距離をとる。

零「《策士》&《狂戦士》。来いよ《境界の瞳》」といふ名の失敗作」  
ベルセルク ヴォーダン・オージェ

ラウラ - 貴様！！！

挑発は簡単な戦略の1つだぜ。

でも、なんか禁句ほかつたな

頭に血が上り過ぎて動きが単調たせ。

ハハハ・遇に！牙魔た！」

ハリスは攻撃していく『狂戦士』を切り付けるが

ラウラ「何つ!?」

切り付けられた部分だけ崩れて攻撃がすり抜け、そのまま攻撃を続ける。

零「その中身は空っぽだぜ」

「ハカラ」「ならー。」

「ハカラ」がAICOで《狂戦士》の動きを止めると、

スパン！

零「俺を忘れるなよ」

零が「ハカラ」を撃ち抜く。

「ハカラ」「ハカラー。」

零「やつらもまだ駄かつたのに、今のお前は全然駄目だな」

「ハカラサイド

「ハカラ」

手も足も出ないなんて。

こんなに差がある物なのか？

私は「のまま負けるのか？

あいつに勝ちたいのにー。

教官に近付けると思ったのにー。

あいつと同じだけの力があれば、

(力が欲しいのか?)

誰だ?

(力が欲しいのか?)

ふつ、誰でもいいか。

寄越すといふなら寄越せ!

あいつに勝てるだけの力を!

零サイド

ラウラの『黒い雨』ショウガヤルルヅエア・レーベンの装甲が液体のよつた金属を覆つていぐ。

バーチシステムが発動したか。

千冬『大会は中止だ! 全員アリーナから離れろ!』

アリーナがパニックになる。

シャル「零! 何やつてんの! 早く行くよ!」

零「先に行つてろ。俺はこいつの相手していくから!」

一夏「じゃあ、俺も

零「お前は《零落白夜》の使い過ぎでもつまとうビードルエネルギーが残っていないだろ」

一夏「で、でも

零「試合前に言つたが、あのチビ黒ウサギは俺の獲物だ。手を出すつて言つならシールドエネルギーにしちまうぞ」

一夏「はあー。分かったよ。シャルロット行くぞ」

シャル「で、でも

一夏「行くぞ。あんなつたら零は止まらねえからな

零「Thank Youな一夏。シャルを頼む

一夏「ちゃんとラウラを連れて戻つて来いよ

零「愚問だな

一夏はシャルを連れて避難する。

ラウラの周りの金属の液体はあるHの形を作る。

千冬サイド

千冬「あれは《暮桜》だ！」

山田「それって織斑先生の専用機じゃーー?」

千々一「零ー早く避難しろーー！」

零『千々さん。悪いけどこいつは俺の獲物だ。手を出す奴がいたら潰すよ』

千々一「はあー。しうがなー。死ぬなよ

零『俺が死ぬとでも?..』

山田「な、何かあったらひいすみですかー！」

千々一「山田へー。パーーでも飲んで落ち着け

山田「それ砂糖じゃないで塩です

零サイド

千々さん。落ち着け。

零「ぐーー、許可が下ったし殺して解して並べて囁いてせよーー！」

そうじでお互いの刃を交える。

零「それで千々さんを真似したつもりか?それで強くなつたつもいか?」

その言葉に全く反応せず、攻撃を繰り出していく。

零「今のお前は弱過ぎるー。」

その攻撃を軽く避け、弾を打ち込む。

零「ほんなん全然面白くねーぞー！」

こんな千冬さんの動きを作業するだけの人形なんて全然恐くない。  
全然やり合って楽しくない。

駄目だ。駄目だ。全然駄目だ。

他人から貰った力で満足するなよ。

安易に力に頼つてんじゃねーよ。

ラウラ。お前が望んだのは強さであって、そんな力じゃないだろ。

零「とつとつ田を覚ましやがれー！」の大馬鹿野郎がー。」

完璧な一撃が《暮桜》に入る。

ラウラサイド

ラウラ『貴様は何故そんなに強いのだ?』

零『俺が強い? 強いって言つのは一夏みたいな奴のことを言つんだ  
よ』

ラウラ『一夏？貴様の方があの愚弟より力を持つているだろ』

零『力？だから、お前は前提条件が間違ってるんだよ。』

ラウラ『前提条件？』

零『力は強さじゃない。力は力。強さとは別物だ。強さを持たない力はただの暴力でしかない。お前の見た千冬さんは力だけの存在だつたか？』

ラウラ『違う！』

零『そういうことだ』

ラウラ『だったら強さとは一体なんなんだ？』

零『自分の力をどう使つか

ラウラ『力をどう使つか

零『そう。一夏は全てを守るとしてる。だからあいつは俺なんかより強い』

ラウラ『なら貴様は力をどう使つんだ？』

零『そうだな、一夏が全てを守るために手を貸すためだな

貴様も充分強いよ

「ウラ『私にも手を貸してくれるか?』

零『もちろん』

## 2巻Hペローグ

零サイド

タッグマッチから数日後。

あの後原作通り大会は中止になった。

当たり前か。

バーチシステムを倒した時にラウラの精神と会った。

つーか、本当は一夏が会うべきだつたんだけどなー。

まあ、相手をしたのが俺だつたからしちゃうがないか。

そのラウラと会つてまだ眠つているみたいだ。

原作と違つじ。マズいよな。このまま植物人間だつたりマジでビリ

しそう。

今日も見舞いに行くか。

零 「鬱だー」

一夏 「落ち込むなよ零

零 「お前だつたらもつと下手へ出来たのになー」

一夏「零より上手くなんて出来ねーよ」

いや、出来てたんだよ。

やつぱ、一夏の主人公としての才能は流石だわ。

千冬「朝のホームルームの前に良いユースだ。ボーディッヒが今朝目覚めた。入って来い」

ラウラ「はい。教官」

零「良かつた」

マジで良かつた！

原作ブレイクは好きだけど味方キャラが居なくなるのはあり得ないからな。

ファーストキスを奪われた。

零「はつ？」

ラウラ「貴様を私の嫁にする…異論は認めん…」

零「あのー、一夏の席は一つ右なんだが」

一夏「何故そこで俺の名前が出てくる？そこは夫じゃなく、嫁と言つたことに疑問を持つ所だ」

ラウラ「部下が言つていた。日本では自分の好きなやつを俺の嫁と

か自分の嫁とか言つのだろ?」

零「その部下は一般的に駄目人間といつ部類に属してゐるぞ。」

「マジでどうしたことですか?」

「なんで俺?」

「ラウラは一夏のハーレムだろ?」

「この作品で一夏よりハーレムを形成してゐる朴念人野郎

さて、今はそんなことよつ逃げるか。

だつてー

千冬「篠之野。刀を貸せ」

武器無しで勝てるわけねー!」

山田「家庭科室から包丁5本程取つてくるので待つてください」

山田女史。包丁は一本で致命傷なんですよ。

楯無「今回の出番これだけってどうことかな?」

多分、3巻も1年だけの臨海学校だから出番は無いかと。

簪「二コヅー」

恐い！ただ笑つてゐだけなのに恐い！

シャル「零！」

シャルが女神に見える！

零「シャル、助けてくれ！」

シャル「朝からいきなりそれは無いんじゃないかなー？」

地獄に叩き落とす邪神でした。

シャルはエスを展開してゐ。

零「あばよ。トッシアン！」

窓から退散！

一夏「二二三階だぞー！？」

零「I can fly！」

ハングライダー持参してて良かつた。

一夏「お前はビーンの怪盗だー！？」

一夏サイド

千冬「逃げられたか」

簪「大丈夫。零くんの制服に発信機ついてるから」

千冬「でかした」

楯無「流石私の妹！」

一夏「なんでそんな物ぐつついでんだよー!? おかしいな。俺の常識  
が通じない」

駄目だこのクラス。

千冬「その前にデュノア」

シャル「なんでしょう?」

千冬「デュノア夫妻が行方不明だそうだ。何か知らないか?」

シャル「知りません」

千冬「そうか」

シャルロットの返答は否応なくといつより拒絕に近かつたな。

千冬「それでは追うぞ」

一夏「授業は?」

千冬「危ない。忘れるところだった。しうがない私は零を追う。  
他の者は授業を受ける。山田くん後は任せた」

山田「織斑先生だけズルいです」

千冬「私は授業をサボった罰を『え』に行くだけだ。安心しろお前達の分も私に任せろ」

山田「分かりました」

一夏「酷いな！逃げる理由作つておいてその対応つて！」

千冬「一夏、何か文句があるのか？」

一夏「いえ、ありません」

零「めん。俺は逆らえないや。

千冬「それじゃ行つてくる」

楯無「頑張つてください」

うん。零頑張つて生き延びる。

買い物前日（前書き）

ヒロイン増やし過ぎた。  
ネタが足りない。  
ヒロイン減らすか？

そういうえば10万PV突破！  
何かした方がいいでしょうか？  
意見があつたら感想にお願いします。

零サイド

ジリリリリリリリリリリー！

もう朝か。

クソ眠いな。遅くまで「コア」じぐつてたのが悪いか。

田覚ましを止めなくては

ムニコツ

柔らかい？

以前にも触れたことがある柔らかさだな。

ムニコツ ムニコツ

??.??.「せりん」

零「まさかー？」

バツ！

布団をとつぱりひつ全裸のワカラが寝ていた。

「ワカラ「なんだ？もう朝か？」

零「何故お前がここに居るー。」

「ウラ「お前が私の嫁だからだー。」

零「意味が分からん！胸を張るなー隠せバカー！」

「ウラ「夫婦とは包み隠さないものなのだろ」

零「お前はいつぺん日本語の勉強をしてー」

一夏「朝っぱらからひぬけになつてウラー。なんで裸なんだー？」

「ウラ「無粋な奴だ。夫婦の営みを見るなんて」

一夏「…………悪い。廊下に出てるから続けてくれ」

零「助けるよバカ！」

千冬さんに怒られるまで続いた。

放課後

おかしい。命が危険に晒されることが最近多過ぎる。

しかも、敵工Sより味方である原作キャラからの攻撃の方が多いってどういふことだー？

やつぱりオリキャラだから嫌われてんのかね？

やつぱりこいつは朴念人

ピローリーン

メールか。

From千冬

本文 明日、林間学校での水着を買ひから、選ぶのを手伝ふ。

千冬さんは流石に拾われたからって家族だから嫌つてゐる」ではない  
か。

From零

本文 分かりました。一夏も誘つて家族3人で行きましょう。

これでよし。

零「おい、一夏」

一夏「なんだ?」

ピローリーン

一夏「悪い。ちよつとメールが

零「別に確認してもいいだ

メール見た一夏。

零「今度、買い

一夏「悪い。予定が入ってるから無理だ

零「まだ日ひを言つてないんだが

一夏「その買い物に行く日は忙しく予定なんだ

零「じゃあ、行く日を変えれば

一夏「悪い。日ひが変わったら風邪をひく予定なんだ

零「す、予定だなー?」

一夏「部活があるから行くわ

一夏はやつて部屋を出る。

零「今日は部活が休みだって言つてたつていなーしー

廊下に一夏の影は無かった。

一夏に嫌われることしたつけかな?

一夏サイド

はあー。

From千冬

本文 零との買い物について来たら殺す。

最近、千冬ねえのキャラが壊れてると思う。

強力なライバルが増えたからしじょうがないのか？

まあ千冬ねえには幸せになつてほしいからいいけど。

零サイド

From零

本文 一夏は予定があるみたいですね。

ピロニー

From千冬

本文 そうか。残念だが一夏抜きで行くぞ。明日の10時に集合だ。

明日の10か。ホント一夏の奴どうしたんだろ？

アカウナサイド

困った。

零の奴に私の嫁だと自覚させるにはどうしたらいいのだろうか？

思ついたこと（この章の最初の辺りです）は全てやつてしまつた。

私にはいつこう事に關して知識がないじ過れる。

こうなつたら

ラウラ「私だ」

クラリ『どうしましたか？隊長』

ラウラ「零のことなんだが」

クラリ『隊長が好意を寄せてくれる織斑零のことでしょうか？』

ラウラ「ああ。いわゆる私の嫁だ。」

クラリ『それで？』

ラウラ「私の考えた作戦は使こしきつてしまったのだ。だから作戦を考えてくれ」

クラリ『そろそろHS学園では林間学校に行きますよね？』

ラウラ「ああ。三日後に控えている」

クラリ『この手のイベントは距離を縮めるのに絶好の機会です。海が近くにありますから隊長はどういう水着を所持しているのですか?』

ラウラ「学園指定の水着だけだ」

クラリ『隊長は何を考えていらっしゃるのですか! エス学園指定の水着は旧スクール水着。確かに悪くはありません。ですが…』

ラウラ「なんだといつのだ?』

クラリ『旧スクール水着は一部のマニアにしか受けません…』

ラウラ「なつ」

クラリ『そこで水着を織斑零に選んでもらうといつのはどうでしょう? そうすれば買い物に称してドードーすることが出来ます』

ラウラ「おおー! 早速実行に移す。礼を言つぞクラリッサ!』

クラリ『いえ。我々黒ウサギ部隊は隊長と一心同体です! 成功を祈ります』

ラウラ「よい結果を待つていろ』

私はよい部下を持った。

それでは早速

Fromラウラ

本文 買い物に付き合え。異論は認めん！

零（強制かよ。まあ、丁度いいし）

From零

本文 分かった。明日の10時に駅の前に集合な。

ピッ

ラウラ「私だ！買い物に誘うことが成功したぞ！」

クラリ『おめでとうござりますー隊長ー』

零と二人で買い物。

簪サイド

楯無「ズーネル——。私も林間学校に行く——」

簪「お姉ちゃん。子供じゃないですか？」

楯無「こうなつたら生徒会長宣言で」

簪「織斑先生がいますよ」

楯無「うべ」

簪「どうわけで今回はあきらめてください」

楯無「ヤダー。零くんに水着見せるんだもん」

簪「…………水着」

楯無「そうだ！水着を零くんと買いに行けばいいんだ！」

Fron楯無

本文 水着を新しく買つんだけど一緒に行かない？

ピロニー

Fron零

本文 いいですよ。丁度明日買い物に行く予定だったので駅前に10時に集合です。

楯無「明日は零くんを誘惑しちゃうもんね」

「これだけはお姉ちゃんにも負けられない！」

Fro三簪

本文 私も買い物について行っていいかな？

ピロニー

Fro三零

本文 別にいいぞ。お前ら仲良くなつたな。嬉しいぞ。

簪「よし」

楯無「ウガ―――邪魔するつて言つの？簪」

簪「そんな」とないですよ。お姉ちゃんと私は仲良しなんですから」「

簪「ふん。そんな胸で私に勝てるども？」

簪「い、これくらいの方が需要があるんですよ。第一胸で言つたら山田先生に勝ち田無いですよ」

ガ――――

自分で言つて悲しくなってきた。

お姉ちゃんも〇トヽだし。

櫛無・簪（（でも明日の敵は一人。負けない））

山田サイド

また水着小さくなつてますよ。

去年買い替えたばかりなの。

しうがない。また買いに行くしかないですね。

やつぱり一番最初には零くんに見てもらいたいですね。

買い物について来てもらいますかね。

ついでにパークが出来ますし。

ふつふつふつ。こんなこと思つるのは私くらいですね。

他にもたくさんいます。

F r o m 山田

本文 買い物に行くんですが、一緒に行きませんか？美味しいカフエを知つているんすよ。そこでお昼は先生が奢つちゃいますよ。

ピロニー

早っー？

From零

本文 行きます！行かせていただきます！明日の10時に駅前で集合です！

どれだけ奢つてもらえるのが楽しみなんですか。

まあ、計画通り。

シャルサイド

そりこえは僕は男子として転校してきたから水着無かつたんだよね。

もしかして女子ってバレてなかつたら男物だった！？

本当、零には感謝しなきや。

何かプレゼントしようかな？

Fromシャル

本文 今までのお礼したいから買い物に行かない？

ピロニー

From零

本文 そんなこといいの?。まあ、明日に買い物に行くから10時に駅前な。

何を買つてあげようかな?

零サイド

明日はみんなで買い物か。

嫌われてるわけじゃなかつたみたいだな。

今日は早めに寝るかな。

## 眞二物一（繪畫卷）

せうまつはめだ。  
リノーメン書へ。

## 買い物1

零サイド

えっと、今の時間はもう少しで9時30分。

余裕で間に合ひつな。

到着つてみんなもつ屈るし！？

何分前集合だよー。

ギロー！

零「あのー。世帯ではなんでそんなに殺氣を飛ばしていくんでしょ  
うか？」

千冬「別に」

何その思わせ振つなセリフ。

カツラ「やまつ血覚が足りん」

なんの自覚ですか？

楯無「敵が多い」

えつ。敵に狙われてる自覚！？

簪「山田先生……」

山田女史が狙われてる！？

山田「私だけじゃなかつた

他にも狙われてる奴がいるの！？

シャル「しょうがないか。零だし」

狙われてるの俺！？

千冬「まあいい。買い物を楽しむか

零「いいのかよ！？」

千冬「この状況を作ったお前が何を言つてている？」

零「なんでもありません」

そんな人を殺せるような視線止めてください。

他の奴らもやつてるし…

何これ？新手の虐めですか？

山田「あのー。時間制にしませんか？」

全員「「「賛成」「」」

とこりわけで山田女史は飯の時間と自動的に決まり、残りでじゅんけん開始！

じゃんけんの結果。

千冬「まずは私からだな」

零「千冬さんは相変わらずじゃんけん強いな」

千冬「じゃんけんには必勝法があるからな」

零「必勝法？」

千冬「出す瞬間に相手が何を出すか見て瞬時に自分が何を出すか決めればいいんだ」

零「それって後だしじゃ」

千冬「それを0・1秒で行つ」

零「人間技じゃねー！そりゃ後だしに誰も気付かないわ」

千冬「ばれなければいいんだよ」

零「まあ、そうだけど。おっ千冬さん着いたよ」

水着売り場到着。

千冬「どんな物がいいんだ？」

零「選ぶって言つたけど、そういうのよく分からん」んだよな

千冬「じゃあ、少し待つでいい」

やつぱつこいつのつて一夏の方が向いてるな。

千冬「零、白と黒どちらの方がいいと感づ?」

零「ハーン、千冬さんは黒の方が似合つてると感づ」

原作と同じのを選べばいいかな。

千冬「そうか。なら」ひみこひみこ

やつこいつとその水着を買つてきた。

千冬「カフュで少しお茶するとしよう」

カフュ移動。

千冬「そういうえばデュノア夫妻が行方不明だそうだ」

零「そりゃ大変」

千冬「驚かないんだな」

零「シャルから聞いたし」

千冬「デュノア夫妻がどうなったか知らないか?」

零「なんで俺が知つてこるんだ?」

あこつらに任せたから生きてるのか、死んでいるのかも分からぬ。

千冬「ならいいが」

零「千冬さんは仕事熱心だな」

千冬「お前らを守ると約束したからな」

零「俺も千冬さんは楽しんでくださいよ」

千冬「零」

零「だから今日へりこは楽しんでくださいよ」

千冬「そうだな」

楯無「交換の時間ですよ」

千冬「ちつ」

零「もうそんな時間か。また後で千冬さん。」

千冬「くつ」

楯無「さて、どんな水着がいいかな

零「楯無さんならなんでも似合つんじゃないですか」

楯無「また、お世辞を言つひやつてー」

零「さー。お世辞ですか」

ボコッ

零「グホッ！……[冗談です]

いきなりグー！？

適当に対応しようと。

楯無「これは似合つ..」

零「似合つんじゃないですか」

楯無「じゃあ、これは？」

零「それもいいんぢやって、紐じゃないですか！？」

隠す[面積があまりに少ないやつ]。

楯無「そうかー。零くんはこうのがいいんだー」

零「んなわけないじゃないですかー！」

楯無「試着してこようかなー」

零「マジで謝りますから[冗談で済ましてください]

楯無「そしてみんなに零くんに強要されてつて言ってふつ回ねうつと

零「すいませんでした！」

必殺士下座！

楯無「土下座して着てって、頼まれちゃった」

零「この対応は酷過ぎるだろー。」

楯無「ははははーーー！冗談で済ましてあげよ！」

良かつた。本当に自殺しようかと思つたぞ。

零「あんたは俺を社会的抹殺をするつもりですか？」

楯無「キミの人生は私次第だね」

零「冗談ですよね？」

楯無「あはははーーー！」

零「否定じりやーーー！」

楯無「時間無いし選ばないとね。決まりないとやつさんのこしからうよ」

零「全力で選ばせていただきます」

楯無「ようじくねーーー！」

原作では出でないから今までの経験、知識を全て使え。

零「これでどうだー！」

楯無「じゃあ、それにするわ」

零「悩まなくていいんですか？」

楯無「零くんが未来をかけて選んだみたいだしね」

時間になつて楯無さんは嬉しそうに行つた。

シャル「零ー！」

零「次はシャルか」

シャル「早く水着選ぼうよ。プレゼント買つ店はいい所見つけたら  
ら

零「分かつた分かつた」

シャルのも原作と同じやつを買った。

そして、シャルが言つていた店に移動。

零「アクセサリーショップか」

シャル「そうだよ。そういうば零のエスの待機状態つてどんな形なの？」

零「ガラス色のアンクレットだよ。通信が本当にじづらいわ

シャル「じゃあ、足首につける物じゃないのにするね」

零「お前に一存するよ」

シャル「ちよつと待つててね」

わい、どう時間潰すか。

十分後

シャル「はい。どうだ」

零「ありがとな。えっと、ネックレスか

シャル「うん。メノウを使った物だよ」

零「これより安いが、これをやるよ」

シャル「砂時計？」

零「そう。砂時計のイヤリングだ。いい形だから買った」

シャル「そんなの悪いよ」

零「わつきシャルは自分がプレゼントしたいからするって言つたよ  
な。俺もプレゼントしたいからしただけだ」

シャル「…………零。ありがとう」

零「もうこたしまして」

買い物2（前書き）

「ハブコメ書くの難い

## 買い物2

シャルの時間も終わり、次は山田女史。

山田「零くーん」

零「山田女史」

山田「お願いがあるんだけどいいかな?」

零「なんですか?」

山田「私も織斑先生と同じようにプライベートの時は名前で呼んでもらえないかな?」

零「別に構わないですよ」

山田「それじゃあ

零「はい。真耶さん」

山田「はうー」

零「どうしたんですか真耶さん?」

山田「はやー」

零「真耶さん?大丈夫ですか真耶さん?」

山田「だ、大丈夫ですか。や、それより早く行きましょ」

零「大丈夫なさいですけど……」

山田「早くしないとお廻を奢れなくなつたやいまよ」

零「早く行きましょ」

山田（零くらつて結構単純だな）

零「着きましたよ」

山田「サイズが合つたり少ないんですね」

零「めぼしこのは見つけられましたよ」

山田「ホントですか！」

零「これなんてどうですか？」

原作と同じ物だぜ。

山田「いいですね。それじゃあ買つてしまわね」

これで昼飯の時間が長くとれるぜ。

山田「それじゃ、『』飯にしますか

零「待つしました」

零「いい雰囲気な店ですね」

山田「ここは値段も低く、味もいって有名なんですよ」

零「うーん、何を頼みますかね?」

山田「好きなだけ頼んでいいですよ」

零「ホントですか!」

山田「ホントですよ。さつき言った通り安いです」

零「分かりました。注文いいですか?」

店員「はい」

零「サンドウイッチ全種、ピザ全種、サラダ全種とコーヒーをブラックで」

山田「はい」

店員「ご注文を繰り返します。サンドウイッチ全種、ピザ全種、コーヒーのブラック全てお一つずつですね」

零「はい」

店員「合計6582円になります」

零「おおー。本当に安いですね」

山田「ハハ。このカフュで本当に良かった」

十数分後

零「あー。美味しかった」

山田「よし全部食べましたね」

零「いやー、久しぶりに満腹まで食べましたよ。千タケヒコ止められましたから」

山田「それは織斑先生の正しい判断だと思います」

零「真耶さん。ありがとうございました」

山田「どうございました」

「ウラ」「お嫁、時間だわ」

零「時間か。それじゃあ」

山田「じゃあ、また後で」

零「ラウラ。買い物つて何買つんだ?」

「ウラ」「水着と服だな」

零「じゃあ、水着からこへか」

「ウラ 「ああ」

水着売り場

零 「やで、どんなのを買つ?」

「ウラ (水着か。私は胸が小さいがクラリッサが教えてくれた日本のことわざに『貧乳はステータスだ』というものがあったからな)

「ウラ 「嫁に選んでほしいんだ」

零 「そつか。ならこれなんてどうだ?」

原作と同じ物。

「ウラ 「これか?」

零 「ダメだったか?」

「ウラ 「こんな可愛い私の似合つわけ……」

零 「いや、似合つと思つ。お前可愛いし」

ボン!

「ウラ 「わわわ私が可愛い?」

零 「そうだろ」

「フウラ 「そ、そ、うか。私は可愛いのか」

零 「それより水着選ぼつぜ。さつきのがダメだとな」

「フウラ 「さつきのでいい」

零 「いや、でも」

「フウラ 「さつきのがいいんだ」

零 「そ、うか。なら買つてこ」

「フウラ 「ああ」

お買い上げです。

零 「次は服だな」

「フウラ 「私がよく行く店があるんだ」

零 「そ、うか。意外だな」

「フウラ 「まあ、知り合いで教えてもらつたんだがな」

零 「じ、やあ、行こうぜ」

数分後

「フウラ 「いいだ」

零 「いいで

「ズブレシップかよー。」

「ウラ 「嫁、何を叫んでるんだ?」

零「この店を教えた奴は誰だ?」

「ウラ 「私の部下のクラッシュサだ」

零「今度そいつと一回戦わせる」

「ウラ 「ん? 分かった」

零「といひでお前はどんな物をこいで買ったんだ?」

「ウラ 「えっと、団長と呼ばれている服とネギが好きな歌姫の服と白い魔法使いの服だ」

零「よく名前を言わなかつた」

「ウラ 「それじゃあ服を」

「ウラ 「今日は俺が勝つてやるから他のところにしよつ

「ウラ 「別に構わないが」

「ズブレシップで待たされるのはキツ過ぎる。

その後、白いコンペースを買つてしまつたらとても喜んでくれた。

最後は簪。

簪「零。ちよつと選ぶから待ってて」

零「分かつたよ」

はーー。結構疲れたな。

女「ちよつヒナの人に」

零「ん。俺にようか?」

女「そりゃ。ちよつとこられ片付けておこで」

零「断る。なんで俺がそんなことしなきゃならん」

女「男のくせに生意氣ね!」

零「男のくせに?バカかお前は?女が優遇されるのはHISのおかげだろ。そのHISに乗つたことがないお前の言つ」とを何故聞かねばならん」

女「の、乗ることが出来ない男が何を言つてゐるのよー?」

零「俺の名前は織斑零つて言つてさだ」

女「織斑零?まさか!」

零「そりでーす。HISに乗れる男子の方でーす」

女「へ？」

そいつ聞いて女はどうかへ行く。

簪「凄いね。零」

零「なんだ。見てたのか」

簪「『』めんね。助けに入れなくと」

零「別にいいよ。お前が文句言われるようすつとこ

簪「でも、零の」と守りたかった

零「じゃあ、簪が守れるようになるまで待つんだよ」

簪「うん」

零「それよりここのがあったか？」

簪「これなんじうつかな？」

シンプルなワンピースタイプ。

零「いこと思ひがち。簪によく似合ひやす

簪「ホントに…じゃあこれにあね

これで今日の買い物は終わった。

疲れただけ楽しかった。

……オチがないな。

海（前書き）

そろそろ『バカとカオスと原作ブレイク』に戻るかもしれません。

## 海

目的地到着。

千冬「海にでも行つて」。私達も後から行く

千冬さんは旅館へ向かう。

零「行きませー」

一夏「零、これどう思ひ？」

ウサギの耳が地面から生えている。そして看板に引っ張れと書かれている。

一夏「これってあの人たよな？」

零「多分そうだろ」

一夏「やつぱりそうか。どうする、抜いてみるか？」

零「いや、逆に押してみよ」

ウサギの耳を押すと普通に埋まった。

? ? ? 「その行動は予想外だったよー。」

女の子が降つてきて良いことはない。

物語では良くあるが、そこに居合わせた奴は何かに巻き込まれて大変な目に合つからな。

思考するの止めよ!」

今、女の子?が降ってきた。

俺より歳上な女の子がね。

束「零くん受け止めて-----」

零「一夏頑張れ」

一夏「お、俺!...?」

一夏を引き寄せで距離をとる。

束さんの足が一夏の顔にズーンー

一夏「グホッ!」

束「酷いよ零くん避けるなんて!」

零「まずは一夏に誤つてください」

束「そだね!一夏くん『メン』ね」

一夏「身代わりにした零も謝れ」

零「だが断る。束さんは何しきたんですか?」

一 夏が騒いでるけど知らん。

束「零くんに水着姿を見せに来たんだよ」

零「今すぐ帰れ」

束「ところの話は【冗談で】篠ちやんとか一ひやんの水着すみ

零「マジで帰れ変態」

束「本物は篠ちやんに誕生日プレゼントをあげにきたんだよ」

零「プレゼントの内容は大体予想出来ますけど」

束「分かっちゃった?」

零「そろそろ篠も欲しいが頃でしょ?」

束「そりなんだよー。頼まれちゃってねーーーところの話で篠ちやんの居場所はどこか分かる?」

零「あのウサギの耳を見たらいつか行きましたよ」

束「そりかー。でも大丈夫ーーこの篠ちやんレーダーでつて抜けないんだけどーーー」

ウサギの耳を頑張つて引っ張つている。

零「まあ、思いつきり押しましたからね」

束「ちよつと手伝つてー」

零「はいはい」

確かに抜きずらいな。

零「おりやー！」

スポット！

バタン

零「いてて」

束「零くんつて大胆」

零「へつ？」

転んだ時に束さんに覆い被さつちました！

零「す、すいません！」

束「いいよ。もつとして」

零「痴女だ！」

束「止めちゃうの？また今度にね」

零「一度とねえよー！」

束「それじゃあ篠ちやんのところに行つていいねー。」

零「行つていいじゃーい」

束「行つて来まーすーあつ、零くんが回収したの使っていいよつてみんなに脅迫しといたから」

零「やつぱりあなたでしたか」

束「じゅーねー」

束さんは森の中に迷えてこつた。

零「えつと一夏はと」

一夏「最近扱いが酷い気がする」

零「体操ずわりしないで行くぞ」

一夏「ひどーー！」

とこつわけで海！

一夏は鈴とセシリアに絡まれてるからまつとく。

さて、俺は何をするか。

簪「零。暇ならスイカ割りしない？私達じゃ全然割れなくてさ」

簪と本音達が誘つてくる。

零「じゃあ、やってみるか

スイカ割り開始

さて、皆の指示はど

簪「スイカは右だよ」

本音「といつのは嘘で本当は左だよ...ゼロッチ」

「前だよー」

「実際は10時の方に向に3メートル」

「上ー上ー」

「右下A R上上右Bー」

協力する気ねー！

こりや誰も成功しないわ。

つか最後の奴なんのコマンドだ！

しゃない。本気を出すか。

集中

零「そこだー。」

ドカーンー！

手応えあり。

田隠しを外してみると。

スイカが爆散してた。

零「やべ。ちよつと本氣出し過ぎちよつた」

バチーンー！

零「ぐほつ」

千冬「食べ物を粗末にするな」

零「何故に海に出席簿持つて来てんの」

千冬「それよりビーチバレーに付き合へ。相手が居なくなつてしまつてな」

どひこひことだ？

千冬さんその後ろを見ると。

死体の山が出来ていた。

「」は海だぞ！

作るなら血の海だろ！

て〔冗談はこれくらいにして。

あれはラウラとシャル！

零「大丈夫か？一人とも！」

シャル「れ、零」

ラウラ「私達では教官を倒せなかつた」

シャル「でも、零ならやれる」

ラウラ「後は頼んだぞ」

カクツ

零「一人とも――――――――――――――――！」

千冬「どうした？怖気づいたか」

零「一夏。行くぞ」

一夏「分かつた」

千冬「さすが私の弟達だ。負けると分かつていて挑むとはな

一夏「倒れていつた奴らの為にも」

零「俺達は負けない！」

千冬「ならば潰してやる!私の弟達よー行くぞ山田くん」

山田「はい。織斑先生」

簪  
.....  
何い

五分後

## 一夏「ファイヤートルネード！」

田「マジン・ザ・ハンマー」

零「エターナルブリザード！」

千冬「マオウ・ザ・ハンド！」

鈴「ねえセシリア」

セシ「なんですか鈴さん」

鈴「いれってビーチバレーのはずよね?」

セシ「はい。そのはずですが」

鈴「超次元サッカーに見えるのは私だけ?」

セシ「大丈夫ですわ。わたくしにもそう見えますから」

鈴「良かった。私だけじゃないんだ」

零「へつ。一夏あれをやるぞ!」

一夏「よしーファイヤー!」

零「ブリザード!」

千冬「何!」

山田「止めきれない!」

零「俺達の勝ちだ!」

千冬「ふつ、もつお前らに教える」とは何もない

バサツ

簪「何時まで続くんだろこの空氣?」

## アンケート結果

本日アンケートが終了しました。

結果

バカとカオスと原作ブレイク 11票

IS カオスに原作ブレイク 28票

よつて、IS カオスに原作ブレイクになりました。

アンケートに参加してくださった方、まことにありがとうございました。

もしかしたらアンケートをとったばかりなのにテストの点数が悪かつたらケータイを取り上げられるかもしないのでご了承ください。

アンケート内容

バカとカオスと原作ブレイクとIS カオスに原作ブレイク。

どちらを先に進めた方がいいか迷っています。

なので、8月30日までにどちらの続きが読みたいか、感想に書いてください。

どちらも登録していない人でも感想を書くことは可能です。

なので、気軽に選んでください。

このアンケートは8月31日に消します。このアンケートの感想には返信が出来ないと 思います。

このアンケートの結果は8月31日に掲載します。

たくさんの人々が投票してくれることを願っています。

旅館（前書き）

テスト前

点数が悪かつたらケータイを取り上げられる。

HELP!

零「海が近いから刺身が美味しい」

現在、旅館で食事中。

一夏「確かに。しかもこれ本わざだぜ」

零「前から思つてたけど」S学園つて飯に力かけてるよな

シャル「本わざって？」

零「市販の物は基本的に他の物を混ぜてるんだよ。それで本わざっていうのはちゃんとしたワサビを擦つた物だから風味がいいんだよ」

シャル「ふーん。そーなんだ」

パクつ

大量のワサビオソリー

シャル「――――！」

零「大丈夫か？シャル」

シャル「風味があつて美味しいね」

零「どんだけいい子ちゃんなんだお前は？」

涙田になつてゐる。

シャル「ねー、さつきから気になつてたんだけど、零のおかずの品  
数多くない?」

零「自分で食材を調達して、厨房借りて作った」

シャル「そんなこと普通に答えられてもリアクションに困るんだ  
けど」

やつぱりうつて便利だね。

深海に簡単に潜れるんだもん。

シャル「どれも美味しそうだね」

零「口開ける」

シャル「えつ?」

シャルがこつちを向いて口を開ける。

零「ほい

パクつ

シャルの口にあん肝を入れる。

零「美味しいか?」

シャル「うー、うん」

顔が赤いけどどうかしたのか？

シャル（こきなり何やんのぞ零はー・食べさせるなんて！零の箸だ  
つたからこれって間接キスー！？どどどどひみつー・ビックリし過ぎ  
て味なんて分かんなかつたよー）

シャル暴走し過ぎて考えてる」と滅茶苦茶。

『セシリ亞とシャルロットばっかりするー』

『私達も食べさせて欲しいー』

丁度、一夏もセシリ亞に食べさせていた所だったので周りがつるさ  
くなる。

零「そんなにこの料理食いたかったのか？」

千冬「静かにしろ貴様らー！」

千冬さんの一喝で静かになる。

千冬「零、一夏。あまり問題を起こすな。やつそう零。EVAを使つ  
て海に潜つたと耳にしたんだが」

零「フグのヒレ酒作つたんですか飲みます？」

千冬「今日は大田に見よつ

千冬「零、一夏。お前らの部屋は私と一緒にだ」

『 『 『ええ――――――――――』』』

### 不満の大合唱

千冬「静かにしろー。」

シーン

この風景、録画して面白映像としてうまいよつかな。

千冬「お前らが夜に2人の部屋に侵入するのを防止するためだ」

『 『 『うひ』』』

零「虎穴入らずんば虎兒を得ず」

千冬「まあ、そういうことだ」

――――――――――――――――――

簪サイド

せっかくお姉ちゃんがないのに、零に会いに行かないなんて考えられないよ。逆に考えればみんなは恐がつていけない今はチャンスだよ。

簪「と思つたんだけば、扉の前で向やつてんのみんな?」

『シーラ』

零の部屋の前に篤、鳳、オルゴット、シャルロット、リカーラが耳を当てる。

私も扉に耳を当てみると

零『やあやあ始めやう』

一夏『あ、ああ』

零『なんだ恐いのか』

一夏『やつぱつ、向度やつても少し恐こな

零『安心じる。すべに気持けぬへしてやる』

一夏『それじゃあ頼む』

零『はいよ

一夏『うひ

零『どんどん行くわ』

一夏『あつ、ちゅつヒペースが早くないか?ひやつ』

零『固くなつてんだからしょうがねえだら。ぶんだけ溜まつてゐる

だよ

一 夏『最近、全然やつてなかつたからな』

零『同じ部屋なんだからこいつをやつしやね』

一 夏『それもそうだな。少し痛いがやつぱり気持ちいいし』

零×一夏？

バタン！

第「何をやつてゐるんだ貴様らは！」

零「へつ」

ブスツ

零一  
「べせ」

בְּרִית

グサグサ

一夏「イダダダダダダダ！」

## 効果音の説明

ドカン 篦が扉を蹴り破る音

ブスツ 零が一夏に針を深く刺す音

「ロロロロ 一夏が痛みで転がる音

グサグサ 一夏に刺さつた針が深く刺さる音

零「一夏の針を抜け！【冗談抜きで】のままだと死ぬぞー。」

それはマズい！

その場にいる全員で一夏の針を抜くことになった。

-----

一夏に刺さつた針を抜き終わつたら千冬さんが部屋に戻つて来て、  
「ひどく怒られた。

千冬「一夏、零。汗をかいたら風呂に行つてー！」

零「分かつたけど、酒残しといてくださいよー」

千冬「安心して行けねえよー！」

零「安心して行けねえよー！」

千冬「早く行かないと本当に全部飲んでしまつぞ」

零「よし。行くぞ一夏」

バタン

千冬「お前ら、何が飲みたい?」

『???』

千冬「はあー、いひりで適当にいひりで選ぶぞ」

千冬は冷蔵庫から飲み物を取り出すと篝達の前に置いた。

千冬「ほひじうした。遠慮せずに飲め」

『はあー、それじゃあ頂きます』

篝達が飲み物を飲むと、

千冬「お前ら飲んだな?」

篝達は嵌められたことに気が付く。

千冬「じゃあ私も」

千冬は冷蔵庫からビールを出して飲む。

『へつ』

千冬「何を惚けている。私だって人間なんだから酒くらい飲むぞ。ガソリンでも飲んでいるとでも思ったのか?」

『はあ』

千冬「零の作った酒は後で零と一緒に飲む為に飲むわけにいかない  
しな」

( )(零の飲酒は先生方に承認されてるんだ)( )

千冬「それでお前ら、あいつらのどこがいいんだ?」

千冬「一夏のことなど好きではありません!?」

鈴「もうですよー。一夏のことなんてー。」

千冬「一夏とは一毫も似合ってないんだが」

筈・鈴「あつ」

千冬「お前ら分かりやすいな」

「ウラ」「教育。私は識斑一夏などには興味ありません

千冬「分かっている。だいたい気付いてないのはあの唐変木二人組  
位だろ」

『確かに』

千冬「それで、あいつらのペルル惚れたんだ?」

「ウラ」「私は零に救つてもうござ。強かとは何か教えてもらいました」

セシ「わたくしは一夏さんに他の殿方と違つものを感じましたわ」

簪「私は初めてお姉けやんの妹とじつじやなく見ててくれたからだと思います」

シャル「僕は零のなんだかんだ言って優しいといろかな」

千冬「優しいか。あいつら誰にも優しくね」

シャル「それがちょっと悔しいところですね」

千冬「まあ、あいつらと付き合てる奴は特だぞ。家事全般が出来るし、一夏はマジサーチ、零は針を打つ」ことが出来る

『くれるんですか?』

千冬「誰がやるか。特に零はな。欲しかつたら奪つてみせろ」

『は、はー』

零サイド

風呂場で何故かくしゃみが止まらなかつた。

風邪でもひいたか?

部屋に戻つたら一夏と手分けして、みんなにマジサーチと針を打つやつた。

篠達が帰り、一夏が寝た後千冬さんと晩酌を始めたわだが、

千冬「零いー」

零「十タケん敵つ」といふ意味ですかね」

千冬「私は酔っぱらってなじねーん」

תְּאַמֵּן־יְהוָה־בְּנֵי־עֲמִקָּם

零「ダメだ」りや

千冬さん物凄いペースで飲んでたからな。

顔真っ赤だし、酒臭い。

チユツ

零「はい？」

今、何された？

唇に何か触れた気がするんだが、

千冬「キスしちゃつた」

零「なんすと――――――――――――――――――・」  
一夏「うるさいなー。何があつたん『フツ』

千冬「つるさいな。一夏が起きるだろ」

零「今、永遠の眠りにつかされたみたいなんですけど」

千冬さん」ええ。

一夏が起きた瞬間に眠らしたぞ。

千冬「もう一回キスするぞ」

零「お断りします。まさかと思いますけど外でもしてるんですか？」

俺の姉がこんなにキス魔なはずがない！

つーか、結構美人の姉が外でキスしてるなんてなんかヤダ！

千冬「お前以外にはこんな事しない」

零「出来れば俺にも止めてください」

千冬「ヤダ」

久々に見たよ。そんないい笑顔。

千冬「お前がいけないんだぞ。E.S学園に来てから他の女とばっかり」「コニコニコニコ」

零「最後の方聞こえないんですけど」

千冬「つねやー。」

零「んな理不<sup>レバ</sup>なー。」

千冬「それじゃあ行くべや。」

零「なんでも叶<sup>ヒル</sup>と聞<sup>カ</sup>かまゆか<sup>ハ</sup>きてくだやー。」

千冬「なんでも叶<sup>ヒル</sup>。」

ベゼ

零「撤回<sup>リコ</sup>します。なんでもは無理です。俺が出来る範囲にしてくだ  
れー。」

千冬「大丈夫。お前が出来る<sup>ハジ</sup>だ。」

零「なんですか?」

千冬「『千冬お姉ちゃん。一緒に寝て叶<sup>ヒル</sup>しな』と上田遣<sup>ハシタ</sup>で言<sup>ハ</sup>る

零「マジですか?」

千冬「マジだ。」

キスか黒歴史。

選びよ<sup>ハ</sup>くなへぬ?

千冬「早くしなことキスする<sup>ハ</sup>」

零「まあー。千冬お姉ちゃん。一緒に寝てほしーな

千冬「はうつ

千冬さんが崩れ落ちた。

千冬「私はとてもない化物を産み出してしまったみたいだ

零「もうここですね。疲れましたし、それから寝ます

千冬「そつだな。寝るとするか。一緒に」

零「それじゃあお休みなさい。……………流しありになりましたけどもつ一度言ひ合ひください

千冬「そつだな。寝るとするか。一緒に」

零「最後の部分おかしいですよね

千冬「なにもおかしくない。お前が一緒に寝ようと言つたのだろう

「う

零「アンタが言わせたんだー。」

千冬「お前に拒否権は無いぞ

零「不幸だ

夜はまだまだ続く。



## 作戦会議（前書き）

英語がマズいです。  
ケータイが取り上げられそうなので次の話が投稿出来ないかもしれません。

## 作戦会議

千冬「今日は専用機持ちと篠ノ之は海岸に集まれ」

千冬さんと田代があつた。

顔を赤くして田代を反らした。

まあ、昨晩のことは赤面して当たり前か。

別に何も無かつたからね！

えっちいのはよくないとおもいます。

『あのう、なんで篠ノ之さんもなんですか？』

千冬「専用機が手配されるからだ」

『ズルい』

『篠ノ之博士の妹だから？』

『不公平だよ』

零「その束さん曰く、『有史以来、人が平等だったことは一度も無い』俺もその意見に賛成している。現に女尊男卑が起きているんだ

俺の発言で静かになる。

ところわけで海岸

零「で、束さんは？」

千冬「待ち合わせ場所はここで合ってこる」

束『束さんにして欲しかつたら零くんが『助けて！間近でマジカルワンドーたばねさん！』と大きな声で呼んでください――』

零「誰がするか！」の大馬鹿野郎！」

姿が見えないのに声がしたと思ったら、何を言い始めやがる。

簪「篠ノ之博士つてもしかして」

零「うん。一周回つて基本バカだよ」

束『零くん。早くして――――』

零「言わねえぞ」

千冬「零、やれ」

零「はい？冗談ですよね？」

千冬「やれ。他の奴らも待つているぞ」

零「マジ？」

一 夏達を見るとジジーと『叫くやれよ』と視線を送つてくる。

零「分かつたよ。助けて。間近でマジカルワンドーたばねさん」

束『あれれー声が小ちこよー。もう一度大きな声で』

零「助けてー間近でマジカルワンドーたばねさんー。」

束「はーーー零くんを助けに来たよー。」

束さんが空から降つてくる。

零「俺を助けると思つてまづあんたが死んでくれー。」

束「そんな」と叫つながらさつき束さんを呼んだ零くんをうりゅうじゅうや  
うよ

零「すいませんでしたー。」

DOGENA-

プライド?何それ食えんの?

ハウハ「すう」いな。嫁をこじまペースを乱されるなんて

一 夏「零つて昔から識斑先生と束さんには弱かつたからな

零「だいたいなんで水着なんですか!」

束「昨日会ったじゃん。零くんに見せるためだよ」

バチン！

千冬「いい加減始めろ」

出席簿アタック！

束「痛いよひーちゃん。束さんの脳髄が2つに割れちゃったよー」  
千冬「良かったな。左右両わせで2つの口どが同時に考える」とが  
出来るや」

束「そつかー。それには気付かなかつたよー。さすがひーちゃんあ  
つたまいいー！」

簪「識斑先生は篠ノ之博士の扱いが上手いね」

零「2人は昔から親友だから」

束「そろそろ発表しかやつよー。簪ちゃんの専用機『紅椿』だーー！」

『紅椿』が現れる。

束「この『紅椿』はねー。零くんといっくんと同じ第4世代なんだ  
よー」

シャル「第4世代って、世界各国が第3世代の開発に苦労してるので  
て、ついでに」

零「まあ、『シンデレラ』は扱うのが激難。『白式』は束さんが作るのを途中で飽きたのを調整した欠陥品だけだな」

鈴「スペック高いのにまともな奴ないじゃない」

一夏「束さんだし」

妙な説得力

セシ「あのう、篠ノ之博士。わたくしの『ブルー・ティアーズ』を見てもらいたいんですけど」

束「初対面なのに馴れ馴れしいよ。これだから外国人は。やつぱ、日本人に限るよね。日本人が好きってわけじゃないけど」

零「セシリ亞諦める。これでも丸くなつた方なんだから。束さんは識斑女史、篠、一夏、俺だけで世界を構成してゐるから」

がん無視よりはマシだろ。

フルフル

千冬「私だ」

千冬さんのケー・タイみたいです。

千冬「それは本当か!? 分かった。すぐ戻る」

零「何かあつたんですか?」

千冬「現時刻より特別任務を開始する。貴様いら着いてー」

で、なんかS.F.でよくある司令室的なところに連れてこられました。

千冬「では現状を説明する。ハワイ沖で試験稼働であつた『銀の福音』以降『福音』とする。『福音』が制御下を離れ暴走。監視空域を離脱したと報告があつた」

一夏と鶴は睡然としてゐる。

千冬「衛星写真によると一時間後ここから200キロ南を通過するらしい。その撃退を任せられた」

任されたね。

千冬「教員は訓練機で海上の規制を行つ。だから『福音』の撃退はお前らに行つてもらつ」

セシ「分かりました。『福音』の詳細データをくださー

一夏「死ぬかもしれないんだよな?」

鈴「代表候補生なんだから死ぬ覚悟は出来るのよ

零「あー」

千冬「作戦途中に欠伸とは何事だ!馬鹿もん!」

出席簿が当たる前に千冬の腕を掴む。

零「馬鹿もん？ああ、この空氣に呑まれてる奴らのことですか」

「ううラ「何を言つてるんだ？」

零「氣にくわねえんだよ。死ぬ覚悟？そんな物は丸めてゴミ箱に捨ててこいー。」

鈴「甘いこと言つてんじゃないわよー。」

零「言い方を変える。死ぬなら勝手に死ね。だが死んで他人に迷惑をかけるな」

千冬「貴様の言いたい事は分かった。オルコット、鳳、デュアノ、ボーデヴィイッヒは作戦から外す」

鈴「どうこうしますかー？」

零「まだ分からねえのか？いくらIIS学園が他国から影響を受けねえからと言つても他国の代表候補生が死んだら大事だろ？が。下手したら珍しい男の操縦者の俺が一夏を代わりに寄越せと言つてくる場合もある。出来れば簪も外したかつたがまいいか。識斑女史、簪は外せ、『紅椿』の稼働時間が短過ぎる」

千冬「そうだな。篠ノ之も作戦から外れる」

零「開発していたハワイと通信繋がつてますよね？ちょっと話した

い」とがあるんですが

千冬「構わないが」

『私が稼働試験の第一責任者だ』

零「聞きたいことがあるんですが、『銀の福音』のデータはこれで合ってますよね？」

れっき、セシリ亞が渡された物を見せる。

『そりだが。何か問題でも？』

零「嘘こけ。これが本当に『銀の福音』のデータなわけねえだろ」

『何？』

零「さつき衛星の写真で『福音』を見たが、あの形でこの程度のスペックのわけねえんだよ」

『ガキが何が分かるんだ？』

零「子供だからって舐めるなよ。こっちは1000種を超えるHSのデータを見てんだ」

『1000種？そんなにHSの種類があるわけないだろ』

零「使われなかつた設計図も見てるつて言つてんだよ。束さんが考えた設計図に出したら1000程度じゃかねえがな」

『束？まさか篠ノ之博士か？』

零「まあ、いい。」のデータがあてにならず、加減が出来なくなり、「アを破壊した。ということになつてもしょづがないな」

『ちよつと待つてくれ！アを破壊？そんなこと出来るはずが』

零「IIS学園に侵入した無人機のアを稼働中に破壊したのは俺だが。まあ、破壊する可能性なんてないよな。このデータが合つていなんてことはないらしいから」

『すまなかつた！機密事項だから渡せなかつたが、こつちが本物の『銀の福音』のデータだ！』

零「あん？ そんなこと知るか！ いつかはいつで好きなようにさせてもいいつー！」

『頼む！』銀の福音の暴走の上にアを失つたなんてことになつたら私は

零「しようがないなー、貸しбоのね」

『柄が一つ多いような気が』

零「文句ある？」

『ありません！ それではデータを送らせてもらいますー！』

零「じゃあ、またね」

一 夏、簫、鈴（英語が分からぬ組）以外は顔面蒼白。

一 夏「零のやつ何やつたんだ？」

簫「今回の責任者に無理矢理貸し作っちゃつた」

分からぬ組「はつ？」

簫「しかも貸し10」

分からぬ組『ええ-----!』

一 夏「零に常識は通用しねーな」

簫「さすが歩く理不尽」

零「聞こえてるからなー。これが本物の『福音』のデータか。やつぱ、スペックが全然違うじゃねえか。まあ、なんとかなるだろ。俺が行つて墮として来ますよ。織斑女史、それでいいですか？」

千冬「バックアップとして一夏と更識をつくる

零「構いませんよ。じゃあ、準備しちゃまわ」

-----

10分後

千冬「零、作戦が変更になつた」

零「何故ですか？」

千冬「束の奴が自分の提案した作戦を使わないならエス学園からコア所持の権限を取り上げると言いはじめた」

零「はあー、全くあの人は」

千冬「一夏の零落白夜による一撃必殺だそうだ」

零「それをやること一夏を運ぶ必要がありますね」

千冬「それは篠ノ之が行つ

零「そこまでして籌を出したいか。ならバックアップには俺が出ます」

千冬「分かった。許可する」

さて、一夏がやられないようにひりひりして運ぶかな？

**福音（前書き）**

テストがいろんな意味で終わつた。

次回が投稿出来ればいいんですが。

千冬『一夏、零、篠ノ之。聞こえるか?』

IISのプライベートチャンネルで千冬さんの声が聞こえる。

千冬『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間で決着を心がける』

零「了解」

篠『織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればいいのですか?』

千冬『そうだな。だが無理はするな。零も言つていたがその機体は動かして時間が経つてない。何が起きたのか分からなからな』

篠『はい!分かりました。出来る範囲で努力します』

浮かれてやがる。

千冬『一夏、零』

一夏『は、はい』

零「はい」

千冬『どうやら何故か篠ノ之は浮かれているようだ。あんな状態では何か作戦に支障をきたす。なにかあったらサポートしてやれ』

一夏『分かりました。心がけます』

零「分かっています。そもそもその為に俺が参加してるんですから」

千冬『頼んだぞ』

まあ、密航船にも注意するよひでひつたから平氣だと想ひづが。

千冬『では、開始だ!』

飛行中

零「なあ、筈『

筈『なんだ?』

零「そんなに専用機が手に入つて嬉しいか?』

筈『嬉しがつてなどいない』

零「そうか? 今のお前一年前と同じ顔してるが

筈『そんなことね』

零「無いって言うのか? お前は自分で力と強さは違う物だと気付いたのに、一度同じ間違いを犯すのは馬鹿のすることだぞ』

筈『私は』

零「意志の無い力はただの暴力だ。その力がなんの為の力なのか良く考えとけ」

一夏『見えたぞ!』

一夏の言つ通り、『福音』が飛行している。

零「一撃で決めてこい!」

一夏『テーマソング!』

一夏がテーマソングを発動し、『福音』に零落白夜で切りかかったが、ギリギリのところで気付かれ避けられる。

一夏『くつ、もう一度』

零「援護する!」

一夏は体勢を整え、もう一度『福音』に向かつ。

俺もマンイーターで後ろから援護の形を取る。

『福音』もいちらを向き、《銀の鐘》を発射。

零「一夏。行けるな?」

一夏『ああ。簪の《断片集》の方が多い!』

一夏は攻撃を避けながら『福音』に近づいていく。

一夏『……』

しかし、一夏はこきなり向きを変える。

その先には篝。

一夏『篝！一体どうしたんだ！？』

篝『わ、私はまた同じことを』

ちくしょーー俺が余計なことを言ったから！

一夏が《福音》の攻撃の流れ弾から篝の身代わりにならうとする。

このままじゃ、原作と一緒にやねーか！

『カーニバル』全てを一夏と篝の盾に向かわせる。

零「間に合ええええ——————！」

零「……？」

一夏サイド

篝を《福音》の《銀の鐘》から庇い、食らい瞬間、ガラス色の壁に  
守られる。

零の《カーニバル》。

さすが零だな。また助けられた。

一夏「助かつたぜ。れ……い？」

攻撃を受け切った《カーネバル》が消えていく。

零を見ると。『シンテレラ』が解け、海に墜ちて行く。

一 夏 零 い い

二十九

千冬『作戦は失敗だ！零を回収して帰還しろ！』

一夏一  
零を拾つてきてくれ

篇『構わないが、お前は』

一夏・零の仇を討つ

千冬『馬鹿もん！零がデータを知っている相手に負けたと思っているのか！《福音》はセカンドシフトしているんだぞ！』

一夏「だから？」

白式の色が黒に変わつていいく。

一夏「軍用のISが暴走して氣の毒だな。アンタがどんな人かは知らない。力の差がどれだけあるかは知らない」

白式の色が全て黒に変わった。

一夏「しかし、だからと言ひて、俺はお前を許さない！！」

ドコン！

一夏が《福音》を殴りつけ《福音》がぶつ飛ぶ。

今《白式》いや、《黒神》がどんな物か分かる。

一夏「ISには絶対防御があつたな。安心したよ。つまり4発までは大丈夫ということだな。《黒神》で本気で殴つても！！」

《乱神モード》これが今の《黒神》の状態。

一夏「俺は筈と学んだ剣道。零から教えてもらつて剣術。千冬姉から受け継いだ雪片式型。その技術、刀をお前相手に使うことはない！」

拳を握る。

一夏「何故ならそれらは家族、友人の崇高な技術だ。衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決してない！」

零、今から俺はお前が嫌いなことをする。

一夏「だから俺はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え、人間ではなく獣のようにお前を撃つ！！！」

ドコン！

一夏の一発目が入る。

第『一夏』

幕が零を抱えている。

一夏「零を連れてもう戻れ。ここからは俺一人でやる」

『福音』が『銀の鐘』を使用する。

セカンドシフトしたので、さつきより攻撃の数が多い。

一夏「全方位からの弾幕攻撃か。避けるのは難しそうだが」

攻撃を受けながら『福音』に突っ込む。

一夏「最初からあえて食らうと決めていれば、攻撃が一番薄い所を進めば我慢出来ない」とはない!」

ドコン!

3発目の一夏の攻撃。

『福音』は近くの島に呑きつけられる。

一夏「早く立て! 零を倒した『福音』のセカンドシフトがこの程度のはずがない!」

しかし、『福音』はダメージを受け過ぎて動けない。

一夏「終わりか。ならこれで最後だ。お前に明日はない」

一夏が《福音》を殴りつけた。

ガシツ

篠『一夏、やり過ぎだ。お前は私のようになるな』

篠が《紅椿》で一夏を止める。

ズバツ

篠は《福音》を斬り付け、シールドエネルギーを〇にする。

一夏「篠、」めん

篠『謝らないでくれ。元はと言えば私が悪いのだから』

一夏「ありがと」

化け物みたいな俺を止めてくれて。

? ? ? 「うつ

『福音』の操縦者が気付いたみたいだ。

? ? ? 「あなた達が助けてくれたの？ありがと」

止めてくれ。

お願ひだから、ありがとうなんて、そんな聞くに堪えない言葉……  
言わないでくれ。

俺にそんなこと言つてもう資格はない。

俺は、あらかじめかーーあなたを殺そつとしていたのだから。

## ハッキング？（前書き）

英語が赤点なのかまだ分かりません。

それは置いといて今回は零が全然出ません。

やりにくい。

## ハッキング？

旅館のとある一室

ベッドに零が寝てあり、それを一夏が見ている。

一夏「零」

帰還時

千冬「零とナターシャを医務室に運びこめ！」

零と《福音》のパイロットのナターシャが担架に乗せられ運ばれていく。

千冬「一夏、篠ノ之。作戦は成功だ。よくやった

千冬姉が絞りだした声で言つた。

現在

バタン

一夏「織斑先生」

部屋に入ってきたのは千冬姉。

千冬「今はプライベートだ。千冬姉で構わない」

一夏「千冬姉。俺、弱いな

千冬「お前は強いよ」

一夏「弱いよ。結局守られてばかりで何も守れない。何かを守れない力なんて無いのと同じだ」

千冬「.....」

一夏「俺、強くなりたい」

ガシツ

千冬姉に抱かれ、長い時間泣いた。

山田「なんでこのタイミングでこんな偶然あり得ない！」

この旅館に向かい、日本、フランス、イギリス、ドイツ、中国、ロシア、ブラジルのフォーマットされてない専用機が暴走し飛行。

山田「誰かがハッキングした？」

白騎士事件の時に世界中の軍事システムがハッキングされた。

あの時の規模のハッキングが何故この旅館に向けて？

そんなことより織斑先生に報告しなきゃ。

一 夏サイド

千冬「今回の作戦だが、私が出る」

一 夏「千冬姉。そんなの無茶だ」

バシン

千冬「織斑先生だ」

セシ「ですが、一夏さんの言つ通りですわ」

シャル「織斑先生がいくら世界大会の優勝者だとしても訓練機で六体の専用機を相手にするのは無謀過ぎます」

千冬「これ以上生徒を危険な目に合わせられるか!」

千冬姉が大きな声で言った。

千冬「…………すまん。しかし、私があの時にもつと違う作戦を考えていたら。零があんな目に合わなかつたはずだ」

一 夏「千冬姉」

俺はさつき千冬姉に抱かれ泣いたが、俺と同じくらい辛く、泣きたかったに違いない。

千冬「だから今回は生徒を出す気はない」

山田「織斑先生。私も行きます。なんたつて先生ですから」

山田先生が胸を張り言つ。

千冬「山田くん」

ラウラ「教育。私達は旅館に待機、防衛に徹底します。ですから思  
う存分戦つてきてください」

ピシッ

千冬「織斑先生だ。……頼んだぞ貴様ら」

軽い出席簿アタックをし、背を向け言つ。

プルブル

誰かのケータイがなる。

空氣読めや。

しかし、ケータイの着信音は複数ある。

出たのは鈴、セシリ亞、ラウラ、シャルロット。

鈴「はい。えつ、それは本当なんですか?はい分かりました」

ガチャツ

鈴「本国から任務を与えられました。中国の専用機は私がなんとか

しろ。と

簪「そんな」

マジで空氣読めや。

他のみんなも似た内容だったみたいだ。

千冬「くつ。腐った政治家共め」

篠「どうこう」とですか? 「

千冬「こちりに貸しを作りたくないんだ。貿易などで弱みになる可能性がある。それに専用機のデータを漏らしたくないんだろう?」

一夏「そんな事どうでもいいのに」

千冬「それが政治だ。代表候補生だから断ることも出来ん」

一夏「それじゃあ

千冬「ああ。オルコット、デュノア、ボーディッシュ、鳳は参加させ  
るしかない。くそつ!」

結果、中国を鈴、イギリスをセシリア、フランスをシャルロット、  
ドイツをラウラ、ロシアを千冬姉、ブラジルを山田先生が受け持つ  
ことになった。

俺、篠、簪は突破された時のために旅館でEHSを展開させ待機。

みんなE/Sの調整を始める。

俺も今の状態が『白式』なのか、『黒神』なのか確認するか。

一夏「あれ？おかしいな」

簞「どうしたんだ？」一夏

手についた黒くなつたガントレットを見る。

一夏「E/Sが出せない」

## スペック強化（前書き）

前回、専用機を相手する配分に日本を入れ忘れました。

千冬が日本も相手するという作戦にします。

英語が赤点なのかいまだ分かりません。

## スペック強化

一夏サイド

結局、俺のI-Sは出せないままだった。

束さんに見てもらつたが、原因不明。

束さんが分からないうつて結構マズい状態だよな。

I-Sが出せないので今回の作戦は参加することができず、零の寝てる部屋で待つことにした。

鈴サイド

私の相手する機体はミサイルの一斉射撃がメインなのよね。

簪の『断片集』より数が少ないし、追尾もしないけれどロードのアーロンが長いのよね。

まあ、なんとかなるわよね。

鈴「来たわね」

相手も気付いたみたいで、黒い箱を出現させる。

その箱からミサイルが発射される。

鈴（《断片集》より少ないつて言つても数が多いわね）

ヒュン

鈴「まあ、簡単に避けられるけど」

また黒い箱から//サイルが発射される。

鈴「だから意味ないつ！？」

真下からも//サイルが向かって来る。

ギリギリで避ける。

鈴「危なかつた。発射口が2つもあるなんて渡されたデータより多い。これくらいならまだいける」

ヒュン

ズドン！

鈴「かはつ？」

発射口だった黒い箱の直接攻撃。

2つの発射口は鎖でつながれ、ふつこのようになハンマーとして使用されている。

鈴「これはちよつとマズいかもしれないわ」

セシリーアサイド

相手のIISは近接型。

中距離型のブルー・ティアーズの敵ではあつませんね。

一夏の時と同じ発言している鶴頭。

セシ「踊りなさいー！ブルー・ティアーズの奏でるワルツでー！」

相手のIISに発射されたレーザーは直撃し、煙があがる。

セシ「これが祖国のIISとすると泣けてきますわね」

煙の中から無傷のIISがレイピアを構え、向かってくる。

セシ「無傷ですってー！」

レイピアを避け、もう一度レーザーを発射する。

セシ「吸収してる？」

敵IISの周りに電気の膜が張られ、レーザーのエネルギーを吸収している。

セシ「相性が悪いのはこちらの方といつことですね」

ラウラサイド

---

零が倒れた今、私がなんとかしなければ。

相手のIISを早く倒し、他のみんなの援護に行こう。

ラウラ「直接突っ込んでくるとは馬鹿田ー。」

敵ISはランスを構え、突進してくれる。

それをAICで止めるが、

ズドン！

ラウラ「何つ！？」

AICで動きを止めた敵ISは消え、後方にいる敵ISのランスから//サイル攻撃を受けていた。

ラウラ「どうこう」とだ？

敵ISが一体に増える。

試しにレールカノン《バリツツ》を撃つと片方は避け、片方は直撃し風船が割れたように消える。

ラウラ「ダミーか。情報に無かつたぞ」

これじゃあ、AICは使えないな。

ラウラ「援護に行くのは無理みたいだな」

シャルロットサイド

デュノア社を買い取つたところが作つたISか。

デュノア社は親が経営していたものだが、その2人が行方不明になつたので、シャルロットに権限が移つた。

シャルロットは自分の手には余ると考え、売却した。その時零が上手いように交渉を行い、莫大な財産を手に入れ、シャルロットに専用機保持の継続を認めさせた。

話を戻す。

敵ISは基本的なパラメーターのバランスタイプ。

第一世代だが誰でも扱いやすい機体になつている。

相手のデータを知つてゐる分こっちが有利だけど油断をしちゃダメだね。

シャル「行くよー」

マシンガンを発射する。

敵ISは簡単に避ける。

シャル「あれ？避けられるのは予想してたけど動きが速くない？」

山田サイド

私の相手はブラジルの専用機一体のはずですよね？

山田「なんですか？」の数は！？

量産機100体。

山田「肝心の専用機は見当たりませんし、この量倒すのは時間がかかりすぎますよ！」

ブラジルの専用機は旅館に向かい続けている。

千冬サイド

千冬「邪魔をするな！」

日本とロシアのHISを倒すために向かっていたら、正体不明の専用機に襲われた。

千冬「何者だ！」

？？？「ハハハブリュンヒル」でも訓練機では私には勝てないよ。

『姉さん』「

千冬「…？」

日本とロシアのHOTELも旅館に向かっている。

簪サイド

簪「簪。織斑先生と山田先生のところアクシデントが発生して、日本、ブラジル、ロシアの専用機がこの旅館に向かってる」

簪「最優先事項はこの旅館を守りきる」と

簪「しかし、こちらは一機だ。二機相手にするにはもたないぞ」

簪「私が一機相手する。任せて、これでも日本大学だから」

簪「いや、私が一機相手する。その間に残りの一機を倒してくれ」

簪「ダメ。危険すぎる」

簪「頼む。やらせてくれ。簪が来るまで守りきってみせるから」

簪「はあ、分かった。そんな顔されたら任せぬしかない」

今にも泣き出しそう。

顔「日本とロシアの相手をしてて。すぐに行くから」

簫「ああ。絶対に守りきる」

2人は敵I-Sに別の方向に向かい飛んだ。

ブランジルの専用機。

大丈夫。I-Jのスペックならすぐに簫のところに向かえる。

簫「すぐに終わらせん」

『断片集』をフルで展開し、発射。

これで終わったと思われたが、

全てのミサイルを撃ち落とし、敵I-Sには一発も当たらなかつた。

簫「『断片集』と同等の発射量つて、そんな情報になかった！」

ミサイルのリロードにはまだかかるようだが、また同じことを繰り返しても意味がない。

簫「早く簫のところに行かないといけないのに」

-----

簫サイド

敵は一機。圧倒的に不利。

勝とうとなんて思わない。

絶対に守つさる。

篇「I」から先は一步も通れない！」

千冬サイド

千冬「マドカが？」

マドカ「当たりだよ。姉さん」

千冬「マドカ。一度田だ。邪魔をするな

マドカ「あの一機を倒しても無駄だよ。ハッキングしたHSには改造が施されてる。全てを倒す前に専用機持ちは終わるよ」

千冬「だからと書いて諦められるか！」

マドカ「無駄だからとこつても全てが終わるまでここにいるからね」

## 正喰者

一夏サイド

一夏「くそつー！俺のせいで幕が一機も相手することになるなんてー。」

全員が傷つき、ピンチだという情報が一夏の元に入ってきた。

一夏「こいつをえ動けば……」

零の待機状態の《シンデレラ》が光る。

ワンオフアビリティー《正喰者》（ジャルイーター）

黒かつた待機状態の《白式》は白に戻っていく。

鈴サイド

シールドエネルギーが3分の1まで減ってる。

ハンマーのような攻撃を避けようとしたらいニサイルの発射で軌道を  
変えるから攻撃が不規則過ぎてマズい。

鈴「ここのままじゃ負ける」

ガラス色の羽が《甲龍》を包む。

鈴「《カーニバル》？」

《カーニバル》が消えた時、《甲龍》の形が変わっていた。

《双天牙弐》以外の装備が無くなり、武器の割に合わず小さい。

《浅龍》

ミサイルが鈴に発射される。

発射されたミサイルを鈴が見た。

鈴「凶れ」

ミサイルが捻れ、耐えられなくなり爆発する。

《浅龍》の《歪曲》は衝撃胞ではなく、空間自体に攻撃する。

敵ISは発射口2つ同時に発射する。

鈴「凶れ！」

一方のミサイルを見て曲げる。

鈴「凶れ！」

もう一方のミサイルを見て曲げる。

《歪曲》の発動条件は視認と位置指定。

よつて、同時攻撃の場合は発動が遅れる。

鈴「まずは邪魔なそれを曲げる」

鈴「凶れ…………」

発射口がゆっくり曲がり、爆発する。

敵ISはミサイル、発射口が効かないと分かつたらすぐさま武器を捨てた。

敵ISは重りとなっていた発射口を捨てたことにより速い。

鈴「一夏の方が全然速いわよ」

『双天牙月』で肉弾戦に持ちこもうとした敵ISをぶつ飛ばす。

そして、

鈴「まつがれ…………」

敵ISに直接『歪曲』を発動する。

絶対防御があるため簡単に曲がらないが、ミシンミシン音を立て、シリードエネルギーが減り、

ついに機体が曲がり、ねじ切れ真つ一つになる。

鈴「人が乗つてたら簡単に使えないな。こりや」

セシリアサイド

『ブルー・ティアーズ』はそもそもレーザー系を売りに作られた機体なので、敵ISのレーザー系無効のバリアに通用するのはセシリアが苦手とする近接武器のみ。

つまり、大ピンチ。

そんな時、『カーニバル』が『ブルー・ティアーズ』を包む。

そして、『ブルー・ティアーズ』の形が変わる。

6つのビットは7つの杭になった。

『ブルー・トゥルース（青き真実）』

セシ「いきなさい。魔女の家具、煉獄の七杭！」

7つの杭が室内で投げたスーパー・ボールのように動きだす。

7つの杭にレーザー系無効のバリアは意味が無いので、シールドエネルギーを削つていく。

敵ISはバリアを切り、エネルギーをレイピアに回す。

セシ「ダメです。ダメです。全然ダメですわ」

人差し指を向ける。

セシ「これがわたしの青き真実」

『赤き制裁』に似た青いレーザーが発射され、敵ISのシールドエンルギーは避けられず、0になる。

ラウラサイド

AICOが使えないだけでこんなにも力が發揮出来ないなんて。

ダメージはそこまで受けていないが、攻撃がまだ3発しか当たっていない。

『カーニバル』が『シュヴァルツェア・レーゲン』を包む。

形はほとんど変わらないが少しプラズマが発生している。

『シュヴァルツェア・クリエイト（黒い帝）』

ラウラ「お前はいつまでその態勢でいるつもりだ？『跪け』」

ラウラが言った瞬間に敵ISは跪く。

ラウラ「それでいい」

敵ISは無理矢理立ち上がる。

ラウラ「ほう。少しばらようつだな。それでは私も本気を出すとしよつ。『ひれ伏せ』」

さつきのと比べものにならない重さが敵IDSを襲う。

「ラウラ、もう終わりにするぞ。『過剰なる重税』」

ラウラは敵IDSの頭を掴むとプラズマが強くなる。

手を離した時には敵IDSのシールドエネルギーは0になっていた。

「ラウラ、私の徴収率は100パーセントだ」

シャルロットサイド

バランススタイルって聞いてたけど、このスペックはバランスというよりオールマイティー。

シャル「少し強過ぎない？」

『ラファール・リヴィアイヴ・カスタム?』『カーニバル』が包む。

軽量化されスリムな形になる。

『ラファール・リヴィアイヴ・カーペット』

シャル「零が心配だな。だから殺す。

どうして一夏のIDSが動かないのはなんでだろう?だから殺す。  
敵の情報が間違つてた。だから殺す。

今日はいい天気だな。だから殺す。

零の料理美味しかったな。だから殺す。

特に何も無し。だから殺す

『ラファール・リヴァイヴ・カーペット』の操縦者への影響、殺人衝動。

シャル「君を殺すのはこれだ」

刀 斬殺

切りつけるが避けられる。

シャル「これじゃダメか。なら」

多刀 惨殺

大量の刀を投てき。少しだがダメージを与えた。

シャル「次はこれだ」

多銃 銃殺

ピストルを撃ちまくる。

弾が切れるトリロードをせず、捨てて次のピストルを使う。

少しずつだが、シールドエネルギーを削っていく。

シャル「使いきつちやつた。じゃあ

狼牙棒 撲殺

敵ISは振りかざした狼牙棒を剣で切る。

シャル「わあ、凄い。だから殺す」

手榴弾　爆殺

狼牙棒を捨て、手榴弾を投げ、爆破。

シャル「武器はこれで最後だ」

ミサイルランチャー　虐殺

ミサイルを直撃だが、シールドエネルギーが僅かに残る。

耐えきった敵ISは近接戦を行おうと突っ込んでくる。

シャルの姿はいきなり消え、敵ISの後に周りこむ。

ナイフ　必殺

シャル「さつき言った武器の数は嘘だよ」

ズシャン！

-----

簪サイド

防御力が高過ぎる。千刀の攻撃力じゃ、歯が立たない。

『断片集』なら破れるけど敵ISは同じタイプの攻撃で相殺していく。というか敵ISは『断片集』の為だけに使ってるんだよね。

簪「笄のところに行かないといけないのに」

『カーニバル』が『打鉄式式』を包む。

大きなカバンを抱えている。

千刀をしまい、カバンを開く。

カバンの中から化物が飛び出す。

『傷んだ赤色』

化物が敵ISのシールドエネルギーを削っていく。

敵ISは『断片集』対策のミサイルを化物に向けて発射する。

煙の中から敵ISは簪に向かつて進んでくる。

簪「化物の三つの定理。一つ化物は恐れられなければならない。一つ化物は正体不明でなければならない。一つ化物は不死身でなければならない」

敵ISの後ろからさつき消し飛んだはずの化物が襲う。

化物が敵ISを襲つてる間に簪は距離をとる。簪「さつきの子にミサイル使っちゃったよね？」

『断片集』による爆撃。

簪「簪の援護に行かなくちゃ」

簪サイド

しかし、一機相手は厳しいな。簪が来るまで私が守りきらなければ。

『紅椿』を『カーニバル』が包む。

武器が変わる。

簪「木刀!?」

さつきまで使っていた『雨刃』と『空裂』が無くなつてあり、木刀を一本握っている。

簪「こんな武器で戦えるわけないだろ」

そもそも私はなんの為に戦つているんだ?

何故、姉さんに頼んでも専用機を作つてもうつたんだ?

一夏「待たせたな。簪」

簪「一夏?」

一夏「後は俺に任せろ」

竇「いや、片方は私がやる」

一夏「そつか。それじゃロシアのISは任せたぞ。いい顔になったな。竇」

一夏は日本のISに向かう。

そう。一夏の横で戦うために力が欲しかった。

木刀で敵ISに向かい突きのモーションをする。

木刀の先からレーザーが発射される。

『王刀 鋸』

毒の無さ。所有した者の悩み、不安などの負の感情を払拭する。

出すことが出来なかつたもう一本の刀を出す。

敵ISに向かいその刀を振ると斬撃が飛ぶ。

『斬刀 鈍』

切れ味の徹底。切れない物は無いと言えるほどの切れ味。振り抜くと発生する斬撃は機能ではなく、『斬刀』が生み出す物。

竇「今の私は誰にも負ける気がしない」

『斬刀』で敵ISをぶつた切る。

冒頭

一夏サイド

零の待機状態の《シンデレラ》が光った時、一夏の目の前が真っ白になる。

????「力が欲しい?」

白いの少女と黒い少女が問いかけてくる。

一夏「欲しい」

????「どうして?」

一夏「守りたい奴がいるんだ。そいつだけじゃなく、みんなを守れる力が欲しい」

????「分かった」

一夏はそこで目が覚める。

黒くなっていた待機状態のIOSが白に戻っている。

一夏「零。ちょっと行ってくる」

一夏「待たせたな。 篇」

篇「一夏？」

一夏「後は俺に任せろ」

篇「いや、片方は私がやる」

一夏「そっか。 それじゃロシアのヒルは任せたぞ。 いい顔になったな。 篇」

俺は日本のヒルのところへ向かつ。

《白糸》の形は変わつてゐる。

一番変わつてゐるのは真つ赤なブルゾンを模した装備が付属されたこと。

《白糸》

握つてゐる武器は《雪片武型》ではなく、峰まで白銀の刀。

敵IDSがじゅりんサイルを発射する。

一夏は持つてゐる刀で一刀両断する。

そして敵の攻撃を片つ端から切断していく。

《雪片武型》の時のようにシールドエネルギーが減つてはいない。

いや、『雪片式型』ほどではないが減っているのだが、それを上回る速度で回復していく。

### 『妖刀 障り猫』

『雪片式型』より少ないがシールドエネルギーを消費していくが、切った物のエネルギーを奪っていく。

『障り猫』の攻撃力は他の刀と同じレベルなのだが、

一夏「見える」

ハイパーセンサー型ワンオフアビリティー『直死の魔眼』

一夏の目が青くなる。

『直死の魔眼』で見ると綻びが見え、その綻びをなぞるように切るとなんであらうと死に到らしめる。

一夏「終わりだ」

敵ISのシールドエネルギーはまだ残っているが、絶対防御の綻びを『障り猫』で切られたら関係がない。



千冬サイド

マドカ「どうやら全員負けたみたいね」

千冬「あいつらはやつたのか」

マドカ「それじゃ、戻るね。姉さん。代用品によろしく

織斑マドカは消える。

千冬「はあ、危なかつた。専用機の作成を急いだ方がいいみたいだ  
な」

## ロキ

零サイド

零「ここは教室?」

確か俺はセカンドシフトした福音にやられて。

零「地獄つてのは教室のことだったのか?」

「? ? ?」「おいおい。教室が地獄なわけないだろ。人は死んだらそれまでぞ」

いつの間にか教卓の上に少女が座つてる。

「? ? ?」「まあ、君の場合は違うけど」

零「久しぶりだな。ロキ」

俺をいろんな世界に連れていく、物語が変わるのを楽しんでいる神。

ロキ「10年ぶりだね。いつまでたっても死がないから待ちくたびれたよ」

零「じゃあ、とつと次の世界に連れてけ」

ロキ「そつ焦るな。この世界での物語はまだ終わっていないよ」

零「ここに来たといつとは死んだんだ」

ロキ「正確には死にかけたんだよ。だからHISの世界に戻つてもう  
つよ」

零「じゃあ、早く戻せ」

ロキ「せつかちあがるよ。君は。少しほアタシの粗手をしてもらわ  
ないと」

零「まあ、いいか。ならいつもの部屋に連れてけ」

ロキ「教室の扉とリンクしてあるから移動しようが」

教室の扉を開けると某魔女達がお茶会をしていた部屋に似た空間に  
繋がっている。

ロキ「確かストレートティーだつけ?」

零「ああ。紅茶はストレートしか認めない」

何もなかつたテーブルの上に紅茶の入ったカップが現れる。

ロキ「はい。どうぞ」

零「相変わらず」の部屋ではなんでもありだな」

ロキ「アタシ専用の世界だから」

零「それもそつか」

ロキ「零くん。力が欲しくない？」

零「いらねえよ。今まで充分だ。力をやるなら一夏あたりにくれてやれ」

ロキ「この世界にいた零くんならこういふと思つたわ」

零「じゃあ、最初から聞くな」

ロキ「零くんには人間に力を与える力を与えるわ。今回はオリキャラを入れる隙があまりにないから」

零「オリキャラが入れられないってのは？」

ロキ「力については聞かないみたいね」

零「お前が与えるつていづなら拒否出来ないだろ」

ロキ「確かにそうね。オリキャラが入れないって言つたけど、そもそも男子の方はISを動かせる男子は一人つていう前提を崩したから出せてもIS乗れないのよ。女子の方はこれ以上ヒロインを増やしたら作者がまとめられなくなるから」

零「メタ発言はやめな」

ロキ「『めんなさい』ね。出たのが久しぶりだから口が滑ったわ」

零「気をつけろよ」

ロキ「そろそろこいかしらね」

零「どういうことだ？」

ロキ「さつき与えた、人間に力を与える力が発動したころなのよ」

零「俺は何もしないぞ」

ロキ「その能力は基本的にランダムなのよ。複数の味方がピンチになつた時とか」

零「それって、味方に主人公補正を発動させるつて能力じゃねーか」

ロキ「まあ、そういうことね。強力だから滅多に発動しないし」

零「はあ。あいつらなら力を上手く使つてくれると信じるしかねーな」

零は立ち上がり扉の方へ向かう。

零「そろそろ俺は行くぜ」

ロキ「制限が外れだし、これからは気が向いたらこっちから連絡を入れるよ」

零「重要な時だけにしてくれよ。またな」

零が部屋を出て、扉が閉まる。

ロキ「久しぶりたけど楽しいものね。好きな人とお喋りするのわ」

元の世界

零「束さん」

束「何かな？零くん」

零「ちよつと聞きたいことがあります」

束「奇遇だね。私も零くんに聞きたいことがあつたんだよ」

零「『福音』をいじくったのはあなたですね？」

束「『白式』を改造したのは零くんだね？」

2人の声が重なる。

零「世界中の軍事施設をハッキングして『白騎士事件』を起こし、IISを認めさせ、「一レム6機を投入し、俺と一夏を世界中に見せ、『福音』をハッキングして、幕を認めさせようとした」

束「『白式』は白から変わることはなかつた。『白騎士』からもじつた物だから白だから意味がある。『零落白夜』のエネルギー消費の調節の時に何か入れたね？そもそも私が分からぬプログラムを組む人なんて零くんしかいないでしょ」

零・束「なんのことやら」

束「だいたいあのワンドオフアビリティーはなんなのさ？世界中の科

学者が出来ないことを簡単にやつてのげるなんて」零「それは束さんだつて変わらないでしょ。それにあの能力は神の悪戯。俺だつて予想外だつたんですよ」

束「またまたー。神様がいるなら楽しそうだね」

零「信じてなこでしょ」

束「零くんは」の世界にて楽し〜。」

零「楽しいですよ。みんなと過ぐせるとじがとても楽しい。束さんと一緒に過ぐせたらもうと楽しこと細つんですけどね」

束（いきなり何を言こ出すかなー？苦口だよね？これは苦口と受けとつて良いよね？）

零「俺がここまで技術を身につけたのは束さん」の世界に飽きて欲しくなかつたからなんですよ」

束「分かつたよ。零くんの言つたことは分かつたよ。でも少し待つて。零くんと一緒に過ぐすにはもう少し時間がかかる」

零「そうですか。じゃあ、待つてます」

束（零くんがこるといつだけでの世界も捨てたもんじゃないね）

3巻Hペローグ（前書き）

赤点ありますんでした。  
ケータイ死守。

## 3巻Hペローグ

零サイド

I S暴走事件の夜

零「篇。ちょっとといいか?」

篇は一夏を除く他の専用機持ちと一緒にいた。

篇「なんだ?」

零「一人っきりで話したいから廊下に来てくれ

篇「分かった」

篇は廊下に出る。

篇「いつたいなんだ?」

零「ほれ、誕生日プレゼントだ」

封筒を渡す。

篇「覚えていたのか」

零「義妹の誕生日くらい覚えてるよ」

篇「すまない。今年は何も出来なくて

零「構わねえよ。俺はそこまで誕生日を重要視してねえから」

第「そうか。封筒の中身はなんなんだ？」

零「一夏の寝顔[写真]厳選された5枚」

第「恩に着るーこれは我が家[家宝]にするー」

零「喜んでもらえたのは嬉しいが、家宝にされるのは困る」

第「そうか。後世に残そつと思つたんだが」

零「聞かなかつたことにしといてやる。後、一夏もプレゼントを用意してから口ケーキショッパンをセットした。海岸で待つてみようと言つてある。昨日見せられなかつた水着を見せてやれ」

第「それは嬉しいんだが、水着？」

零「もう少し積極的になれよ。ライバルは多いんだから取られちまうぞ」

第「そうだな。姉さんも同じことを言つてたし、そうしてみる」

零「東さんと仲直りしたみたいだな」

第「そもそも私に問題があつたんだ。それも簪達を見てたら吹っ切れた」

零「それは良かった。それじゃあ、そろそろ一夏のところに行つて

「こ」

篠「ああ」

篠は自分の部屋に水着を取りに向かつ。

さて、他の専用機持ちが邪魔しないように相手しますか。

専用機持ちがいる部屋に入る。

シャル「篠と何を話してたの？」

零「篠が誕生日だから誕生日プレゼントを渡してたんだよ」

『ええ――――――.』

零「何？もしかして篠が誕生日だつてこと知らなかつたのか？」

『うん』

零「マジか。いくらなんでもいいやないだろ」

簪「帰つたら何か上げなくひや」

鈴「そりいえばそりいつ話全然してなかつたわね」

「ウラ「篠ノ之が誕生日とこつ」とは、義兄である嫁の誕生日は

零「ああ。俺の誕生日は一学期。とつへに過ぎた」

シャル「なんで言つてくれなかつたのさ。何か用意したのに」

零「俺の戸籍上の誕生日は千冬さんと東さん[1]に拾われた日だから、そこまで重要視してないんだよ」

シャル「そつか。『めん』

零「別に氣にしてねえからいこよ」

簪「学園に帰つたら簪の誕生日と一緒に祝う」

零「一学期つて言つただろ。だからいこよ」

簪「戸籍上の誕生日だから重要視したことでも言つてた。だから曰につけば関係ない」

零「はあ、簪。お前つて結構頑固だな」

簪「零を見習つてみた」

零「変なところを見習つたな」

セシ「そういえば簪わん、遅いですね」

零「そんなことよりお前のHを俺がいじくつた形になつたんだが、国からはなんだつて?」

ラウラ「基本的にその件は保留だそつだ。データは送らなければならぬがな」

零「てつきり科学者辺りが解体して調べるんじゃねーかと思つてい  
たが」

「ラウラ「私もそう思つていたが、下手に手を出してもんなスペック  
のいい機体を壊したら他国と差がついてしまつから」

鈴「あのワンオフアビリティーを発動せると本当に各国躍起になつて  
る感じわよ」

零「無理無理。『リアルイーター』の発動は本当に氣まぐれだから

鈴「あんたらしい能力ね」

セシ「もしかして篠ノ瀬さん。一夏さんに会いに行つたんじゃ」

鈴「なんですかー？」

簪「やつと気付いたの？」

「ラウラ「誕生日の話をした辺りから予想は出来ただろ」

シャル「一夏が簪にプレゼント渡さないはずがないでしょ」

零「お前らは気付いてたのに何で行かなかつたんだ？」

「ラウラ「なんで行く必要があるのだ？」

零「だつてお前ら一夏のことが好きだろ」

簪・シャル・ラウラ「はああああああ」

鈴「同情するわ

セシ「不憫ですわ

あれ、なんか悪いことした?

セシ「一夏ちゃんのところに向かいましたと

セシコアと鈴は廊下に出る。

零「あいつらが一夏達がいるのか分かつてんのか?」

一方その頃

山田「やつと帰つてこれた――――――

旅館付近のバー

山田「ていうか、なんでみんな帰つちゃつたんですか?普通終わつたら手伝いに来てくれますよね?」

100機倒し終わつて帰つてきた山田女史。

全員に忘れられていた。

山田「はじめて見かけた人に文句言つてしまふ

ちゅうどい|人専用機持ちが見えた。

山田「よし、あの一人に。なんで帰っちゃうんですか。酷いじゃないですか」

筈「山田先生」

山田「まつ、まー！」

静かだが目が怖い。

筈「なんでこのタイミングで出でくるんですか……そこ正座してください……」

山田「それはいくらなんでも理不尽過ぎですよー。」

朝まで筈の説教は続いた。

おり話行をます。

零「やっぱ、家が一番だね」

旅行から帰つたらこのセリフでしょ。

まあ、実際は寮なんだけど

ちなみに一夏はバスに乗る前に《福音》のパイロットにキスをされ、  
篠達に襲われそうになつたところ、千冬さんの「バスの中で騒ぐな。  
帰つたらこしんな」の一言により、リアル鬼ごっこ中。

零「さて、数日ぶりの自室だ」

ガチャ

楯無「お帰りなさいあなた。『ご飯にする？お風呂にする？それとも  
ワ・タ・シ？』

バタン

マズいな。幻覚が見える。《福音》にやられた傷がまだ完治してないんだな。

零「気を取り直してもう一度

ガチャ

楯無「お帰りなさいあなた。ワタシにする？ワタシにする？それと

もワ・タ・シ?」

零「選択肢が一つに減っちゃった!」

楯無「よし。早速ベッドに行こう!」

零「何がよしだ! おじょくりに来たなら帰りやがれ!」  
楯無「1時間前からスタンバってたんだから、それくらいのことは褒美  
ちょいだいよ」

零「あんたが勝手にやつたことじょうが」

さつきみたいな冗談は止めもらいたい。一応俺も思春期の男子な  
んだから。

もしかして俺って男として見られてない?

気にしたら負けだな。

零「触れなかつたんですが、なんで裸エプロンなんですか! ?」

楯無「残念でした。ちゃんと水着を着てるもん。やーい。零くんの  
裸エプロン先輩!」

零「不名誉なあだ名をつけるなーその格好もマズいだろ!」

マジで前から見たら裸エプロンにしか見えない。

楯無「そーで、今日は数日間暇だった分、零くんで遊ぶぞ!」

零「俺と遊ぶんじゃなくて、俺遊ぶんですね」

楯無「さて、何して遊ぶ?」

零「スルーですか。つーか、疲れてんで今日は勘弁してください」

楯無「ええー。じゃあ、疲れを取るために、今日は零くんに奉仕しちゃうよ!」

零「具体的に何をするんですか?」

楯無「えっちこと」

零「帰れ」

楯無「冗談だから、まあ料理を作つてみたから食べてよ」

零「それはありがといります。ちょうど腹が減つてたところなんですよ」

楯無「海鮮料理ばかり食べてたから、青椒肉絲を作つてみました」

零「随分気が利きますね」

楯無「そりゃあ、先輩ですから」

楯無（学年が違うから）の数日で他の子達と差がついたから  
これくらいしないとね）

零「食べていですか?」

樋無「ビヘビヘ」

零「いただきます」

パクつ

零「美味い」

楯無「それは良かつた」

零一多分、櫛無さんは俺の知ってる女性で一番料理美味しいですよ

櫛無一おだてたつて何も出ないそ

櫻痴さんにはいわゆる「

桶無一  
たたな何を言つてゐるのかな！？

云々は極無事と總如意する。人間三十七物で「可れ」

な

零「本当に美味しいな。あれ、なんか言いました？」

楯無「何も言つてないよ！」

零一  
? ? ? そ  
うで  
すか

楯無「はあ」

楯無さんは顔を真っ赤にしたままつむいてしまった。

零「えっと、」ちやうさまでした

楯無「お粗末さまでした」

零「これからシャワー浴びるんで、ゆっくりしててください」

楯無「それなら、大浴場を貸し切りにしたから入ってきちゃっていいよ」

零「貸し切りって凄いですね」

楯無「生徒会長権限使っちゃった」

零「さすが楯無さん。普通の人とやることが違いますね」

楯無「そんなに褒めないでよ」

零「別に褒めてませんよ」

楯無「わざ。汗を流してきなさい」

零「それじゃ、ちょっと行つてきます」

楯無「行つてらっしゃーーー」

ホントに楯無さんには感謝だな。

「こんなデカい風呂を独り占めできるなんて。

でも楯無さんちょっとおかしかったな。

何かあるのかな。

ガラガラ

変な音が聞こえたんだけど。

まるで誰かが大浴場のドアを開け、入ってきたような。

零「安心しろ俺。幻聴だ幻聴」

楯無「それは安心したらダメなんじゃないかな」

水着姿の楯無さん登場。

零「楯無さん！何しに來たんですか！？」

楯無「お滝中流しに來ました」

零「そのまま回れ右して、帰りやがつてください」

楯無「しづがない。出たら、貸し切りを取り消して零くんが入浴中と校内放送しよう」

零「俺が出ます」

ガチャツ

楯無「そんない」とわせると思つ?」

楯無さんはじこからか手錠を出し、自分と零の手首にかける。

零「何やつちやつてくれてんのー?」

楯無「逃げられないよつこ」

零「知らんわ!早く鍵を出してくださこー!」

楯無「じやあ取つて」

零「どこにあるんすか?」

楯無「ここ」

楯無さんは自分の胸を指す。

零「マジすか?」

楯無「マジっす」

零「俺はどうすりやいいんですか?」

楯無「大人しく私に背中を洗つてもうえぱいいんだよ

零「手錠してるから無理でしょ」

手錠は俺の右手首、楯無さんの左手首に繋がれている。

楯無さんはしまったところ顔をしている。

零「諦めて手錠を外してください」

楯無「しようがない。後ろじゃなくて前を洗うか」

零「それってそもそももの意味を失つてね！？」

背中は手の届かないから洗つてもひつのに、前は自分で洗えんだろうー。

楯無「大丈夫。ぶっちゃけ私が洗いたいだけだから」

零「とうとうぶつけたなおいーまあ、分かつてたけど」

楯無「分かつてたならいいじゃん。ほり」

零「もう好きにしてください」

楯無「はーい。それじゃあ始めまーす」

ワシャワシャ

あれ。思つた以上にはずい。

何これ？羞恥プレイにもほどがあるんだけど。

背中を洗つてもひつのように10倍ははずい。

背中と違つてくすぐつたいし。

そして何より楯無さん近い！

無心だ。無心になれ。何も感じない人形のようだ。

楯無「零くんっさ。思つてたより、筋肉無いね」

零「まさかの…」ダメ出し…？」

楯無「いやいや違くて、零くんの身体能力に比べて筋肉量が少ないような気がするんだよ」

零「基本的に俺の戦闘能力技術量ですから。下手に筋肉があると邪魔になるんですよ」

楯無「ふーん。そなんだ」

零「それを言つたら楯無さんも筋肉が少ないじゃないですか」

楯無「私も同じ。技術で補つてるから」

零「そうですか。そろそろ洗い終わつたみたいですし、湯船に浸かりましょ」

楯無「まだ下が終わつてないわよ」

零「やらせねえよー」

楯無「ちやんと体を洗わないで湯船に浸かるのはマナー違反よ」

零「手錠をいきなりかける人にマナー云々言つ資格はありません。だいたい俺はもう体を洗い終わつてます。楯無さんが洗いたいから洗つただけでしょ」

楯無「ひつ」

零「普通に聞こえる音で舌打ちするなや」

楯無「それじゃあ、私のことを洗つて」

零「なんでそうなるんすか！？」

楯無「だつて私まだ体洗つてないもん」

零「自分で洗えばいいでしょ」

楯無「うん。そつする」

零「あれ？ 素直ですね」

楯無「洗いたかったの？」

零「バカなこと言つてないで早く洗つちやつてください。風邪ひいちまいますから」

楯無「了解」

ワシシャワシシャワシシャ

なんで素直に言つて聞いたのかな?

さすがに羞恥心の方がおちよくなよじ上回つたか。

ムード

右手に柔らかい感触が。

まるで「マシユマロのようにな。

零「つてー!何せつてんですか!?.」

楯無「体を洗つてんだよ

零「俺の手にある感触はなんですか?」

楯無「私の胸の感触だね」

手錠がかかつてゐるせいで俺の手は楯無さんの手について行つてしまふ。

楯無さんは俺の手がちょうど胸をくすぐるよつて誘導してくる。

零「簡単にひいたと思つたらひつこつことだったのか

楯無「次は下を洗あつかな

零「お願いしますー・マジで止めてください。」

楯無「しゃうがないな。今回だけだよ」「よ

零「じゃんか機會つ度とねえよー。」

楯無「さて、そろそろ湯船に浸かるわよ」

零「長かった。ここまでくる道のりは長かった」

ザブン

楯無「やつぱり、大きなお風呂は疲れが取れるね」

零「その大きな風呂に入るためにはめっちゃ疲れましたよ」

楯無「じゃあ、その疲れもとつちやいましょ」

……無言

気になつてたこと聞くか。

零「楯無さん。なんか悩みあるだしじょ？」

楯無「なんのことかな」

零「とぼけないでくださいよ。いつもと違つことへりこ見てたら分かつますよ」

楯無「零くんは私のこと良く見ているね。このストーカー」

零「怒りますよ」

楯無「『めんどくせー』。実はや。私って生徒会長じゃない。この生徒会長の席を守つたから自信がないのよね」

生徒会長は学園最強じゃなければならぬ。

俺が倒したが、生徒会長になる気はないので変わつてない。

楯無「零くんが『リアルイーター』なんて発動するから。一年生の専用機持ちがチート臭いくらいに強くなっちゃったからや。不安なんだよね」

零「すいません」

楯無「謝らなくていいわよ。私の力が足りないってだけだから。まあ、そんなわけだからさ、生徒会長でいられる間に、今日みたいに生徒会権限を使おうと想つてさ」

零「楯無さん。『ミステリアス・レディ』をいじくらせてください」

楯無「えつー?」

零「楯無さんには最強でいて欲しいんです。でも『リアルイーター』はそう簡単に使える物じゃない。なら俺が出来ることをやります」

楯無「そつか。でもダメ」

零「ええー!?」

楯無「私も一緒に強化するわ。自分のことだもん。零くんにばつか任せられないわ」

零「じゃあ、善は急げです。早く上がって整備室に向かいましょう」

楯無「でもいいの?今日は疲れてるんじゃない?」

零「構いませんよ。俺が先に出るんで手錠を外していくださー」

楯無「分かったわ」

楯無さんは胸の谷間に手を入れるが。

楯無「あれ?」

零「どうしたんですか?早くしてくださこよ」

楯無「鍵無くしちゃった」

零「何やつひやつてくれてんのー?」

## //シシニアインボッシュホール（前橋城）

せつぱり行きましたばつたつ。

少し旅に出るので更新が遅れると思います。

## //シシモンインポッシブル

前回のあらすじ

裸の零と水着姿の樋無が手錠で繋がれたよ。

鍵は無くなつたよ。以上。

零「で、これからどうするんですか？」

樋無「予備の鍵が生徒会室にあるから。大丈夫だよ」

零「この格好でどうやって取りに行くんすか？」

上半身裸の俺。水着エプロンの樋無さん。

手錠が邪魔でこれだけしか着れなかつた。

樋無「ケータイで取つてきてもうえば」

零「俺のケータイは部屋です。樋無さんのケータイは？」

樋無「生徒会室」

零「詰んでんじゃねえか！」

樋無「零くん落ち着いて。今、私達がやらないといけないことは、誰にも見つからずに生徒会室または零くんの部屋にたどり着くことよ。もし出来なかつたら

零「出来なかつたら?」

楯無「零くんが社会的に死ぬわ」

零「結局被害を被るのは俺か!」

楯無「特に危険なのは、織斑先生、山田先生、シャルロットちゃん、ラウラちゃん、簪ちゃん。この5人に見つかったら物理的に死ぬわ」

零「なんで帰つてきて早々命が危険に晒されてんだよー?」

楯無「作戦名はそうね、ミッションインポッシブルよ」

零「和訳すると不可能な作戦だからなー早速失敗しそうな香りがブンブンするんだけど!」

楯無「異論は無いわね」

零「大有りだが聞いてもらえそういうにないから、せめて作戦名だけは変えてくれ」

楯無「OK。じゃあ作戦名はミッショングーフに変えるわ」零「失敗するつて単語がそのまま入つてるからなー分かってるんだろう?分かつてやってんだねーこれならわづきの方がマシだったわ!」

楯無「じゃあミッションインポッシブルで」

零「すみませんが、マジで一発殴らせられません?痛くしないんで

楯無「さてぐだらな」ことは置いといて、生徒会室と零くんの部屋、どっちを狙うか決めるわよ」「み

零「誰かこの胸のサヤモヤを取つて！」

楯無「距離的には零くんの自室の方が近いけど、生徒数が多いのよね」

零「それを言つたら生徒会室に行く途中に所員室の前を通らないといけないですみ」

楯無「どいつもマズいはね」

零「俺の自室にしましょ。千冬もこと当たるへりこなら数が多い方と当たった方がマシでしょ」

楯無「織斑先生か。確かに見つかったら逃げられる確率〇ね」

零「じゃあ行きますか」

楯無「ちょっと待つて、良い物見つけたから」

零「良い物？」

-----

楯無さんの言つ良い物を使って移動中。

楯無「ほーら、誰も気付いてない」

零「ちがえよ！みんな気付いた上で無視してんだよー。」

楯無「零くん小さな声で怒鳴るなんて器用なことするわね」

零「この発想は小学生レベルだぞ」

楯無「何言つてんの。実際に軍人のヘビさんが使つてばれなかつたわ」

零「ルーツはある始めはステルスゲームだつたのに最近は巨大ロボットと戦つてるあのゲームか！」

「ここまで言つたら良い物がなんだか分かつただろ？」

段ボールだよ！段ボール！

「丁寧にちゃんと危険物レベルがレベル4のマークが入つたやつ！」

結構大きかつたから二人で入れたが狭い！

そんな物が廊下を動いていたら普通の奴は近づかんわ！

まあ、その事は俺にとって好都合だな。

ラウラ「何が入つてるんだこれは？」

普通じやない奴来ちやつた！！

ラウラ「なんかこの箱から失礼な感じがした」

勘が良過ぎだろー。

零「楯無さん。飛ばしますよ」

楯無「戦略的撤退ね」

段ボールの中は2人は四つんばいなのだが、流石は天才と人外と言つたところで異様に速い。

ラウラ「ま、待て！」

いきなりスピードを上げた段ボールに驚きながらもラウラは段ボーラを追いかけ走る。

やはり四足歩行（手錠付き）では一足歩行には勝てず、どんどん距離をつめられてしまつ。

ラウラ「逃がすか！」

とうとうラウラに捕まってしまった。

ラウラ「さて中身はと。嫁と会長！？」

楯無「実は零くんに無理矢理こんなことはさせられてー。」

零「いきなり俺を売つてんじゃねーよー！」

楯無「ナーライツテルノカシラフワタシニハサツパリダワ」

零「とほけてんじゃねえー片言になつてんだろうがー。」

楯無「どうせ2人共終わるんだつたら1人でも生き残った方がいいでしょ？どうせ零くんは挽回不可能なんだし」

零「いいやーそもそも楯無のせいにこつなつたんだからあんたを連れにしてやんよー」

楯無「ちょっと敬語使いなさいよ！先輩で生徒会長様よ！」

零「敬語つてのは敬う言葉つて意味です。俺を売る人に敬う要素が見当たらねえよ！」

ラウラ「嫁。これはどういう遊びなのだ？」

流石ラウラー「ちょっとズレてるー

周りに人居ねえし、これなら適当に誤魔化せるんじゃねえか？

楯無さんも同じことに気付いたみたいだ。

楯無「これは我慢大会だよ」

ラウラ「我慢大会？」

楯無「恥ずかしい格好をして、手錠をして耐えられなくなつた方が負けなんだよ」

ラウラ「じゃあ、何故隠れていたんだ？」

楯無「えつと、狭いのも我慢するんだよ

ラウラ「やうか。なら」

零「お、おこー。」

ラウラはこきなり服を脱ぎ、下着姿になる。

零「なんで脱ぎ始めてんだー早く服を着ろー。」

ガチャツ

ラウラ「やうつれなことを言ひな。私も混ぜり」

ラウラは零の空いている左手と皿分の右手にビニからか取り出した手錠をかける。

零「何やつてんだー早く外せー。」

ラウラ「それは無理な相談だな。手錠の鍵は自室だ」

訂正。ラウラはちよつとじやなく、物凄くズレとてた。

ラウラ「それじゃあ、始めるか」

零「せめてスカートだけでいいから履いてー。」

その後、ラウラにスカートを履かせ、誰にも見つからないように、俺の部屋に行くことを誤魔化しながら伝えた。

そして現在。

狭過ぎる。

段ボールの中にはギリギリ入ることが出来たが、動くのがやつとの  
くらい。でも、つまむつ詰めになってしまった。

つまり密着します。

当たつてる感触を気にしたいのだが、今はこの状況を早く脱するこ  
としか頭にはありません。

考えてみる。ラウラはなんとかなつたが、こんな姿見られたら即豚  
箱行きだよ。

えつ？ 口調が滅茶苦茶だつて？

別に焦つてゐわけじゃないんだからね！

零「あとどれくらいだ？」

櫛無「わざわざスピードを出したから結構縮まつたよ」

零「嬉しい誤算だな」

ラウラ「嫁よ。花摘みに行きたいのだが

零「花摘み？ そんなの後にしろ」

楯無「花摘みつてのは『一ノ里』『二ノ里』よ」

零「不味くね? ラウラ我慢しろ。死ぬ氣で我慢しろ」

「ラウラ「努力する」

俺達はやつきの速度が亀に思える速度で自室に向かった。

零「ちよろこな」

自室前。周りには誰もいない。

ガチャッ

千冬「零。話があるんだが  
何をやつてあるんだ貴様ら  
はー?」

零「まさかのこのタイミングでラスボス登場ー?」

「ラウラ「そんなことより早く」

零「そうだった! 織斑女史後で説教受けんんでこれなんとかしてくれ  
ださいーー!」

千冬「何を言つてゐんだ貴様らは?」

その後

千冬「貴様らはHISを武装展開して破壊するという方法は思いつかなかつたのか?」

零・櫛無「あつ」

小学校（前書き）

一昨日グアムから帰つて来ました。  
ケータイいじれないのでキツかったです。

一夏サイド

『白織』にも慣れてきたな。

『白式』が『白織』に変わるとき、あの2人の少女はなんだつただらうつ?

『力が欲しい?』

その力が『白織』か。

あの時、全てを守る力が欲しいと望んだけど、始めて力を望んだのは確か……

-----

小学校時代

第「バカだな。後のことを考えなかつたのか?」

筈がバカにされたところを割つて入つていじめつ子3人をぶつ飛ばした。

今から保護者と一緒に話すことになった。

はあ、千冬姉に迷惑かけたくなかつたんだけどなー。

一 夏「しょうがねえだろ篠ノ之。気にくわなかつたんだから」

篠「篠だ」

一 夏「？」

篠「篠と呼べ。篠ノ之は4人いるんだからややこしだろう。織斑」

一 夏「一夏だ。織斑は3人いるんだからややこしいだろ」

そろそろ話の時間か。

一 夏「じゃあちよつと行つてくるわ。篠」

篠「また明日。一夏」

-----

子が子なら親も親だな。

裁判だ。法廷だ。何言つてやがるんだ？

うるせえな。

いじめつ子3人の顔も気にくわねえ。ざまあみる的に笑つてやがる。

親バカA「うちの子がケガしたんですよー。」

親バカB「出ると」「出るわよー。」

親バカC「何か言つたらどうなんですか！」

千冬「すいま」

千冬姉が頭を下げようとしている。

千冬姉に迷惑かけたくなかつたのに。

零「千冬姉さん。謝らなくていいよ」

バタン！

話をしていた部屋のドアが勢いよく開き、義兄の零が現れる。

-----

零サイド

零「千冬姉さん。謝らなくていいよ」

一夏「零兄」

親バカA「なんなのよーー」のガキはーー

零「黙れ。豚が」

親バカA「いきなり出てきて豚呼ばわりつてなんなのよーー」

零「織斑零。千冬姉さんと一夏の義兄弟だ」

親バカB「ならあなたも一緒に謝罪しなさい。」

零「ギャー、ギャー、うるせえな！大体恥ずかしくねーのか？」

親バカC「なんのことがよ？」

零「3人でよつてたかって女子をバカにし、注意した一夏に3対1で負けた。しかも負けたからつて親に言つて問題を大きくする。全く同じ男として恥ずかしいわ」

図星を言われ、いじめっ子3人の顔は赤くなつていいく。

いじめっ子A「なんでお前がそんな事知つてんだよー。」

いじめっ子B「そんなの口から出任せだるー。」

いじめっ子C「証拠を見せてみろよー。証拠をー。」

零「証拠ねえ」

ピンポンパンボーン

放送が流れる。

いじめっ子A『おい！男女！』

いじめっ子B『男女のくせにスカートなんて履いてるゼー』

一夏『くだらないことやつてるんだつたら掃除手伝えよ。もしくは

帰れ』

いじめっ子C『男女に肩入れするのか？そりゃこいつら夫婦だつたな！』

昨日の会話が流れる。

いじめっ子の顔は青くなっている。

零「証拠はこれで不十分か？」

千冬「とにかくこの証拠はどうやって手に入れたんだ？」

零「それはいつものように一夏を盗<sup>ヒ</sup>ソ<sup>ハ</sup>ゲフン<sup>ハ</sup>ゲフン。そんな事はビリでもいいじゃん」

千冬「今、盗聴つて」

零「さて脣共。謝るなら今の「つかだぞ」

いじめっ子「「「」」め」「」

親バカA「謝らなくていいわ！」

親バカB「裁判しましょう！裁判！」

親バカC「もうよーいい弁護士や検事を雇えればいいのよー」

いじめっ子は流石にヤバイと思い、謝ろうとしたが、後に引けなくなつた親バカ達が裁判に持ち込むと言つた。

零「そうか。そんな金があるのか?」

親バカA「聞いて驚きなさい!」

親バカB「私達3人の夫は全員、 社で重役なのよー。」

親バカC「そここの小娘とは違つのよー。」

千冬姉さんを指す。

零「はい。謝るチャンスが無くなりました」

零はそう言つとケータイを取り出し、ビニにかける。

零「あつ、もしもし。お爺さんですか? セツセツ言つたことお願ひします。えつ? クビにはしなくていいのか。ですって? この後の態度によつて決めさせてもらいます。ありがとうございました」

ガチャツ

一夏「零兄。誰にかけてたんだ?」

零「社社長」

全員『はああ――――――――――!』

親バカA「どうしてそんな知り合いがー!?」

零「昔々あるといつに少年がいました。」

少年が街を歩いているとお爺さんが3人の不良に絡まれているではありませんか。

周りの人は見て見ぬふりをしています。

そこで少年は『そんな事して恥ずかしくないんですか?』と声をかけました。

すると不良は少年に向かつて怒鳴つてくるではありませんか。

少年は不良に対し正論を言いました。

沸点の低い不良は我慢が出来なくなり、少年に殴りかかつてきました。

少年は『正当防衛です』と言い、逆にボコボコになりました。

お爺さんは助けたお礼にレストランでフルコースを食べさせてくれました。

お爺さんは少年を家まで送ると『困った時は何時でも電話しなさい』と言つてくれました。

「めでたしめでたし」

みんな俺の話を真面目に聞いてくれて嬉しいな。

零「その話には続きがあつて、少年の義弟と義妹がある3人の子供にちょっかいを出されました。

2人は3人の子供を成敗するとバカな親が現れました。

少年は義弟と義妹の為にその3人とバカな親のことを調べました。するとなんてことでしょう。彼らの父親はお爺さんの会社の社員ではないですか。

少年はお爺さんに頼んでその父親達の家族が謝らなかつたら、父親を平社員にしてもらい、一生出世出来ないようにしてもらいました

お爺さんはその子供達のしたことが自分のされたカツアゲに似ていたので父親達をクビにするかと聞いてきました。

慈悲深い少年は謝つたらそこまではしないであげようと思いました。  
さて、ブーブーつるさい豚共。謝りやがれ」

話を聞いた母親達は魂が抜けた顔になり、一夏と千冬さんは啞然としている。

親バカA「私達が悪かつたわ」

親バカB「だからクビだけは」

親バカC「お願いだから止めて!」

零「千冬姉さんに頭下げさせよ!としたんだから、土下座くらいはしてもらわないとね」

## 一夏サイド

この後の状況は酷かつた。

親バカ3人は土下座して泣いて謝つて、いじめつ子3人は事が大きくなり過ぎてピーピー泣いて、俺と千冬姉は零を止めるのに必死だつた。

まさにカオス。

その時に強くならないといけないなと思った。

最近はマシになってきたが、零が出て来るのは相手がピストル出したからってこっちは核兵器出すような物だもん。

被害が大変なことになるんだよ！

一夏の敵さえ守るという考えはここで産まれた。

白と金と銀で買ひ物（前書き）

4巻発見

## 白と金と銀で買い物

零「そろそろ髪切らねえとな

ゴムで髪をまとめる。

最近ずっとエリをこじへる」といってたからな。

フルブルフルブル

Froミシャル

本文 今からラウラと買い物行くんだけど一緒に行かない?

零「気分転換にいいか

Froミ零

本文 この前行ったデパートだな。部屋で待つてろ。すぐ行く。

零「待たせたな」

シャル「うんうん。全然待つてないよ

ラウラ「嫁よ。目が悪くなつたのか?」

零「これは俺が作ったディスプレイだよ。データを見るために持つ

てきた「

シャル「そつか。仕事中にごめんね」

零「外の空気を吸いたいと思ってたから構わねえよ。2人とも俺が勝ったイヤリングと服使つてくれてんだな」

ラウラ「ああ。せつかくの嫁からのプレゼントだからな」

シャル「でもラウラその服とコスプレと軍服しか持つてないんだよ」  
シャル「知ってる。この前のデパートでコスプレショップに入りそうになつた」

シャル「パジャマもなくて裸で寝てるのも知つてる?」

零「すぐに買い物に行くぞ。布団に潜り込まれるのもパジャマがあつた方がマシだ」

ラウラ「嫁だつて服をそこまで持つてないだろ」

シャル「確かに。前もワイシャツにジーンズだったよね」

零「男と女じゃ違つだろ」

シャル「確かに。確かに。他にどんな私服持つてるの?」

零「タキシード」

シャル「極端でしょ!」

零「さすがに高級レストランにワイシャツじゃ無理だった」

シャル「そりゃ そつでしょ」

ラウラ「夫婦が似るのは良いことだ」

零「そろそろ行かねえか?」

シャル「バスに乗って電車で行こつか」

ラウラ「スルーするな!」

電車内

カリカリカリカリ

零（やっぱ要領的に武器は減らした方がいいな。その分をこっちに持ってきて）

零はメガネ型ディスプレイを見てメモに何か書き込んでいく。

ラウラ（あのビルは狙うにはちょうどいいな。あのスーパーは供給ラインとして使うか）

敵国との戦争になつた時のシミュレーションしていた。

女子「うつわー見て、あそこの人」

女子「物凄く美人なんだけど」

女子「金髪に銀髪。それに綺麗な白。神様は不公平よね」

零はデータ管理に集中。ラウラはどうでもいい話と聞き流したが、シャルロットはそんなこと言われたことなかったので顔を赤くしてうつむいた。

シャル（綺麗って言われて嬉しいんだけど、零のことを女子と勘違いしてる…）

シャルロットは隣に座っている零を見ると、

シャル（うわっ。そう言われて見ると女子にしか見えない。思わず見とれちゃったよ。なんか女として負けてる気がするくらい）

シャル「はあー」

零「人の顔見てため息吐くのは止めてくれ」

シャル「あつ～めん。つい」

零「ついつて酷くないか？」

シャル「零ついて。肌綺麗だよね。何かしてるの？」

零「いや。なんにも」

シャル「ええ！ズルい！」

零「ズルいって言われても」

シャル「普通、手入れとかしてもそんなに肌綺麗にならないもん！」  
ねえラウラ

ラウラ「私も何もしてないんだが」

シャル「ラウラもズルいー！ いつか今度やり方教えてあげるからや  
りなよ！」

ラウラ「めん」

シャル「面倒はなしー！」

デパート

シャル「最初は服を見て、途中でランチ。その後生活雑貨とか小物  
とか見に行こうと思つたんだけどいい？」

ラウラ「よく分からん。任せる」

零「飯食つたら髪切つてきていいか？」

シャル「切つちやうの？」

零「邪魔だし」

シャル「そつか残念。まあ、とりあえず七階フロアに向かうよ。その下も服屋だから順に見ていく」

「ラウラ「なぜ上から見るんだ? 下から見たらいいではないか」

零「同感」

シャル「上から下りた方がいいの。お店の系統から見てもやうじよ?」

零・ラウラ「全く分からん」

シャル「~~~~。あのね下の方の階はもう秋物になつてゐる。上方の階も大分入れ替えてる思つけど、今セールで夏物が残つてゐるから、先にそつちを」

零「ワイシャツとジーンズでいい」

「ラウラ「待て、秋の服はいらないぞ」

シャル「零はもつ少し服を気にした方がいい。でもラウラはなんでも?」

「ラウラ「今は夏だから。秋の服は秋に買えばいい」

シャル「いや、あのね。女の子は普通、季節を先取りするんだよ」

「ラウラ「??.??.?」

零「シャル、その説明じゃ伝わらねえぞ。ラウラ、戦闘になつてから装備を準備をしたら間に合わねえだろ?」

「ラウラ」なるほど。そういう事か

シャル「なんでその説明が通用するのか気になるんだけど」

シャルロットは何かが違うとと思うのだが納得しようと努力する。

シャル「とにかく順番に見て行くよ。分からないうことがあつたら何でも聞いてね」

エレベーターで上ると人ごみになつていた。

零「人が多いな」

シャル「ねえ、はぐれるとマズいから手繩がない?」

零「ああ」

「ラウラ」「う、うむ」

零は気付いてないが2人は顔が少し赤い。

シャル「じゃあここれから」

「ラウラ」「『サーヴ・サーフィス』。変わった名前だな

シャル「結構人気なお店みたいだよ。女の子もいっぱいいるし」

零「男がないぞ」

シャル「レディースだし」

店長「金髪に銀髪に白髪?」

店長は客に手渡すはずの紙袋を落としてしまつ。

店長の異変に気付き他の店員もその視線を追い、魅了される。

店員「お人形さんみたい」

店員「何かの撮影?」

店長「ヨリ、お姫さんお願い」

客「ちよつと、えつ、私は?服……落ちた……まだし

文句を言おうとした客も魅了される。

店長「ど、ど、どんな服をお探しで?」

シャル「とつあえずこの子に似合つ服。ここありますか?」

店長「こ、こかの銀髪の方ですね!今すぐ見立てましょ!」

店長はマネキンから服を持つてくる。

店長「ど、どうでしょ!お客様の綺麗な銀髪に合わせて白のサマーシャツは

シャル「どうぞ」

ラウラ「分かりました」

シャル「分からなのは無しで

ラウラ「むう……」

ラウラは少しむくれる。

ラウラ「白か。悪くないが、今着ている服だぞ

店長「あ、はあ」

女子力の低い解答に気の抜けた返事をしてしまつ。

シャル「ラウラ、試着してみたら?」

ラウラ「面倒く」

シャル「面倒くさ」

零「なあ、外で待つていいか?」

店長「ならお客様も試着してみませんか?」

零「まあ?」

店長「そうですが

零「シャル、いきなり質問なんだが男の俺はどうしたらいいと思つ？」

シャル「せつかくだから試着してみなよ」

ラウラ「せつだな。私だけ試着とは不公平だ。嫁もしない」

店長「リアル男の娘……」

マズい。なんかマズい空氣だ。ここから脱出を

そーつ

ガシツ

シャル・ラウラ「「零（嫁）。どこに行く気？」

逃亡失敗

零「さうけんな！男の俺がなんで女物着ねばならんのだ！」

店長「大丈夫ですよ。似合つと思いますから」

零「似合つたら困る！」

シャル「店員さん。押されてるつちに早く服を」

店長「準備済みです」

零「仕事早いなおい！」

ラウラ「嫁よ。いい加減諦めろ」

零「絶対にヤダ！」

ラウラ「なら選ばせてやる。自分で着るか、『シュヴァルツ・クリエイター』の能力で着替えさせられるかを」  
零「EIS使つたら千冬さんに怒られるぞ！」

シャル「あっ、はい。それじゃあ、零の女装[写真で許可下りたよ]

ケータイから耳を離し、零に告げる。

零「千冬さんも敵か」

ラウラ「10、9、「

零「なんのかウントダウンだ！？能力発動までのか！」

ラウラ「6、4、3、「

零「今確実に5が飛んだ！」

ラウラ「2、1」

零「分かつたよ！着ればいいんだろ！着れば！」

ラウラ「始めからそうすれば良かつたのだ」

零「酷い。酷あざえる」

シャル「じゃあこれ着て」

零「もう好きにしてくれ」

シャル「じゃあこれも」

零「女性用下着なんて着けられるか!」

III ハシマニタリス（前書き）

感想お待ちしています。

シャル「思つたよつておののお店で時間とつさひつたな  
いや、酷い目にあつた。

「いい加減服を返してくれ」

現在の格好。フリルの着いた女物。下着は…………聞かないでくれ。

シャル「ダメ。今日一日はその格好してもらひつよ

零「帰る」

「フウラ「その格好でか?一夏達が見たら変態だと思ひだらうな」「んな

零「泣けてきた」

シャル「女言葉を使わないと学園についていても返せないよ」

零「そんな、酷いですよ」

シャル「冗談で言つたのに普通に上手いんだだけビ

「フウラ「せつかくだからこのまませつまいかつてしまつ

零「はあ、本氣を出さない方が良かつたみたいですね」

シャル「ため息吐く姿も絵になつてるんだけど」

ラウラ「ああ。同姓なのにドキッとしたぞ」

零「同姓じゃあつませんからね」

シャル「遅くなつたけど」飯にしつか。フアミレスでいい?」

零「構いませんよ」

ラウラ「食えればど」でもいい

店員「いらっしゃいませ?」

何故に疑問系?ばれた?女装してる変態だと思われてる?

シャル「三名なんですか?」

店員「はい、大丈夫です。」案内します

女性店員はふらふらと歩いて席に案内する。

零「あの、大丈夫ですか?」

店員「は、はい!大丈夫です!」

零「顔も赤いですし休んだ方が」

店員「こなんい日には休んでられません!」

零「そ、そつですか」

いい日つて何がいいの?」

店員「ご注文が決まりましたらお呼びください」

零「私はビーフシチューにします。2人は何を注文しますか?」

シャル「僕はパスタかな」

ラウラ「なんでもいい」

零「じゃあこちらで勝手に決めてしまいますね」

呼び鈴を押す。

ピン

店員「ご注文がお決まりでしょうか?」

ローン

わつきの女性店員が呼び鈴が成り切る前に来た。

零「ドリンクバーを3つ、私はビーフシチュー、彼女にはパスタ、そして彼女にはお子様ランチをお願いします」

ラウラ「なつ」

店員「ビーフシチュー、パスタ、お子様ランチをおつまみ、ドリンクバーを3つですね。すぐにお持ちします」

女性店員は走りすかし早々と器用なことをした。

リウカ「ちよっと待って」

零「リウカ。騒こじやダメですよ」

リウカ「嫁ー。どうしてお子様ランチなんだ?」

零「なんでもこことおっしゃったじゃないですか。ねえシャル?」

シャル「うそ。確かに言っていた」

リウカ「もうここーー今から変えてもらひー。」

リウカは呼び鈴に手を伸ばす。

店員「お待たせしました。ビーフシチュー、パスタ、お子様ランチになります」

リウカ「早く来る」

店員「すぐここにきましたし。何か問題でも?」

零「いえ。貴女の仕事が有能だから褒めていたんですよ。頑張つてくださいね(ニコニ)」

店員「（アシヤア）はーー！」ゅ〜くつじゆ〜」

女性店員は鼻を押さえて戻る。

零「本当に大丈夫ですかね？鼻血まで出してしまって」

シャル「ははは。零ってわざとやつてるよね？」

零「なんのことですか？」

ラウラ「嫁。お前のビーフシチューと交換しろ」

零「ラウラはわがままですね。何が不満なんでしょう？」

ラウラ「お子様といつどいろが氣に食わん」

零「まあ、ここは私が大人になつて交換してあげます。ラウラは子供ですから」

ラウラ「む〜」

零「しあがないですね。ラウラちゃんは『お子ちゃま』ですから」  
ラウラ「分かった！私は子供じゃないからお子様ランチを食べる」

シャル「なんか言つてゐることが滅茶苦茶なんだけど」

零「そんな嫌々食べようとする人にあげるお子様ランチはありません」

ラウラ「私はお子様ランチが食べたいんだ！」

零「『ラウラ・ボーディッシュはお子様ランチが食べたいですー・ビ・  
か譲つてくださいー』でしょ、うー」

ラウラ「ラウラ・ボーディッシュはお子様ランチが食べたいですー・ビ  
うか譲つてくださいー」

零「仕方ないです。それまで言つながら譲つてあげましょう。感謝  
しなさい」

ラウラ「よしー！お子様ランチが食べられるー！」

シャル「あれ？それでいいのラウラ？」

零「シャル。貴女もお子様ランチがいいんですね？（ニコニ）」

シャル「なんでもないよ

シャル（笑顔なのに目が笑ってない）

零「飲み物を持ってきましょーか」

零は紅茶、シャルはコーヒー、ラウラはオレンジジュース。

ラウラにお子様ランチにはジュースといつのがルールと言つたら普  
通に信じた。

ラウラの将来が心配なんだけど。

席に戻り、食事をし始めた。

ラウラ「お子様ランチとは素晴らしい物だな。見る、ドイツの国旗が立っているぞ」

ラウラはお子様ランチに夢中だった。

ナンパ「ねー。君たち暇?」

なんか変な連中が3人やつて来ました。

零「多忙です」

ナンパ「そんなこと言わずに俺達と遊ばない?」

零「遊びません」

ナンパ「ここ」の代金奢るからだぞ」

零「お金だけ置いて出て行つてください」

ナンパ「そんなこと言わずにさ」

シャル「キャッ」

ナンパの1人がシャルの手を掴む。

バシャア

零はすかさず紅茶をぶっかける。

ナンパ「あざひがひー——————」

ナンパ「何すんだ！この女！」

零「手が滑つてしましました」

ナンパ「舐めてんのか！」

零「恥を知りなさい！貴方達はどんな教育を受けてきたんですか！もし自分達に非がないと思うならかかってきなさい。手加減はしませんよ」

ナンパ「くそつ、行けりがぜ」

ナンパは零の空気に気圧され、店を出していく。

周りからかっこいいなど称賛の声が上がる。中にはお姉様という声が混じっていたのは聞かなかつたことにしよう。

零「シャル。大丈夫でした？」

シャル「うん、ありがとう」

零「田立つてしましましたし、早めに出ないといけませんね

シャル「僕は腕時計が欲しいんだよね」

ラウラ「何故だ？」

シャル「日本製つて憧れだったからね。ラウラは何か日本製で欲し

い物はないの?」

ラウラ「日本刀だな」

零「今度いい職人を紹介します」

ラウラ「恩に切る」

シャル「あれ? 会話が成立してる?」

店長「あのう。ちょっとといいかしら?..」

零「なんでしょう?..」

店長「あなた達バイトしない?」

零・シャル・ラウラ「「「はい?」」」

III 金の鐘でマイナ歎茶（前書き）

感想お待ちします。

## 白と金と銀でメイド喫茶

店長「とにかくで2人辞めちゃって、1人病気なのよ。まあ、辞めたといつより駆け落ちなんだけね」

零「あら」

シャル「はあ」

リウラ「うむ」

店長「だけど今日は重要な日なの！本店から視察が来ちゃうし」

その店はメイド＆執事喫茶。

シャル「それは構わないのですが、なんで僕は執事服なんですか？」

店長「大丈夫よ。似合つてるから」

シャル「や、そういうですか」

零「そうですよ。似合つてますよシャル」

シャル（それが困るんだけど…）「いや零はメイド服を着ていろ」とはいいの？

零「シャル。日本には『やられたらやり返せ』といつ言葉がありま

す」

シャル「もしかして零。まだ根に持ってる?」

零「なんのことや?」

シャル（まさか捨て身で同じ皿に呑わせるなんて）

零「あのつ。お店の名前を知りたいのですが」

店長は着替えたメイド服のスカートの裾を掴み。

店長「お客様。@クルーズへようこそ」

@クルーズ

シャル「ミルクと砂糖はどうしまじょうつか? 良ければこちらで入れ  
ますが」

客「どちらもたっぷりでお願いします」

シャルは女性客に人気みたいです。

客「君可愛いね。お店が終わったら」

ダン!

水の入ったコップをテーブルに叩きつける。

客「何これ?」

ラウラ「水だ。飲め」

客「出来ればメニューを」

ラウラは厨房に戻り、コーヒーを受け取り、

ダン

ラウラ「とつとと飲んで帰れ」

客「頼んでないんだけど」

ラウラ「密じゃなら帰れ」

客「コーヒーにも種類が」

ラウラ「ほづ。貴様は違いが分かるのか?」

客「いえ。なんでもないです」

ラウラはドイツの冷水が未だ健在しており、男性客には何故か人気です。

店長「お待たせしました。カプチーノのお客様」

客「はい。凄い！薔薇ですか？」

店長「はい。今日はたまたまラテアートが出来る者がおりまして」

「フテアートとは」「コーヒーの表面に絵を描く」という物。

店員「ポットの紅茶入れておきましょつか？」

零「いえ、後7~8秒待つてください。お湯を入れて3分後にカップに入れるのが、一番香りがいいですから」

店員「そなんですか。勉強になります」

厨房で仕切っていた。

客「金髪の執事さんでお願いします」

客「こいつらは銀髪のメイドさんで」

客「カプチーノ3つ」

3人共、客に大人気だった。

強盗「全員手を上げておとなしくしろー！」

ハンドガン、ショットガン、マシンガンを持った強盗が入ってきた。

客「キヤ————！」

強盗「騒ぐな！ 静かにしろー！」

警察「あー、犯人に告ぐ。君達は完全に包囲されている。大人しく投降しなさい」

零「…………古」

強盗「どうしましょ。」このままじゃ俺達」

強盗「うろたえんじやねえつ！こっちには人質がいるんだ。焦るこ  
とはねえ」

強盗「そうすつよね。俺達には「これがあるし」

バン！

天井に威嚇射撃を行う。

君「キヤ————！」

バン

リーダーがハンドガンを撃つて黙らせる。

強盗「警官ども！人質を解放して欲しかつたら車を用意しろ！」

強盗「おい！メニュー持つてこい」

零「シャル。ラウラ。行きますよ」

シャル「うん」

ラウラ「ああ」

3人の強盗に1人ずつ向かっていく。

ラウラサイド

強盗「なんすか、これ？」

ラウラ「水だ」

強盗「いや、メニューが欲しいんすけど」

ラウラ「黙れ。飲め。……飲める物ならな」

氷水の入ったコップから氷が宙を舞う。

強盗「なつ！？」

宙を舞つた氷を指弾で撃ち抜く。

強盗「いってええつ！？」

油断していた強盗の顔にヒット。慌てマシンガンに手を出しが、

ラウラ「やせるか！」

その手は強盗に蹴りを入れる。

強盗はスカートの中に田を奪われ、蹴りが綺麗に入り、気絶する。

ラウラ「目標、制圧完了」

シャルロットサイド

シャル「メニューをお持ちしました」

テーブルにメニューを開く。

強盗「はあ、男か。リーダー達はメイドさんなのに」

プチッ

シャル「僕だつてメイド服の方が良かつたよー」

バコッ！

強盗「ぐほつ」

強盗の後ろからトレイでぶん殴る。

強盗はメニューに顔面から突っ込む。

ズドン

そのまま強盗の後頭部に踵落とし。

シャル「スカートじゃないから中が見えないのはいいけど」

零サイド

零「メイド特性ハーブティーとメイド特性ケーキになります」

強盗「気が利くな」

零はハーブティーの入ったポットとホールのショートケーキを運んできた。

零「まずハーブティーをどうぞ」

バシャア！

ハンドガンを持つた手にぶつかける。

強盗「あつぱりいい！何すんだこの女ー！」

零「やつきのナンパと同じセリフ。つまらないですね」

強盗のリーダーはハンドガンを向ける。

零「凄いですね。そんな熱湯で暑くなつたハンドガンを落とさなかつたのは尊敬に値します」

強盗「舐めるな！」

ガチャガチャ

ハンドガンの引き金を引くが弾は出ない。

強盗「な、なに！？」

零「そもそも銃といつのは細かい部品で出来ています。特に自動装填の物は使っています。確かにリボルバーより素人でも扱いやすいですが、壊れやすくなるのです。そんな細かい部品に熱湯をかけたら形が変形し、正常に機能しなくなります」

強盗の顔は説明を聞き、青くなつていぐ。

零「次は特性ケーキドーナツ」

零はケーキ（蠅燭つき）を強盗の顔面に向かつて投げる。

零「刑務所に逝つてからしゃこませ。強盗様」

バイト後、やつと服を返してもらえ、シャルとラウラが残りの必要な物を買つてゐる間に髪を切つてきた。

零「買い物が済んだみたいだな」

シャル「結構買つちゃつたよ。お給料が入つて予定より色々買えて助かったよ」

ラウラ「む、金か？それなら口座に2千万ユーロほどあるはずだが

シャル「えつー…そんなに持つてゐのー…？」

零「驚くことか？俺の貯金は億は行つてるぞ」

シャル「上には上がいた！？だいたい何でそんなにあるのー…？」

零「I-Sの装備の開発とかで。まあ、金のほとんどが新しい開発の資金で消えるがな」

シャル「納得」

ラウラ「私は貯金はあるのだが、引き出し方が分からん。一度も使つたことがないからな」

シャル「そつか。ラウラはお金の使い方を覚えていいこつか」

ラウラ「うむ。頼む。今までは支給品だけで足りたから、金銭が必要無かつた」

零「カード作つたらどうだ? あつちの方が使いやすいし」

シャル「下手にラウラにカード渡すと、使い過ぎる可能性があるからダメ」

零「2千万ユーロを使いきるつて、さすが親友同士良く分かつてんな」

ラウラ「嫁も夫婦なのだから分かつておけ」

零「考えておくよ。つーか、シャルも会社売った金あるだろ」

シャル「自分で稼いだお金じゃないけど」

零「まあ、そつか」

シャル「帰る前に城祉公園つていう公園があるから行いづ

ラウラ「公園?」

シャル「うん。昔お城があつた公園なんだよね」

ラウラ「ほつ。日本の城は守りやすいと聞く。城跡とはいえ一見の  
価値はあるな」

零「俺的には北海道の星形の城が好きだぞ。どの角度から向かって  
きても大砲の餌食だ。後は有名な大阪城。堀が2つあって大砲が」

シャル「ストップ! お城についてはもういいから

ラウラ「興味深かったのだが」

シャル「実はその公園にクレープ屋さんがあるんだけど、ミックス  
ベリーを食べれば幸せになるつておまじないがあるから食べようよ  
シャル（本当の噂はカップルで食べれば結ばれるつていう物なんだ  
けどね）

零「随分安い幸せだな」

シャル「おまじないだから」

ラウラ「おまじないとはなんだ?」

シャル「ジンクスかな」

「うー、ああ、験担<sup>かが</sup>」

シャル「うー、間違つてはないんだけどね」

零「クレープ屋あつたぞ」

シャル「本当だ。ミックスベリーもつべださー」

店員「ごめんね。今日はもう終わっちゃったの」

シャル「そうですか残念。零、ラウリビツある?」

「うー、イチゴとブドウを一つずつだ。嫁は?」

零「俺は珍しいブラックベリーで」

零とラウリはひとつひと注文して金を出し置いづ。

シャル「お金」

「うー、買に物の寒戦だ。何点だ?」

シャル「100点だよ」

「うー、ふふ。やつだわ」

零「今度、日本刀買つ時も安心だな」

「うー、うむ」

シャル「結局そういうの」に落ち着くんだ」

ラウラ「シャルロットはどうちがいい？」

シャル「うーん。じゃあイチゴで」

零「美味しいな。久しぶりに何か甘い物でも作るかな」

ラウラ「クレープの実物を食べてのは初めてだが美味しいと思つぞ」

シャル「今度はみんなでこよっか」

ラウラ「私は嫁と二人っきりで来たいな」

零「暇だつたらな」

シャル「ズルい！僕も」

零「シャルも暇だつたら付き合つよ」

ラウラ「シャルロット」

シャル「何？ラウ」

ペロッ

ラウラはシャルの唇を舐める。

シャル「なつ、なあつ、ななななつーー？」

「ウラ 「ソースが着いてたからな」

シャル「だからってー。」

「ウラ 「両手がふさがつてこる」

「ウラは手の買い物袋とクレープを見せる。

零「なるほど。一夏に興味を示さないと困つたら困なのかな？」

シャル「違つからねー。どうしてこうつ勘違にするかな？」

「ウラ 「なあ、田舎とはなんなのだ？」

シャル「知らないでいいからー。ウラはまだ早いよー。」

「ウラ 「むへ。今度クリッサに聞いてみるか」

零「あのHセロ日本通なら知つてやうだな」

「ウラ 「シャルロット。一口もかから、私にも一口もいりか」

シャル「こーとく

シャルロットとウラは一口ずつ交換する。

零「やひぱつじやん

シャル「だから違つて」

零「そういや。あのクレープ屋にはミックスベリーはないぞ」

シャル「えつ？」

ラウラ「やはり嫁も気付いてたか」

シャル「ラウラは気付いてたの？」

零「メニューに無かつたし、厨房にソースが無かつた。いくつかの種類のソースをかけるタイプなら売り切れることはないからな」

ラウラ「嫁の言つ通りだ」

シャル「そ、そりなの？よく見てるね」

零「料理は模倣から始まる。幸せになれるなら家で作りたいからな」

ラウラ「あのワゴンがテロリストの偽装だつたりどつするヘイシ展開を行つたところで無傷では済まん」

シャル「2人ともそういう観点で見てるんだ」

零・ラウラ「当たり前だ」

ラウラ「だがミックスベリーは食えただろ」

シャル「？？？」

ラウラ「それは何味だ？」

シャル「イチゴだけだ」

ラウラ「じゃあ、これは？」

シャル「何って、ブドウだよね？」

零「ブドウって普通はクレープに入れるか？」

シャル「ああっ！ストロベリーとブルーベリー！」

ラウラ「うな答」

シャル「つてラウラ！ブルーベリーはブドウじゃないよ。」

ラウラ「似たような物だろ？それにブルーベリーと言つてシャルロットがすぐに気付いてつまらん。嫁がブラックベリーと言つたときはヒヤヒヤしたぞ」

零「少しくらいはヒントをやらないこと可哀想だと思つてな」

シャル「そつかー。『こつも売り切れのミックズベリー』はそういう意味だつたんだ」

シャルロットの頭の中であつたのことがラウラを零に置き換えられ上戻されていた。当分アンホールは止まないだら。

零「どうある。ブラックベリーも食つておくか？」

ラウラ「ああ。交換だ」

シャル「ほ、僕も！」

シャルロットとラウラは顔を赤く染め、一口ずつ交換する。

零「これで3人とも幸せだな」

その日の夜

コンコン

シャル「はーい」

零「邪魔するぞ」

シャルロットとラウラの部屋に入ると白猫と黒猫がいた。

シャル「な、なんで来たの！？」

零「さつき甘い物作ると言ったから、チョコレートケーキを作った  
から一緒に食おうかと…………悪かった。2人はお楽しみ中だった  
のか」

シャル「いい加減その勘違いやめて！」

ラウラ「差し入れか。さすがは私の嫁だ」

ラウラは胸を張るが威厳がない。

零「へへつ」

シャル（笑われた！今日はたまたまなんだよー。いつもは大人っぽいの着てるんだからー）

零「いいんじゃねえか。可愛いし」

シャル・ラウラ「可愛い」

零「さて、ケー キ結構甘いから飲み物出すか」

シャル「いいよ。お密さんにそんな事やらせられないよ」

零「いや、その手じゃ無理だろ」

シャル「あ」

シャルとラウラの手は肉球手袋を着けている。

零「そういうや、本音の奴も着てたな。つーかなんであいつは肉球で箸を使えたんだ？」

謎過ぎるHセピカチュウ。

零「今日は子猫が一匹いるしホットミルクにするかね」

シャル・ラウラ（（子猫））

子猫一匹に唐変木一人の不思議なお茶会が行われた。



**織斑家（前書き）**

感想を下さる。b yテスト期間なのにこんな事してゐる作者

簪（ひーん。ヒンヒンヒン）

簪の田に映るのは『織斑』の表札。

チャイムに指を伸ばすが押さず引つ込めるの繰り返し。

かれこれ一時間ひしげる。

つーか、よく警察来ねえな。ただの不審者だぜ。

零「簪。何やつてんだお前は？」

家主の零が買い物袋を持って帰ってきた。

簪「ひやつー? 零ー? ええつと……これま……その」

現在、簪の頭の中ではちつひちこ簪達が急ペッチで会議を行つている。

その結果。

簪「来ひやつた」

まともな回答ではなかった。

零「そつか。もてなしが出来るかは知らんが、上がつてけ」

簪「えつーーいの?」

零「お前は向しに来たんだ?まあ、用事があるなら無理ことは言わんが」「

簪「大丈夫!予定なんてこれっぽっちもないから!」

零「そ、やうか」

簪の妙な気迫に氣圧される。簪はそれに氣付く。

簪「…………用事はないです」

零「変な奴だな。上がつてけ」

簪「うん」

簪(変な奴つて言われたー。〇一ー)

ガチャ

零「ただいま」

簪「お邪魔します」

一夏「お帰り。おつ、簪も一緒か」

零「ああ。帰つてきたら家の前に立つよ!ビビこひな」

簪(そうだよね。一夏くんも家に居たんだよね)

零と「入つきり」というシチュエーションを考えていた簪は少し残念がる。

一夏「俺ちょっと買い物に行つて」

零「買い物は俺が今行つてきたところだら。だいたい客が来ているのに失礼だろ」

一夏「こいつにいるの気まずいんだけど」

零「何言つてるんだ?まあいいや。簪ソファーに座つてろ。飲み物持つてくれる」

零は台所に行く。

簪「うん。ありがと!」

一夏「簪。一番応援してるのは千冬姉だけど頑張れよ」

簪「えつー、うん」

一夏に応援され、顔が赤くなる。

零「ほれ、冷茶」

ドキイツ!?

零「お前り向話してたんだ?」

簪「な、何でもないよ。」

零「隠し事か？まあ、構わねえが」

ピンポーン

零「宅配便か？」

一夏「俺が行つてくの」

一夏（この空氣から少しでも離れたいからな）

少し前

セシ「着きましたわ。」「が一夏さんのお家ですわね」

ピンポーン

ドタドタ

一夏「はーい。おっセシリアか良くなたな！」

セシリアの手を取る。

セシ「一夏さんたらわたくしが来たことをそんなに嬉しがつて

一夏「早速上がつてくれ」

セシ「はーー！」

一夏（セシリ亞が増えればあの空氣はなくなるー。）

一夏「セシリ亞が来たぞ」

セシ（零さんの存在を失念してましたの）

零「いらっしゃー」

簪「セシリ亞も来たんだ」

セシ「簪さんもいたんですね」

簪「今日は暇だつたから」

セシ「奇遇ですわね。わたくしも暇でして」

簪・セシ「あははは」

二人はお互に相手の考え方を察知した。

セシ「お土産買つてきたのでどうぞ」

一夏「サンキューな。ケーキか、ちよつビンつあるな。今日は暑い  
しアイスティーにするか」

セシ「そのケーキは美味しいって評判のお店の物ですわ」

簪（ヤバイ。お土産なんて零の家に来る」とだけで頭いつぱいで考

えてなかつたよ。零に常識が無いつて思われないかな?いや、もしかしてもう思われてる?どうみつけ?)

久々に簪ネガティブ。

一 夏「持つてきたのはセシリ亞だし、一番始めに選べよ」

セシ「やうですか?じゃあタルトド」

零「次はお客様から簪が選べ」

簪「抹茶のムースを」

零「一夏。お前はどうする?」

一 夏「チーズケーキにするわ」

零「じゃあ、モンブランだな」

簪「このケーキ美味しい」

一 夏「確かに。うちでも作ってみたいな」

セシ「それは一夏さんでも無理だと思いますわよ。このケーキのお店のパーティシエは世界大会に出場者です」

零「それなら俺も出た」とあるが

一同『はい?』

零「ていうか俺優勝したし」

一夏「いつの間にそんな事したんだ！？」

零「いや束さんが甘い物食べたいって言つたから有名店で練習してたら出場の話が来たから出て優勝した」

一夏「相変わらずチートじみてるな」

簪「零らしげって言つたら零らしいんだけど」

一夏「零、そのモンブランと俺のチーズケーキを交換しないか？」

零「それじゃ口開けろ」

一夏「あーん」

零は一口分取り、一夏の口に入れる。

一夏「モンブランも美味しいな。零も口を開けろ」

零「ああ」

一夏も零に食べさせれる。

その光景を簪とセシリ亞が羨ましそうに見ている。

零「なるほど隠し味に白ワインを……なんだお前らも交換したいのか？」

一夏「そつなら早く言えよ」

簪「いいの？」

零「全然問題無い」

セシ「お言葉に甘えて」

簪「私はモンブランを食べてみたいかな」

セシ「わたくしはチーズケーキが」

零「ほれ」

一夏「分かった」

零は簪に一夏はセシリ亞に食べさせられる。

セシ「凄く美味しいですわ」

簪「うん。本当に。今度私も買ってみようかな」

零「それじゃ、そいつの一口貰つべ」

一夏「俺も」

零と一夏は簪とセシリ亞のケーキにフォークを伸ばすが、

セシ「お待ちになつて！」

簪「ここは礼儀的に私達もちゃんと食べさせなこと」

零「そういう物なのか？」

簪「そういう物なの」

一夏「二人がそういうならいいが」

簪・セシ「はい、あーん」

-----

一夏「さて、これからどうする?」

零「どうか行くか?」

セシ「いえ!外は暑いですし、せつかくですかから!」

簪「そうだよ!それに出来れば零の部屋見たいなあ……なんて」

零「俺の部屋?ああ、ラボでも見たいのか?技術者として」

簪「ラボじゃないのか?部屋を見せるのは構わねえが」

零「ラボじゃないのか?部屋を見せるのは構わねえが」

セシ「わたくしは一夏さんのお部屋を」

一夏「俺の部屋?面白い物なんて無いぞ」

零「本棚の一戻田の広辞苑のケースの中に俺や千尋さんに隠れて買

つた面白い物があるぞ」

一 夏「何言つてんだー.?」

セシ「早く一夏さんのお部屋に向かいましょう!」

一 夏「なんでそんな物に食いついてんのー.?」

零「俺達の部屋は一階だから行へば」

一 夏「ちよつと待つて――――――――――――――――――――

一 夏を置いて、3人は2階に上がる。

零「着いたぞ。右が俺の部屋で、左が一夏の部屋。ちなみに奥の部屋は千冬さんだから、勝手に入ると殺されるぞ」

簪「あれがあの……」

セシ「当たり前ですが、織斑先生もこいで暮らしてらっしゃるんですわね」

簪「セシリ亞はまだいよ。ライバルじゃないんだから

セシ「簪さん。心中お察します」

零「なんだ? やっぱ止めとくか?」

セシ「いえ! 虎穴に入らずんば虎児を得ずと言こますし」

簪「そ、つねり。毒を食らわば目まぐらにまつ」

零「何言つてんだお前らは？そんなに広い部屋じやないが、入れ」

簪「お邪魔します……」

簪は零の部屋にセシリアは一夏の部屋に入つてく。

零「椅子は一脚しかねえしな。あ、ベッドにでもかけてくれ」

簪（べ、べ、ベッド）（もしかして）のまま？まだ心の準備が出来て無いよーうわ、うわ、うわああああああああああああああー！）

簪暴走！

ピンポン

一夏「俺が出る」

零「頼んだ。そうだ、『ウルトラマン』でも見るか？」

簪「見る」

簪の暴走は沈静しやすかつた。

バタン

櫛無「簪ちゃん！二人つきりで何やつてんのー！」

簪が最初に考えたそつこつ展開は諦めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0464t/>

---

IS カオスに原作ブレイク

2011年11月20日14時44分発行